

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 22 集

もり おか
森 岡 遺 跡
あわのすじんじゃきた
淡洲神社北遺跡

1 9 9 1

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県東部を流れる豊川の流域は、古くから栄えてきたところで、先人の遺産、足跡としての文化財・遺跡が数多く所在しています。

このたび、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、主要地方道東三河環状線建設工事にともなう事前調査として、豊橋市石巻本町地内の森岡遺跡ならびに豊川市小田瀬町地内の淡洲神社北遺跡の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施しました。森岡遺跡の調査では、弥生時代の集落、古墳等々の遺構や遺物が数多く検出され、淡洲神社北遺跡では、国府に近いことが反映してか石帯等の遺物の出土がみられるなど、当時の人々の生活・文化に関する貴重な知見を得ることができました。ここに調査結果をまとめ、報告書を作成しました。

本書がひろく、歴史研究の資料として活用されとともに、埋蔵文化財に対する御理解の一助ともなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査の実施にあたりまして、地元住民の方々をはじめとする関係各位に格別の御協力をいただきましたことに対し、深く感謝申し上げる次第であります。

平成3年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター

理事長 松川 誠 次

例 言

1. 本書は、愛知県豊橋市石巻本町森屋敷に所在する森岡遺跡および豊川市小田淵町7丁目に所在する淡洲神社北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、愛知県土木部がすすめている主要地方道東三河環状線建設工事に伴うもので、愛知県土木部から同県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間、調査担当者は以下のとおりである。
森岡遺跡 平成元年8月～10月 安井俊則 北村和宏 川井啓介
淡洲神社北遺跡 平成2年4月～6月 大橋正明 松田訓
4. 調査に際しては、次の関係機関の指導・協力を得た。
愛知県土木部 愛知県教育委員会 愛知県埋蔵文化財調査センター 豊橋市教育委員会 豊川市教育委員会
5. 遺物の整理・製図等については次の方々との協力を得た。
山本ひろみ 都築睦美 酒井三芳 白頭久代 中島たづ子 蒔田すま子 村田朋子 小宮山宏子 坂田ヒサ子 西田加代子 吉戸香代子 江川美枝子 田中志穂 今泉かおる 石川倫子 佐野香恵 志賀三津子 杉崎木綿子 中山記久子 西山朋子 福田幸子 榎木えみ子 山本章子 朝岡恵美子 河村ひろみ 清水真理子 古川陽子 松永アツ子 山本邦代
6. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。
7. 本書の執筆は、森岡遺跡の第1章～第6章第2節および第7章を北村、第5章第5節1を安井、第6章第3節を川井が担当し、淡洲神社北遺跡の第1～3章を松田が担当した。
8. 報告書をまとめるにあたり、次の方々への御教示・協力を賜った。
向坂鋼二 加納俊介 後藤健一 佐野武一 鈴木敏則 賛元洋 小林久彦 岩瀬彰利 前田清彦 須川勝以 鈴木隆可 高見俊樹 亀野均 五味裕史
9. 本書の編集は、北村が担当した。
10. 調査に関する資料はすべて(財)愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

森岡遺跡発掘調査報告

第1章 調査の経緯	(1)
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の名称と位置	(2)
第2節 周辺の遺跡	(4)
第3章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法と経過	(7)
第2節 試掘調査	(8)
日誌抄	(9)
第4章 遺 構	
第1節 基本層序	(11)
第2節 遺 構	(11)
A 弥生時代の遺構	(14)
B 古墳時代後期の遺構	(21)
C 平安時代の遺構	(30)
D 鎌倉時代の遺構	(32)
E 時期を特定し得ない遺構	(34)
第5章 遺 物	
第1節 弥生時代の遺物	(37)
第2節 古墳時代後期の遺物	
A 6世紀代	(46)
B 7世紀代	(76)
第3節 平安時代の遺物	(78)
第4節 鎌倉時代の遺物	(81)
第5節 そのほかの遺物	(83)
第6章 考 察	
第1節 遺構の時期別変遷	(86)
第2節 出土遺物に関する若干の考察	
A SD01土器群出土土器について	(89)
B SB06出土土器について	(95)
付 東三河地方における8～15世紀代の土器	(100)
第3節 豊川流域における竪穴住居に関する一考察	(107)
第7章 結 語	(120)

付 表	(12)
淡洲神社北遺跡発掘調査報告	
第1章 調査の経過	
1. 調査にいたる経過	(15)
2. 調査の経過	(15)
第2章 位置と環境	(16)
第3章 概 要	
1. 調査区と基本層序	(18)
2. 遺 物	(18)
3. ま と め	(19)

図 版 目 次

森岡遺跡

- 図版第1 上：遺跡遠景 中：調査地近景
下：発掘前の調査区
- 図版第2 調査区全景
- 図版第3 調査区全景（上北より 下南より）
- 図版第4 上：調査区北部全景 下：調査区南部全景
- 図版第5 上：調査区北部 下：調査区南部
- 図版第6 上：調査区中央 下：S D01土器群
- 図版第7 上：S D01土器群 下：S D01土器群
- 図版第8 S D01土器群近景
- 図版第9 上：S D01土器群 下：S D01土器群取り上げ後
- 図版第10 上：S B08およびS B06・S B07
下：S B10
- 図版第11 竈穴住居跡 S B09・S B12・S B02・S B06・S B03・S B07・S B04・S B01

- 図版第12 S D01土器群 出土遺物(1) 須恵器
- 図版第13 S D01土器群 出土遺物(2) 土師器
- 図版第14 S D01土器群 出土遺物(3) 土師器
- 図版第15 S D01土器群 出土遺物(4) 土師器
- 図版第16 S D01土器群 出土遺物(5) 土師器
- 図版第17 S B10・S B06・S B04・S K01出土遺物

淡洲神社北遺跡

- 図版第18 A区表土掘削
A・B区全景
- 図版第19 C区表土掘削
C区全景
C区南東壁断面
- 図版第20 調査区西景
出土遺物
- 図面第1 森岡遺跡 遺構実測図(1)
- 図面第2 森岡遺跡 遺構実測図(2)
- 図面第3 森岡遺跡 遺構実測図(3)

挿 図 目 次

森岡遺跡

- 第1図 森岡遺跡 調査区位置図（1：5,000）……………(1)
- 第2図 森岡遺跡の位置と周辺の遺跡分布図……………(3)
- 第3図 森岡遺跡周辺の朱里地割・遺跡分布図……………(5)
- 第4図 豊川下流地域の地形区分……………(9)
- 第5図 グリッド配置及び遺構全体図(1/400)……………(10)
- 第6図 調査区東壁 土層断面図（1/40）……………(12-13)
- 第7図 S B10実測図（1：30）……………(15)
- 第8図 S B08実測図（1：60）……………(16)
- 第9図 S B09実測図（1：60）……………(17)
- 第10図 S D02断面図（1：20）……………(18)
- 第11図 第1号方形周溝墓（S Z01）実測図（1：100）……………(19)
- 第12図 森岡第2号墳（S Z02）実測図(1)……………(22)
- 第13図 森岡第2号墳（S Z02）実測図(2)……………(23)

第14図	S B02実測図 (1 : 60) ……………(25)	……………(57)	
第15図	S B03実測図 (1 : 60) ……………(26)	第36図	S D01土器群 (A群) 出土土器実測図
第16図	S B06実測図 (1 : 60) ……………(27)	(1) (1 : 4) ……………(58)	
第17図	S B07実測図 (1 : 60) ……………(28)	第37図	S D01土器群 (A群) 出土土器実測図
第18図	S B01およびS B04実測図 (1 : 60)	(2) (1 : 4) ……………(59)	
……………(31)		第38図	S D01土器群 (A群) 出土土器実測図
第19図	S K01遺物出土状態実測図 (1 : 20)	(3) (1 : 4) ……………(60)	
……………(33)		第39図	S D01土器群 (A群) 出土土器実測図
第20図	S B11実測図 (1 : 60) ……………(35)	(4) (1 : 4) ……………(61)	
第21図	S B12実測図 (1 : 60) ……………(35)	第40図	S D01土器群 (A群) 出土土器実測図
第22図	平安時代 掘立柱建物 (S B13) 実測	(5) (1 : 4) ……………(62)	
図 (1 : 50) ……………(36)		第41図	S D01土器群 (B群) 出土状態図 上
第23図	S B10・S B08出土土器実測図 (1 :	実測図 (1 : 20) 下 模式図 (1 : 60)	
4) ……………(38)		……………(63)	
第24図	S B09・S K40・S K43・S K46・S	第42図	S D01土器群 (B群) 出土土器実測図
K117・S K14・S K139・S K125・S		(1) (1 : 4) ……………(64)	
D08・S D11出土土器実測図 (1 : 4)		第43図	S D01土器群 (B群) 出土土器実測図
……………(39)		(2) (1 : 4) ……………(65)	
第25図	S D02・S D08出土土器実測図 (1 :	第44図	S D01土器群 (B群) 出土土器実測図
3) ……………(41)		(3) (1 : 4) ……………(66)	
第26図	包含層出土弥生土器実測図 (拓本 1 :	第45図	S D01出土群 (B群) 出土土器実測図
3 実測図 1 : 4) ……………(43)		(4) (1 : 4) ……………(67)	
第27図	石器実測図……………(44)	第46図	S D01土器群 (B群) 出土土器実測図
第28図	弥生土器 (包含層) 出土地点……………(45)	(5) (1 : 4) ……………(68)	
第29図	石器出土地点……………(45)	第47図	S D01出土群 (B群) 出土土器実測図
第30図	S D01土器群出土状態図(1) (1 : 30)	(6) (1 : 4) ……………(69)	
……………(48)		第48図	包含層出土土器・須恵器・土師器実測
第31図	S D01土器群出土状態図(2) (1 : 30)	図 (1 : 4) ……………(75)	
……………(49)		第49図	S B02・S B05・S B07・S B06・S
第32図	ナデ・ハケ調整……………(50)	X01出土土器実測図 (1 : 4) ……(79)	
第33図	土師器器種分類表 (壺・台付壺・埴)	第50図	S B04・S K03・S K01・S K70・S
……………(52)		K149出土土器実測図 (1 : 4) ……(83)	
第34図	S D01土器群出土状態模式図(1 : 24)	第51図	縄紋土器実測図 (1 : 3) ……………(84)
……………(56)		第52図	土製品・石製品・ガラス製品実測図
第35図	S D01土器群 (A群) 出土状態図 上	……………(85)	
実測図 (1 : 20) 下 模式図 (1 : 60)		第53図	弥生時代中～後期の遺構……………(87)

第54図	古墳時代の遺構（6世紀）……………(87)
第55図	古墳時代の遺構（7世紀）……………(87)
第56図	平安時代（10世紀末）の遺構……………(87)
第57図	鎌倉時代（13世紀）の遺構……………(87)
第58図	S D01土器群（須恵器・土師器・高杯・ 碗・鉢）……………(90)
第59図	S D01土器群（甕A）……………(90)
第60図	S D01土器群（甕C）……………(90)
第61図	S D01土器群（台付甕）……………(90)
第62図	須恵器編年図……………(91)
第63図	東山第61号窯出土品(上)と森岡遺跡出 土品(下)(1:4)……………(92)
第64図	宮沢遺跡・水神第2号窯・伊場遺跡・ 西笠子第64号窯跡出土品……………(93)
第65図	森岡遺跡S D01土器と相前後する土器 ……………(95)
第66図	白山II遺跡・森岡遺跡・諏訪遺跡・杉 山遺跡出土品（1:8）……………(97)
第67図	公文遺跡・諏訪遺跡・真宮遺跡・西浦 遺跡・郷中遺跡出土品（1:8）……………(100)

68図	諏訪遺跡・高橋遺跡・真宮遺跡出土品 （1:8）……………(101)
第69図	甕の口縁部（1:2）……………(101)
第70図	宮沢遺跡・郷中遺跡・森岡遺跡・杉山 遺跡・麻生田大橋遺跡出土品（1:8） ……………(104)
第71図	8～15世紀代の土器変遷図（煮沸具を 中心とした）（1:12）……………(106)
第72図	遺跡位置図及び遺跡別検出住居数一覧 ……………(108)
第73図	竪穴住居変遷図……………(115)

淡洲神社北遺跡

第74図	愛知県位置図……………(126)
第75図	豊川市位置図……………(126)
第76図	周辺遺跡位置図……………(127)
第77図	調査区基本土層図……………(128)
第78図	調査区位置図……………(128)
第79図	淡洲神社北遺跡・出土遺物実測図(130)

表 目 次

森岡遺跡

第1表	豊橋市の月別平均気温・降水量 （1979～1987年）……………(4)
第2表	主要遺構時期別一覧……………(14)
第3表	弥生時代の土坑（SK）……………(21)
表4表	古墳時代（7世紀中心）の土坑（SK） ……………(29)
第5表	包含層出土 弥生土器一覧表……………(45)
第6表	石器一覧表……………(45)
第7表	S D01土器群 出土土器一覧……………(70)
第8表	S D01土器群（A群）出土 須恵器法 量表……………(74)
第9表	S D01土器群（B群）出土 須恵器法

量表……………(74)

第10表	S D01土器群 器種構成表……………(90)
第11表	豊川右・左岸別検出住居一覧表 ……………(115)
第12表	時期別検出住居一覧表……………(116)
第13表	豊川流域竪穴住居一覧表……………(117)
	<付表>
第14表	出土遺物登録番号一覧表……………(121)

淡洲神社北遺跡

第15表	調査日程……………(125)
第16表	掲載遺物一覧表……………(131)

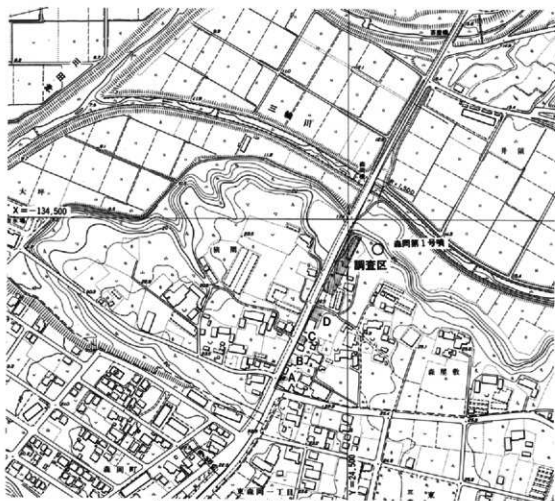
森岡遺跡発掘調査報告

第1章 調査の経緯

豊橋市を中核とする愛知県の東部の東三河地方では、道路交通量が時代とともに激しさを増し、各地で交通渋滞を生み出している。主要地方道東三河環状線は、こうした現状に対処するため、愛知県土木部によって豊橋市を中心に環状に巡る都市計画道路として計画設定されたものである。

今回の森岡遺跡（愛知県豊橋市石巻本町森屋敷）の発掘調査は、この東三河環状線建設工事に伴う事前調査として、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施したものである。

調査期間は平成元年6月29日の雑木林の伐採から、同年10月20日の現地調査終了までの4カ月間であり、調査面積は1,000㎡である。



第1図 森岡遺跡 調査区位置図 (1:5,000)

拠：豊橋市都市計画基本図27 (1:2,500国土基本図VII-OE 46-3)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の名称と位置

1. 遺跡の所在地と名称

森岡遺跡は、愛知県豊橋市石巻本町森屋敷地内に所在する。調査区および試掘トレンチの地籍は下記のとおりである。ただし、今後の道路建設によりこれらの地番は抹消されることになる。

調査区	愛知県豊橋市石巻本町森屋敷1-2・3、2-1・2番地	
試掘トレンチA	愛知県豊橋市石巻本町森屋敷15-21番地	
試掘トレンチB	同上	11-5・6番地
試掘トレンチC	同上	11-3番地
試掘トレンチD	同上	6-4番地

調査地点は古くから「森岡古墳群」として注意されてきたところで、『愛知県遺跡分布図』（1972年3月刊）によれば調査区域内に2～3基の古墳の所在が記されている。

工事計画が具体化し、発掘調査に先立って詳細な分布調査を行なったところ、調査対象地には廃材の山が2～3箇所みられたものの明確な墳丘状の盛り上がりは認められず、むしろ所々にあけられた近時の擾乱坑の排上中より弥生土器・土師器・須恵器・所謂「山茶碗」等の小片が採取されたため、古墳の有無はともかくとして弥生時代～鎌倉時代にかけての「集落」遺跡の存在が確実視されたのである。そこで便宜的に古墳も遺構の一つとの立場から古墳も含めた遺跡名として「森岡遺跡」と命名し、調査をすすめていく過程で古墳が検出された場合はそれを「森岡第〇号墳」と呼ぶこととした。

調査後に愛知県教育委員会により刊行された『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）』（1990年3月刊）では、調査地点を東端とした東西250m・南北180mを「狭間遺跡（通称森岡遺跡）」（遺跡番号79334）とし、同じく調査地点以东の凡そ東西120m・南北200mの範囲を12基からなる「森岡古墳群」（遺跡番号79335～79348）として「集落遺跡」と「古墳」とを分けている。しかしながら、後述のように今回の調査による遺構の検出状況からすれば、その範囲は特定出来ないものの、弥生時代・古墳時代・平安時代の集落跡はさらに東方まで広がることは確実であり、厳密には狭間遺跡と森岡古墳群とを面的に分けることは困難であると考えられる。このように、遺跡範囲に問題点があるものの『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）』に従って「狭間遺跡」の呼称を用いるべきかもしれないが、これまでの調査関係記録から土器片への注記までのすべての作業において「森岡遺跡」で処理してきたため、本書では同名を遺跡名として用いることとした。



第2図 森岡道跡の位置と周辺の道跡分布図

[1 : 100,000]

1. 森岡道跡 2. 杉山道跡 3. 諏訪道跡 4. 宮沢道跡 5. 西橋道跡 6. 三河国府推定地 7. 三河国分寺跡
8. 国分尼寺跡 9. 石堂野道跡 10. 浜洲神社北道跡 11. 長米道跡 12. 欠山道跡 13. 下長山道跡 14. 麻生田大橋道跡
15. 郡中道跡 16. 馬越長火塚古墳 17. 白山1道跡 18. 西原歌日道跡 19. 浪之上道跡 20. 牛川岡窟 21. 五貫森道跡
22. 水神古宮 23. 大海津道跡 24. 市道道跡 25. 公文道跡 26. 見丁塚道跡

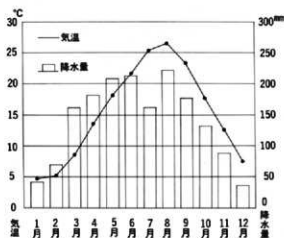
2. 遺跡の立地

森岡遺跡は、愛知県東部の東三河地方を中央構造線に沿って北東から南西に流れる豊川(一級河川)の downstream 左岸に形成された河岸段丘(中位面)上の段丘崖近くに立地している¹⁾。この中位段丘面は「豊橋上位面」等と呼ばれるもので、砂・礫とシルトの互層からなり、調査区について言えば南部がシルト質で北に移るにつれて砂礫土となる。その形成時期は約4万～3万年前の最終間氷期とみられ、同時期に形成された段丘としては、近くでは名古屋市の熱田面・静岡県の三方原面・磐田原面が挙げられる。本遺跡は豊橋市北東部にある石巻山(標高358m)から流れる神田川および矢田川がこの中位段丘面を開析して形成した谷底平野(現水田)を北に望む段丘縁部に位置する。西には小規模な開析谷が存する。調査地点の標高は24m前後で、水田面との比高差は10mを測る。調査区北の崖下に畑として利用されている高まりが存するが、これは調査区西側の県道を直線化した際に削り取った土砂で埋め立てた由である。

つぎに遺跡の立地を考える際の重要な要素の一つである遺跡をとりまく気象条件について少しふれておきたい。森岡遺跡が所在する豊橋市地方の気候は、暖候期の高温・多雨、寒候期の小雨・乾燥で特徴づけられる所謂「太平洋岸式気候」に属す。日平均気温は8月が26℃前後、1月が4～5℃前後で、年平均気温は15.3℃、年平均降水量は1,755mmほどである(第1表)。

卓越風は冬季が西北風、夏季が東南風で、その交替期は5月にある。冬季の西北風の方が強く、空気が乾燥していることと相俟って気温のわりに寒さを感じるものとなっている。なお無霜日は年間を通じて230日以上ある²⁾。

第1表 豊橋市の月別平均気温・降水量(1979～1987年)



第2節 周辺の遺跡

森岡遺跡の位置する豊橋市の北部は、市域のなかでは遺跡・古墳が比較的多く分布する地域である。第3図に森岡遺跡周辺の主要な遺跡の分布状況を『愛知県遺跡分布地図(III)』(1990年)に基づいて示した。いままでもなく森岡遺跡は、これらの遺跡とのかかわりのなかで理解・説明される必要がある。しかしながらそのためには旧地形の復元等々、解決すべき問題が多く、成案を得るにいたっていない。こうした点については将来の課題としておき、いまは旧石器時代から「中世」にかけての主な遺跡の紹介にとどめたい。

旧石器時代 第3図の範囲外であるが、森岡遺跡の南方2.75kmに「牛川人」で著名な牛川洞窟遺跡が



第3回 森岡遺跡(14・15)周辺の桑里地形(上)および遺跡分布図(下) 1:25,000

- | | | | | |
|---------------|---------------|--------------|-----------|--------------|
| 1. 西側遺跡 | 2. 東側遺跡 | 3. 中郷遺跡 | 4. かあごの宮跡 | 5. 稲荷前遺跡 |
| 6. 浪ノ上遺跡 | 7. 波之上古屋敷跡 | 8. 浪ノ上1号墳 | 9. 稲荷山1号墳 | 10. 稲荷山2号墳 |
| 11. 中野遺跡 | 12. 狭間1号墳 | 13. 狭間2号墳 | 14. 狭間遺跡 | 15. 森岡古墳群 |
| 16. 西瀬遺跡 | 17. 金田北山遺跡 | 18. 東屋敷遺跡 | 19. 石神遺跡 | 20. 神ノ谷遺跡 |
| 21. 札辻遺跡 | 22. 多ノ畑遺跡 | 23. 馬場遺跡 | 24. 金割遺跡 | 25. 西屋敷1遺跡 |
| 26. 西屋敷II遺跡 | 27. 一ツ木遺跡 | 28. 青木I・II遺跡 | 29. 白山I遺跡 | 30. 白山II遺跡 |
| 31. 入田遺跡 | 32. 丸山遺跡 | 33. 桑原遺跡 | 34. 白石遺跡 | 35. 庄ノ下遺跡 |
| 36. 高井遺跡 | 37. 西砂原遺跡 | 38. 大清水遺跡 | 39. 日南取遺跡 | 40. 高井1~23号墳 |
| 41. 高井24~30号墳 | 42. 高井31~33号墳 | 43. 高井34号墳 | 44. 池尻遺跡 | 45. 熊野遺跡 |

ある。

縄紋時代 大清水遺跡(38 早期)、多り畑遺跡(22 後期)、白石遺跡(34 晩期)等がある。殊に白石遺跡では数千点の石鏝が表面採集されており、豊川を挟んで対岸に位置し打製石斧の出土が数千点におよぶ麻生田大橋遺跡(豊川市 晩期)とその在り方の相違が注目される。

弥生時代 前期の遺跡としては所謂遠賀川式系土器が出土した前出の白石遺跡(34)のほか、水神平式土器が出土した稲荷前遺跡(5)・金田北山遺跡(17)等がある。中～後期の遺跡は数多く、中位段丘縁辺に带状に連なる感がある。森岡遺跡もそうしたなかの1つである。代表的な遺跡としては、神田川を挟んで調査区と対峙する段丘上に位置し、山中式(寄道式)土器のまとまった出土が報じられる大清水遺跡、調査区の南西7kmのところの位置し欠山式期の墳墓として学史上著名な浪ノ上第1号墳(8)および浪ノ上遺跡(6)⁽¹⁾が挙げられる。

古墳時代 前期の遺跡として所謂「元屋敷式土器」が出土した浪ノ上遺跡(6)・高井遺跡(36)等があげられるが、中期の遺跡は判然としない。後期の遺跡としては、西屋敷II遺跡(26)・白山II遺跡(30)(ともに6世紀末～7世紀代)等がある。総じて古墳時代の集落遺跡については情報が少ない。

古墳についてみると、神田川右岸(高井古墳群34基 40～43)および三輪川左岸(森岡古墳群12基ほか)の縁辺部に数多く分布するが、年代等その実態については必ずしも明らかでない。上記浪ノ上第1号墳・稲荷山第1号墳(9)の調査所見(ともに古墳出現と相前後する時期)からすれば、これらの古墳の中にはかなり年代が遡るものが含まれている可能性がある。中期の古墳としては石枕の出土で著名な「中野古墳」がある。その正確な位置を知ることが出来ないが、おそらくは狭間第1・2号墳あたりの一角に存したものとみられている⁽²⁾。

奈良・平安時代 前代同様、調査例が少なくその様相は判然としない。代表的な遺跡としては墨書のある須恵器・灰釉陶器および「長年大室」を排出した蔵骨器(灰釉陶器瓶)が採集されている大清水遺跡(38)があげられる⁽³⁾。このほか既に失なわれているがかつて三輪川沿いに認められた桑里制地割の存在は、施行年代を特定し得ないものの、この時代以降の遺跡の在り方を検討する上で注意する必要がある⁽⁴⁾。ちなみに神田川左岸の「神郷」地区およびその周辺を『和名抄』にみる「八名郡 美和郷」の故地と見做す説がある。

鎌倉時代以降 所謂中世の集落跡の調査例はないが、段丘の縁辺から低地にかけての各地で中世土器・陶器が採集されることからみて集落はかなりの広がりをもせるものと推察される。波之上古屋敷(7)は戦国期の戸田氏の居館跡とされるものである。

(註)

(1) 地形の叙述にあたっては、下記の文献を参考にした。

水野季彦 1990 「第2章 1、遺跡の立地」『見丁塚遺跡』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書第11集)豊橋市教育委員会

(2) 気候の叙述にあたっては、下記の文献を参考にした。

名古屋地方気象台 1972 『愛知県の気象(続)』ほか

(3) 豊橋市教育委員会 1983 『浪ノ上第1号墳調査概報』

「以下9頁へ」

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法と経過

道路用地として買収される前の調査区は、その北半が畑・果樹園で南半が屋敷地として利用されていた。調査を開始した時点での調査区の状況は、屋敷移転に伴う建物の取り壊し、廃材の放置および竹・雑木の繁殖で荒廃を極めていた。調査に先立つ踏査では、廃材の山が2～3箇所認められたものの、既述のように「愛知県遺跡分布図」に記されている古墳の存在を伺わせる墳丘状の明確な盛り上がりは認められず、むしろ所々にあけられた近年の攪乱坑の排土中より弥生土器・土師器・須恵器・所謂「山茶碗」等が採取され、古墳の有無はともかくとして当該期の集落跡の存在が予想されることであった。

調査は、まず生い茂った竹・雑木林を伐採することから着手した。特に調査区西側の道路に面した崖面の樹木はかなりの大木で、直下に交通量の多い道路が控えているためその作業は困難を極めた。

続いて調査区内に放置・投棄された廃材等の山を重機で排除することを行なった。廃材の山の下に古墳の墳丘が遺存する可能性が残されていたので慎重に作業を行なった。ところが予期に反し、墳丘状の高まりがみられるどころか、数箇所においては逆に地面に大きな穴を掘って廃材が投棄されているという有様であった。

こうした状況に基づき、仮に古墳が認められるとしても調査区北半では耕作土の下、南半では屋敷地の整地土の下であろうとの予測をたてながら、次に耕作土及び整地土（第IV・V層以下両者を表土と呼称する）の除去作業を重機で行った。その際、台地の上の遺跡という性格上基盤面（第I層以下地山）までが浅いため掘り過ぎて包含層・遺構を壊す恐れがあるため表土の下半部を幾分残し、後は人力で行なうことにした。

表土剥ぎが一段落したところで、5m四方のグリッドを基本とする調査区の地区割り・杭打ちを行なった（第5図）。

ついで手掘りによる包含層掘り下げ及び遺構の検出作業を開始した。まず表土の残りの掘削および予め調査区の土層を把握しておくために東壁に沿って幅0.50mトレンチを入れることから行なった。東壁沿いにあけたトレンチの土層断面の観察によって、調査区北半においては耕作土（第IV層）の下に薄い遺物包含層である暗灰褐色土（第II層）が残る黄白色土の地山（第I層）に続くこと、南半では宅地造成に伴う攪乱・填圧が進んでいるものの、堅穴式住居跡・溝・土坑等の遺構が調査区の南端部を除くほぼ全域にわたって分布することが知られた。

続いて、遺物包含層（第II・III層）の掘り下げおよび遺構検出作業に入ったが、結果的には地山面に至って確認された遺構が殆どで、遺構の検出面を層位的に捉えることはできなかった。殊に今回の調査で注目されたS D01（古墳の周溝）土器群は、その上半が建物の基礎および地業固め填圧により一部攪乱を受けるとともに土器が細かく砕けてしまっているという状況であった。

遺構埋土の掘削では調査区北部の竪穴式住居跡の重複関係、あるいは上記のS D01と土器群との関係など十分判別し得なかったものもある。

竪穴式住居跡（S B）内の遺物については、可能なかぎり一点記録方式を取ることとした。しかし竪穴式住居跡は何れも検出された壁高が10～15cmと遺存状況が悪かったため、各々の重複関係を判別することが難しいものがあった（S B02～05）。

溝（S D）については、層位別に掘り下げることとしたが、実際の作業では層の分別に成功したとはいえず、その年代決定等に問題をのこすものもみられた。

土坑（S K）のうち、殊に竪穴式住居跡内のものについては柱痕の確認に努めたが、これが認められたものは一例もなかった。

遺構の実測は写真測量（1/50の縮尺）によって行なったが、竪穴式住居跡についてはあわせて手測りによる実測（1/20）を行なった。

第2節 試掘調査

今回の調査では、遺物が表面採集された崖端より南へ約100m入ったところにあるガソリンスタンド跡地までを調査対象地とし、以南の道路拡幅工事未了部分125mについては発掘調査と併行して試掘調査を行ない遺跡の広がりや認められた場合にはあらかじめ協議し、対処する事となっていた。試掘調査対象地はいずれも旧宅地で、調査時には移転が終了していた。調査所見は以下の通りである。

試掘坑は、対象地125mに対して四箇所（南からA B C D）設定し各トレンチは2×5mを基本とした。（第1図）

- A トレンチ 極薄い表土（腐植土）の直下が地山で、遺物・遺構とも認められなかった。
- B トレンチ 薄い表土（腐植土）の直下が地山で、遺物・遺構とも認められなかった。
- C トレンチ 建物構築に伴う擾乱土中より条痕紋土器片が1点採取されたため、トレンチをかなり拡幅したが、ほかに遺物・遺構は認められなかった。
- D トレンチ 調査区に最も近いトレンチ。結果的に15×10m（150㎡）ほど開けたが、検出された溝・土坑はいずれも現代のもので、ガラス・磁器・瓦等を含む埋土中から弥生土器・土器片が僅かに出土したにとどまった。

このようにC・Dトレンチから若干の遺物が出土したものの、あきらかな遺構は認められなかった。とくにDトレンチでは150㎡も開けたにもかかわらず、現代のガラス・陶磁器を除く遺物量はビニール袋1袋に充たないものであった。このことは調査区南部において遺構が次第に希薄になり、遺物量が激減するという状況と軌を一にするものである。以上の試掘調査結果に基づき、試掘対象地への遺跡の広がりは認められないものと判断し、本調査の対象とはしなかった。

日誌抄

<調査区>

6・29～7・05 調査区内の伐採および重機による腐材除去作業。

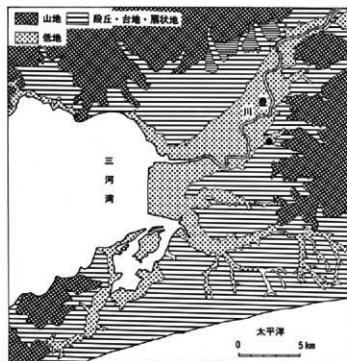
- 7・6～7・14 重機による表土剥ぎ。
 8・17～18 発掘調査器材の搬入。調査区の設定・枕打ち。
 東壁トレンチを入れる。
 8・21 表土（旧耕作土等）の残土除去。覆乱杭の清掃。
 西、南、北壁の清掃。
 8・22～9・11 包含層（第Ⅱ・Ⅲ層）の掘り下げおよび
 遺構検出。
 9・12～27 遺構掘り、遺物取り上げ。
 9・28 遺構写真撮影
 9・29 空中写真測量。
 10・2～4 墓穴式住居跡の立ち割り、土層図の作成。
 10・5～20 S D01土器群の実測および取りあげ。
 10・20 現場での調査終了。発掘調査器材撤収。

<試掘調査>

- 9・28 試掘トレンチA・Dを入れる。
 9・29 試掘トレンチB・Cを入れる。
 10・2～5 試掘トレンチAの拡張、実測。

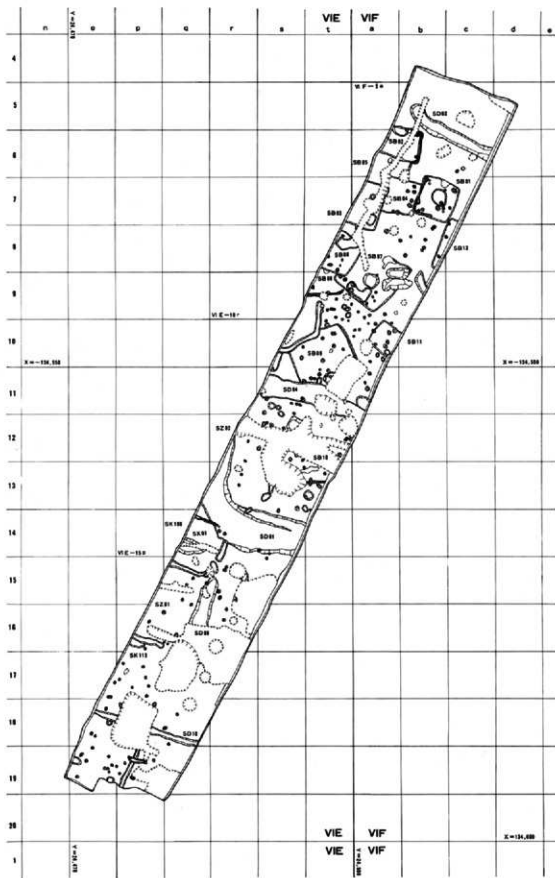
「6頁（註）の続き」

- (4) 「万福寺古墳」(瓜郷遺跡調査会 1968)のなかで、「斧状と刀子状の附属品をもつ滑石製石枕が出土した中野一番地古墳(森屋敷古墳群—表中では森岡古墳群とある)」とあって、現愛知大学保管の石枕が森岡古墳群出土品とされる
 ことがある。現在出土古墳を特定できないが、『八名郡誌』(愛知県八名郡役所 1925)によれば、「石巻村大字神ヶ谷
 字中野一番地」とあって、調査地点の西、「字狭間」の西側が旧「字中野」でありおそらくはそのあたりに存した古墳
 の可能性がある。
 (5) 小畑頼孝 1985 「皇朝十二銃を伴出した蔵骨器」(『ホリデー考古』第3号)
 (6) 歌川 学 1960 「東三河地方における条里制遺構Ⅱ」(『愛知県大学総合郷土研究所紀要』第6輯)



第4図 豊川下流地域の地形区分(●印 森岡遺跡)

拠：井関弘太郎他 1969 『日本地誌 第12巻』 二宮書店 図188 一部改変



第5図 グリッド配置および遺構全体図 (1:400)

第4章 遺 構

第1節 基本層序

調査地は、北に神田川を望む豊川左岸の中段段丘面の崖部に位置する。標高は22.0m前後で、調査区の北側に広がる現水田面との比高差は10m前後をはかる。

既述のように調査地は、道路用地として買収された後の家屋解体に伴う攪乱、廃材の投棄などで荒廃していたが、以前はその北半が畑・果樹園で、南半が屋敷地（一部畑地）であった。このことを反映してか、土層は北部と南部とでは異なる。

調査区の北半、すなわち旧畑地にあたる部分の基本層序は、上から旧耕作土(第IV層)、暗灰褐色土(第II層)、地山(第I層、中段段丘面、砂礫混じりの黄褐色土)の順で、南半の旧屋敷地部分では、上から盛土、整地土(第V層 一部は買収後の盛土?)および旧耕作土(第IV層)、塚庄をうけた土層(第III層、基本的には遺物包含層、黒褐色土)、地山(第I層)となっている。

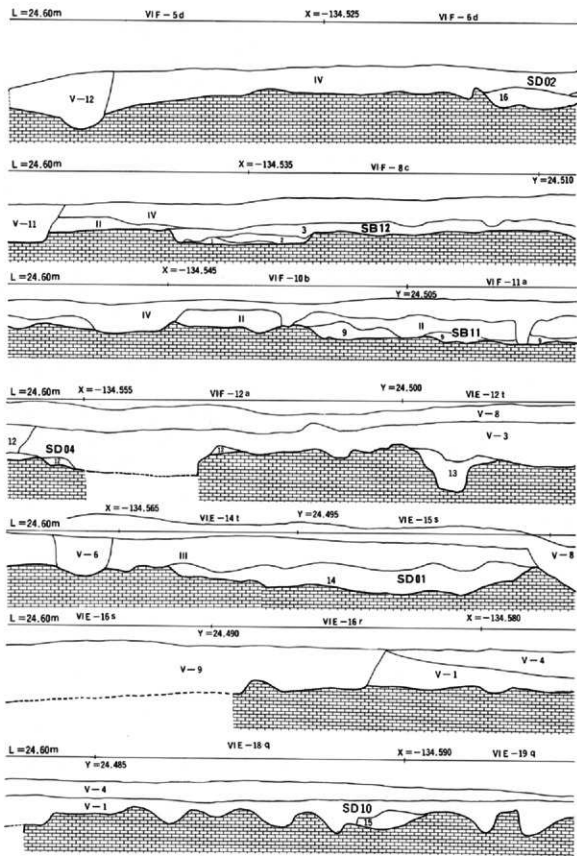
土層断面図(第6図)では第II層をはさんで遺構の検出面が層位的に把握されるものの、この第II層が分布する調査区北半では植物の根が地山近くまで蔓延っており、加えて堅穴式住居跡の切り合いが多いことも原因してか、実際の遺構検出では遺構を層位的に捉えることは困難を極め、結果的に同一面、すなわち黄褐色を呈する地山(第I層)で行なうこととなった。遺構検出面の標高は24.0m±0.30m前後で、検出面はほとんど平坦地といつてよい。

なお、検出された住居跡の壁高が10~15cm前後という残存状況からみて、遺構造営時の旧地表面については既に失われているものと考えられる。

第2節 遺 構

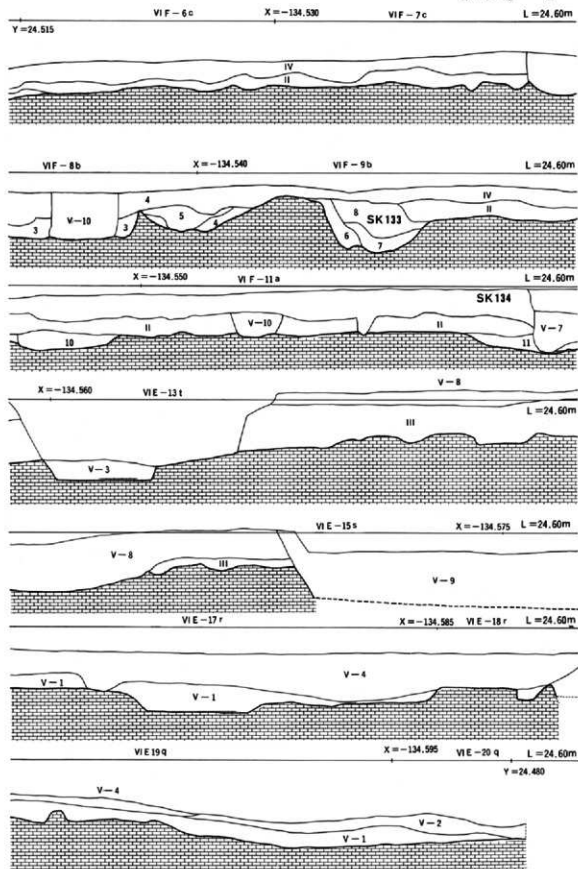
今回の調査区で検出した主な遺構は、堅穴式住居跡(SB)12棟、溝(SD)6条、方形周溝墓(SZ)1基、古墳(SZ)1基、土坑(SK)多数である。これらは一時期に形成、存在したのではなく、遺構相互の重複・位置関係及び遺構に伴う出土遺物の型式差からみて、大きく4時期に区分できる。すなわち、A)弥生時代中~後期、B)古墳時代後期(6~7世紀)、C)平安時代(10世紀末)、D)鎌倉時代(13世紀代)である。

以下、検出した遺構について、A~Dの順で時期別に個々の遺構の調査所見を記すことにする。もとより時期不明の遺構(大半が小土坑)もありこれらについては主なものについてのみみられることとする。このほかに少量ではあるが縄紋土器(晩期)、奈良時代の須恵器等の遺物が包含層あるいは他時期の遺構埋土中より採取されている点は時期不明の遺構のなかに当該期の遺構が存在する可能性を示唆



第6図 調査区東壁 土層断面図(1/4)

第I層 黄灰褐色土(地山・中位段丘 シルトと砂礫層の互層) 第II層 暗灰褐色土 第III層 黒褐色土(一部建物構築のため
 傾圧を受ける) 第IV層 田積存土(畑) 第IV層 礫土・粘土・擾乱 V-1 礫地土 V-3-3-12 擾乱土 V-2 砕石



第I層 黄灰褐色土(地山・中位段丘、シルトと砂礫層の互層) 第II層 暗灰褐色土 第III層 黒褐色土(一部建物構築のため傾圧をうける) 第IV層 田耕作土(畑) 第IV層 整地土・盛土・覆土 V-1 整地土 V-3-12 覆土 V-2 碎石

しており留意すべきであろう。

なお、遺構番号については、本報告にあたり発掘調査時に付けた番号を基本的に踏襲しつつ、ごく一部についてのみ番号の整理・改変をおこなった。これについては、そのつどふれることとする。また、遺構の計測値はとくにことわらないかぎり遺存値である。

A 弥生時代中～後期の遺構

弥生時代の遺構は調査区全域にわたって検出され、竪穴式住居跡（SB）3棟・溝（SD）1条・方形周溝墓（SZ）1基・土坑（SK）17基がある。出土遺物からみてSB09が弥生時代後期（山中式期）とみられるほかは、いずれも中期（高藏式期）のものである。

竪穴式住居跡（SB）

第10号竪穴式住居跡（SB10 第7図 図版第10）

調査区のはほぼ中央、VIE-12s・12t・13s・13tグリッドにまたがって検出された。大半は近年の攪乱により壊されているが、壁および周溝の一部と見られる段差・溝が認められたことから竪穴式住居跡と認定したものである。

平面形・規模 壁および周溝の一部が遺存するのみで正確を期せないが、壁および周溝は直線的であり円形プランのものは想定し難い。ちなみに遺存する南辺の方位はE-5度-Nである。規模につい

第2表 主要遺構時期別一覧

遺構	時代	A 弥生時代 (高藏期) (山中期)	B 古墳時代後期 (6世紀) (7世紀後半)	C 平安時代 (10世紀末)	D 鎌倉時代 (13世紀)	時期を特定 し得ない
建物 (の) (B)	竪穴式住居	SB10 SB08	SB02 SB03 SB05 SB06 SB07 (SX01)	SB01 SB04		SB11 SB12
	附立柱建物			SB13 ←	? ←	
墳墓(SZ)		SZ01 (SD08) SK106 SK113	SZ02 (SD01-04)			
溝(SD)		SD02				SD10
土坑(SK)		SK19 SK40 SK43 SK45 SK46 SK117 SK139 SK124	SK1811	SK03 SK1008 SK1012 SK2103 SK2106 SK154	SK01 SK149 SK70 SK60 SK157 SK65	(省略)
		SK45 SK125	S K13・19 S K50・53 S K88・110 S K113・127 S K134			

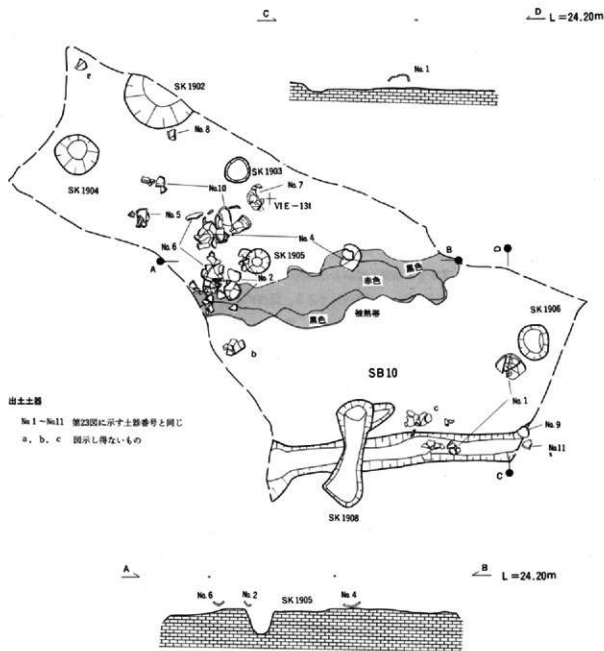
※竪穴式住居跡内の土坑については省略した。

ては残存床面からみて少なくとも東西5m・南北3m以上はある。

壁・周溝 壁高は5cm前後で、緩やかに立ち上がる。壁に沿って幅15cm・深さ4cmの周溝が巡る。

床面 地山を掘り込んで床面としており、ほぼ平坦である。

柱穴 柱穴と特定し得るものはないが、床面上に柱穴状の小土坑が5基みられる。埋土はいずれも黒褐色土であるが、SK1902は幾分締まりを欠く。SK1905は床面上に散乱する土器群下に位置しており、これら土器群は最終床面上に散乱したものと解釈されるため、少なくとも廃絶時点の柱穴と見る



第7図 SB10 実測図(1:30)

ことは出来ない。

炉 炉とは言えないが、南壁から北へ1.3m離れた床面上に壁と方向を同じくする長さ2.07m(両端は攪乱により欠損)・幅0.50m前後・厚さ0.06mの被熱部分が広がっている。より仔細に観ると、地山の床面直上に厚さ3cm程の炭化物を含む黒色土が存し、その上に被熱し赤色ないし赤灰色を呈する粘土(厚さ3cm程)がのり、というものである。被熱した粘土面上に灰・炭化物の明瞭な広がり認められなかったが、明らかに粘土を貼ってから被熱しており、その性格は不明であるが屋内で火を炊いた跡とみられる。同様な被熱帯の事例は近くでは浪ノ上遺跡にある¹⁾。

埋積土の状況 大半が攪乱により失われており、遺存する壁高が5cm前後という状況から伺われるように、床面近くまで後世の攪乱が及んでいるという状態で、埋土が黒褐色土というほか埋積状況については判然としない。

遺物の出土状況 床面上(直上ないし床面から数cmの間)に11個体以上の土器(壺7点以上、甕2点、高杯2点)が出土。口縁部から底部まで残る土器が3個体もみられることから、この竪穴式住居の廃絶時には完成品が放置されていた可能性がある。

遺構関係 時期を特定し得ないSK1908により、壁および周溝が覆されている。

時期 床面上出土の土器は全て「高塚式土器」で、弥生時代中期と考えられる。

第8号竪穴式住居跡(SB08 第8図 図版第10)

調査区の中央やや北より、VIE-8 1・9 t グリッドから検出された。西半分は調査区外で、北～東側はSB06・SB07に切られており、住居跡の大部分は失われている。

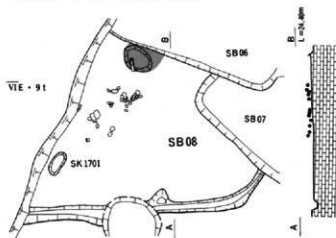
平面形・規模 僅かに遺存する南側の壁および周溝からみて、「隅丸方形」プランを呈するものと思われる。南壁の直線部の方位はE-5.5度-Nである。規模については不明。

壁・周溝 壁高は5cm前後で緩やかに立ち上がる。壁に沿って幅12cm・深さ8cmの周溝が巡る。壁と周溝南斜面は一体となっている。

床面 地山を掘り込んで床面としており、ほぼ平坦である。

柱穴 柱穴と特定し得るものはないが、床面上に小土坑が2基みられる。

炉 南壁から北へ2m離れたところで「地床炉」を検出。床面に長径60cm・短径40cm・深さ5cm前後の浅い土坑を穿ち、土坑内の西南部に縦24cm・横10cm・厚さ5cmの直方体の石(石質はチャート)を南北方向に長く立てるという構造のもので、土坑の内側は被熱のため黄褐色の地山が赤変し、炭化物・焼土塊・灰?の混じった土が土坑内およびその周辺に堆積して



第8図 SB08 実測図(1:60)

いた。

埋積土の状況 埋土は黒褐色土の一層のみで埋積状況については定かにし得ない。

遺物の出土状況 伊勢の南西側の床面上の1.0×0.5mの範囲から土器片が集中して出土。殆どが甕でごく僅かに甕の小片のみみられるにとどまる。

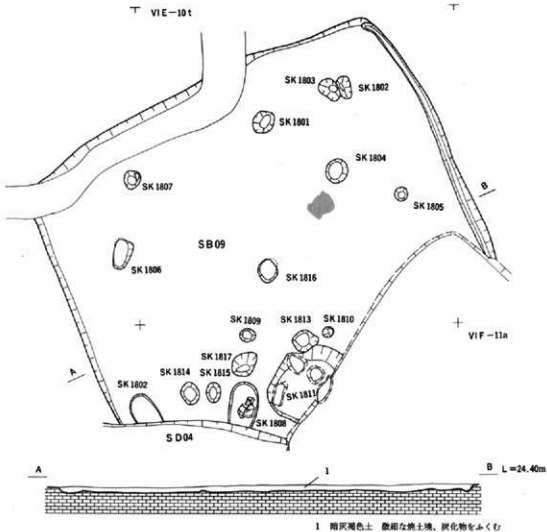
重複関係 SB07およびSB03に切られる。

時期 床面上出土の土器はいずれも「高藏式土器」で、弥生時代中期と考えられる。

第9号竪穴式住居跡（SB09 第9図 図版第11）

調査区の中央やや北寄り、VIE-10s・10t・11s・11t・10aグリッドにまたがって広がる。上記SB10・SB08の間に位置する。壁高はさほどないものの後の時期の遺構および擾乱により損なわれている箇所を除き、プランは明瞭に確認された。

平面形・規模 平面形は「方形」を呈するが、遺存する北東隅は僅かに円みを帯びる感がある。南壁



第9図 SB09 実測図(1:60)

および西・東壁の一部を欠く。規模は東西6.56m・南北(5.70+ α)mで、北壁の方位はN-22.5度-Wである。

壁・周溝 壁高は3~10cmほどで、緩やかな立ち上がりである。東壁に沿って周溝(幅15cm・深さ2~4cm)が認められる。断面はU字形を呈する。

床面 地山を掘り込んで床面としている。床面は北西部が幾分低いものはほぼ平坦である。

柱穴 床面上に小土坑が17基みられる。いずれも柱度は確認されなかったが、位置的にみてSK1803・1807・1815が規模も揃っており「四柱穴」(南西隅は攪乱坑内に入る)に相当する可能性がある。

炉 西壁より4.3m・北壁より2.5m離れたところで40×35cmほどの「地床炉」を検出。床面を僅かに穿ち粘土を薄く(厚さ2~3cm)貼りつけている。粘土は被熱し赤ないし黄色に、黄褐色の地山は赤色に変化している。

埋積土の状況 埋土は黒褐色土の一層のみで埋積状況については定かにし得ない。

遺物の出土状況 埋土が薄く、床面上と埋土中出土の区別はできない。SK1808内よりはほぼ完形の台付甕が出土したほかは、破片ばかりで形を復元し得るものはない。

重複関係 SD04(古墳の周溝 SD01と一連のものと考えられる)により南西隅が切られる。

時期 出土土器の大半は「高蔵式土器」および「山中式土器」に比定されるもので、明確に「欠山式土器」に比定されるものはない。ほぼ完形の台付甕は「山中式土器」あるいはそれ以後とみられるものであるが、その土器型式(様式)については、特定し得ない。ここでは「山中中期」、すなわち弥生時代後期と考えておきたい。

溝(SD)

第2号溝(SD02 第10図 図版第5)

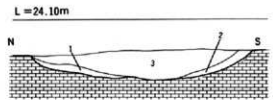
調査区の北端近く、VIF-5b・5c・6b・6cグリッドにまたがって検出された。遺跡がのる段丘の崖より6m内側に入った位置である。地山の汚染がひどい西端部ではプランの確認が困難であった。本来はさらに西方へ延びていた可能性がある。

形状・規模 北西-南東方向に走る溝で、断面は幅1.2m・深さ0.2mの浅い皿状を呈する。検出長10m、溝底の勾配は南東が高く北西に向かって緩く傾斜している。

埋積土の状況 埋土の大半は黒色土であるが、溝底から両側壁にかけて薄く暗灰褐色粘質土の堆積がみられる。

遺物の出土状況 黒色土中より弥生土器の小片が20数点出土したにとどまる。

時期 型式を判別し得る土器片は何れも「高蔵式」に属し、弥生時代中期と考えておきたい。

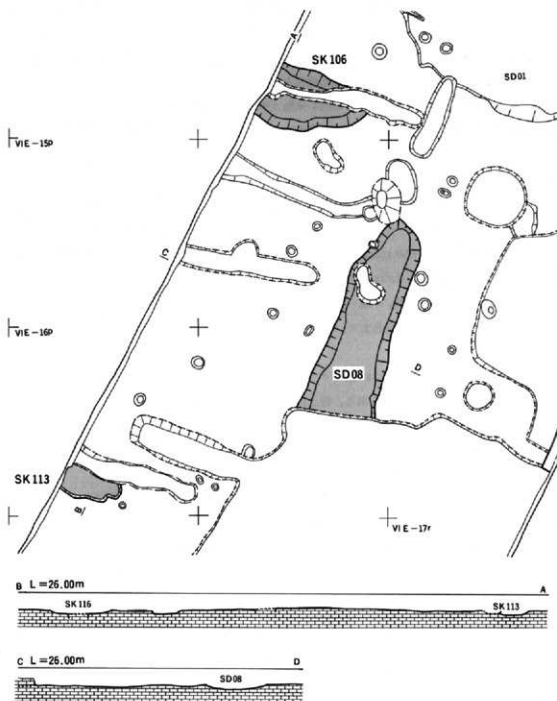


第10図 SD02 断面図(1:20)
1 暗灰白色粘質土(小礫混じり) 2 暗灰白色粘質土 3 黒色土

方形周溝墓 (SZ)

第1号方形周溝墓 (SZ01 第11図 図版第5)

調査区の中央やや南寄り、VIE-15P・15Q・16P・16aグリッドにおいて検出。SK106・SD



第11図 第1号方形周溝墓 (SZ01) 実測 (1:100)

08・SK113の3条の溝（遺構番号は調査時のまま）が西に開く「コ」の字状に位置しており、西半が調査区外となるが、その配置状況が四隅の切れる方形周溝墓の形状を呈することから「方形周溝墓」とした。

形状・規模 南、北辺にあたる区画溝間（内側）で10mを測る。遺存・確認された3条の区画溝はいずれも擾乱坑と重複し、南・北辺にあたる区画溝の半分以上が調査区外となっており区画溝の規模は判然としない。しかし、比較的遺存状態の良い東辺の区画溝は、長さ8m（推定）・中央部分で幅1.8m・深さ0.3mを測る。区画溝内外は同レベルで、主体部等の施設は削平されてしまったものとみられる。

埋積土の状況 南・北辺の区画溝の埋土はともに黒色土一層のみである。東辺の区画溝は外側より暗灰褐色土が流れ込んだのち黒色土が推積した様相を呈している。

遺物の出土状況 SK106から数点、SD08の黒色土中から十数点の弥生土器片が出土。

時期 型式を判別し得る土器片は何れも「高蔵式土器」で弥生時代中期と考えておきたい。

土坑（SK）

弥生時代の遺物が出土した土坑は、上記SB08・09・10周辺および調査区南端に分布し、総計で8基ある。何れも地山面で検出された。このほかにもこれらと埋土を同じくし同時期の可能性をもつものがいくつかあるが、それらについては第4表を参照されたい。

SK19 SB08とSB09の間、VIE-9tグリッドで検出。平面形は隅丸方形（0.63m×0.49m）で、深さ0.27mを測る。埋土は黒色土で、時期を特定し得ない弥生土器の小型壺の下部片が出土（おそらく高蔵式期）。

SK125 SB09の西、VIE-10s・11sグリッドで検出。西側半分以上が調査区外となる。方形プランで東辺長2.92m・深さ0.11mを測る。埋土は黒褐色土で、時期を特定し得ない弥生土器の台付甕片が出土（おそらく高蔵式期）。

SK124 SB09の西南、VIE-11sグリッドで検出。楕円形（0.44m×0.28m）で、深さ0.34mを測る。埋土は黒色土で、高蔵式期とみられる甕片が出土。SD04に一部切られる。

SK40 SK124の南、VIE-11sグリッドで検出。円形（0.80m×0.70m）で、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色土で、高蔵式期の壺および甕片が十数点出土。

SK43 SK40の南東1m、VIE-11s・12sグリッドで検出。不整形円形（0.63m×0.54m）で、深さ0.38mを測る。埋土は黒褐色土で、微細な炭化物が混じる。高蔵式期の壺および甕片が出土。

SK46 SK40の南東2m、VIE-12sグリッドで検出。円形（0.28m×0.23m）で、深さ0.29mを測る。埋土は黒褐色土で、微細な炭化物が混じる。高蔵式期の甕片が出土。

SK139 SB10の南西、VIE-13sグリッドで検出。楕円形（1.14m×0.68m）で深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色土で、高蔵式期の高杯・大型甕片が出土。

SK117 調査区の南端近く、VIE-19qグリッドで検出。不整形円形（0.60m×0.80m）で、深さ0.10mを測る。埋土は黒褐色土で、高蔵式期の壺（口頸部を欠く、後世の削平によるものか）が出土。

土器を意図的に埋置したものかも知れない。

第3表 弥生時代の土坑（SK）

番 号	グリッド	長径×短径	深さ (cm)	埋 土	備 考
SK38	VIE - 11s	0.29×0.22	0.13	黒褐色土	弥生土器片出土
SK47	VIE - 12r	0.23×0.22	0.36	〃	〃
SK48	VIE - 12r・s	0.45×0.40	0.35	黄褐色土 (赤土塊混じり)	〃
SK49	VIE - 12r	0.24×0.20	0.14	暗黄褐色土	〃
SK106	VIE - 14q	2.56×1.70	0.20	黒褐色土	〃
SK119	VIE - 14p	1.96×0.36	0.15	〃	〃
SK126	VIE - 12s	1.72×1.34	0.50	〃	〃
SK133	VIF - 8・9b	(2.05)×0.92	0.30	〃	
SK153	VIF - 9a・b	3.19×1.09	0.40	〃	

B 古墳時代後期の遺構

6～7世紀代の遺構をここでは古墳時代の遺構として一括して取り上げる。6世紀代の遺構としては方墳の痕跡が1基（SZ）、7世紀代の遺構としては竪穴式住居跡（SB）5棟・土坑（SK）多数がある。このほかに7世紀代の竪穴式住居跡かと思われるもの（SX01）がある。

古 墳（SZ）

森岡第2号墳（SZ02 第12・13図 図版第6～9）

調査区中央、VIE11r・11s・11t・VIF11a、VIE12r・12s・12t、VE12a、VE13q・13r・13s・13t・14q・14r・14s・14tグリッドにおいて検出。墳丘は既に削平され、方形にめぐる周溝（SD01およびSD04）だけが残る方墳の痕跡である。方墳と考えた根拠は、SD01とSD04がともに6世紀代の遺物を出土し、なおかつ埋土が類似しているので両者は同時期に属し、さらに、その位置関係ならびにその形状からして、方形にめぐる一連の溝は方墳の周溝と推定し得ると判断される点にある。ただしここで云う「SZ02」は今回の調査で検出された2基目の墳墓という意味であり、「森岡第2号墳」は森岡古墳群中の第2号墳にあたることを指している。

墳丘 上記のように、墳丘は既に削平されているため蓋土は認められず、遺存部はすべて地山である。平面形は「方形」で、規模は南北13.3m・東西(11.5+α)mを測る。南北方向の軸方位はN-10度-Eである。なお、墳丘中央や南の図示し得ていないがSK150より土器器の小型壺の体部片が一点出土している。時期を特定できないが、この土坑は、主体部にかかわる遺構の可能性はある。ただ

し、土坑底のレベルがSD04の溝底と同じである点で若干の疑問もある。

周溝 周溝は南～西辺（SD01）北辺（SD04）の一部が検出されたにとどまる。

南～西辺をなすSD01は検出総長16m（南辺8.5m・西辺7.5m）で、南隅部では墳丘側がほぼ直角をなすのに対して、外側は緩いカーブをなしている。幅4～4.5m・深さ0.2～0.5m前後で、断面形は浅い皿形ないし浅く上方に開く箱形を呈するが、南辺部の墳丘側面に緩い段が認められる。溝底は南西隅で最も低くなっている。埋土は3層からなるが、地点により層の有無、厚薄がある。すなわち第一層は南西隅部の外側にみられるのみであり、第2層は東部で厚く、第3層は西部で厚い（第12図）。

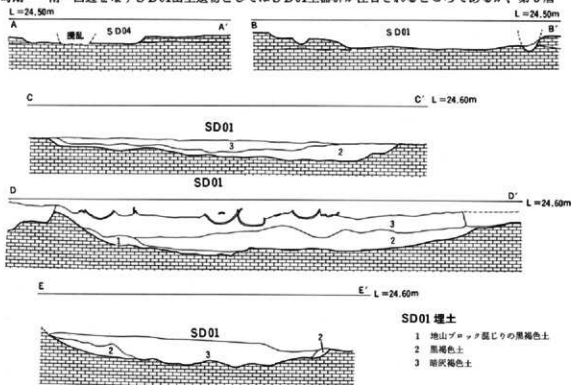
北辺をなすSD04は検出総長11mで、全体で僅かに内曲傾向にある。幅2.4m～0.1m前後で、断面は浅い皿形をなす。埋土は第4層の一層のみである。

遺物の出土状況 南～西辺をなすSD01の南西隅部第3層上部で・A・B2群の土師器を主体とする土器群（6世紀中葉、以下SD01土器群）の出土をみた。溝底に密着する状況で遺物は出土しておらず、土器群はあたかも据え置かれたことがごとき状況を示している。これについては遺物の説明の項において詳述する。なおこの土器群は7世紀代の竪穴式住居跡（SX01）により一部が壊されている。このほか弥生土器の小片・土師器・須恵器が第2・3層中から出土している。

北辺をなすSD04では、溝底に密着する状況でのまとまった遺物の出土はなく、第2層中より弥生土器・土師器の小片が出土したにとどまる。

重複関係 SD01が7世紀代の竪穴式住居跡？および鎌倉時代のSK149に切られている。またSD04は弥生時代後期のSB09を壊している。

時期 南～西辺をなすSD01出土遺物としてはSD01土器群が目ざされるところであるが、第3層

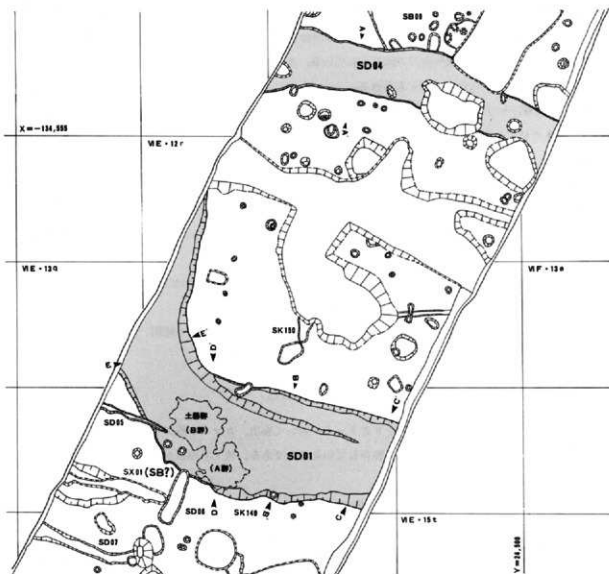


第12図 森岡第2号墳 (SZ02) 実測図 (2)

断面図 (A-A', B-B') 土層図 (C-C', D-D', E-E')

上部に含まれているという点で土器群の年代（6世紀中葉）をもってだちに古墳の年代とするわけにはいかない。第1～2層中出土遺物の大半は弥生土器片で、土師器片は少なく、したがって年代を特定し得るものではない。北辺をなすSD04出土遺物も上述のように弥生土器、土師器の小片が多く、土師器片には時期を特定し得るものはない。

以上より、周溝内の出土遺物からすれば正確な築造年代は不明であるが6世紀中葉に下限をおくのが適当な位置付けといえよう。ただし、このSD01土器群と同時期の遺構は少なくとも調査区内は認められない。この点を勘案すると、土器群「据え置き」の契機の問題は、この古墳との関係の中で考えていかざるを得なくなる。もしこのような見方が容認されるならば、6世紀中葉の時点でも古墳としての機能（例えば祭祀・追葬等）が継続していたものと見做すことが出来よう。一方周溝の周辺から5世紀後半の須恵器（杯身 第48図 190）が出土している点は、周囲に同時期の明確な遺構を認め



第13図 森岡第2号墳 (S202) 実測図 (I) (1 : 150)

ないことからして、古墳の築造年代を示唆するものかもしれない。こうした状況からここではこのS Z02に対して、5世紀後葉～6世紀中葉の年代を与えておきたい。年代の確定については、将来の東側調査区外の調査結果に期したい。

竪穴式住居跡（SB）

第2号竪穴式住居跡（SB02 第14図 図版第11）

調査区の北端近く、VIF-5 a・5 b・6 a・6 bグリッドにまたがって検出された。西側は、調査区外である。攪乱溝が検出部を二分して走るほか、床面中央西より床面に及ぶ大木の根株があり、遺存状態は必ずしも良くない。

平面形・規模 平面形は幾分東西に長い「(長) 方形」で、遺存する北東・南東隅は僅かに円みを帯びる。規模は南北辺3.32m・東西辺4.41+αmで、東壁の方位はN-9.5度-Eである。

壁・周溝 壁高は6～10cmで、東壁沿いにのみ周溝（断面U字形、深さ4～6cm）が認められる。

床面 砂礫層の地山を掘り込んで床面としている。カマドの西側の土坑（SK1101）は土層観察によれば当時は埋め立てられたものとみられる。

柱穴 床面上に小規模な土坑が2基ある。ともに柱痕は認められないが、SK1102は南隅にあって位置的にみて柱穴と考えられる。

カマド 北東隅よりの北壁に「カマド」の残欠とみられる焼土塊（0.5×0.3m）がある。断ち割り調査を行なったが、その旧状を復元するには至らなかった。

埋積土の状況 埋土は暗灰褐色土の一層のみで、住居跡の埋積状況については定かにし得ない。

遺物の出土状況 土師器壺・須恵器瓶類の小片が、カマド付近から出土した。ただし埋土が薄いため床面上か埋土中かという点については明確にし得なかった。

重畳関係 残念ながらSB05との切り合い関係は明確にできなかった。ただし、出土遺物からすればさほど時期差はないものとみられる。

時期 土師器壺および須恵器瓶類の口縁部片からみて、SB06に先行する時期、すなわち7世紀前～中葉の住居とみられる。

第5号竪穴式住居跡（SB05 第14図 図版第11）

調査区北部、VIF-6 a・6 b・7 aグリッドにおいて検出。カマドの残欠とみられる焼土塊と東壁の一部がSB02・SB04間に僅かに残存していたのみである。竹・木の根が地山近くまで蔓延っており、遺存状態は悪い。

平面形・規模 平面形・規模とも明確にし得ないが、僅かに残る東壁は直線（方位はN-19.2度-E）をなす。

壁・周溝 壁高は4cm前後をはかる。周溝は認められない。

床面 砂礫層の地山を掘り込んで床面としている。上記のように根が床面近くまで蔓延っており地山面の攪乱がひどい。

柱穴 柱穴と考えられる土坑は推定される範囲内では見当たらない。

カマド カマドの残欠とみられる焼土塊が東壁の西2.40m、SB02の南壁に近くに存する。断ち割り調査を行なったが旧状を復元するに至らなかった。なお、焼土塊の位置からみて北壁はSB02の南壁に重複する位置にあるものと解される。

埋積土の状況 床面近くまで根が蔓延っており、暗灰褐色土の埋土が僅かに認められたに過ぎない。したがって埋積状況については明らかではない。

遺物の出土状況 焼土塊付近で土師器の破片がまとまって出土した。

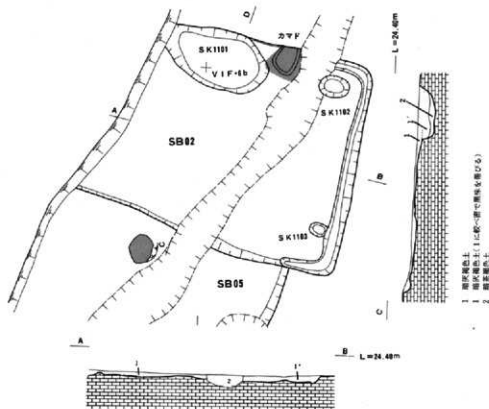
重複関係 SB04、SB02およびSB03との切り合い関係にある。SB02、03との前後関係は定かにし得ないが、出土遺物からみると、本遺構はSB04に切られている。

時期 土師器腰の口縁部片からみて、SB06より幾分先行する時期、すなわち7世紀前葉のものとみられる。

第3号竪穴式住居跡（SB03 第15図 図版第11）

調査区北部、VIE-7t・VIF-7aグリッドにおいて検出された。西側は調査区外である。重複関係はともかくとして、平面プランは比較的明瞭に捉えられた。

平面形・規模 平面形は方形を呈するが北東隅・南東隅は幾分円みを帯びる。規模は南北4.88m・東西2.82+ α mをはかる。東壁の方位はN-19.5度-Eを示す。



第14図 SB02 実測図 (1:60)

壁・周溝 壁高は1-11cmをはかる。周溝は認められない。

床面 砂礫層の地山を掘り込んで床面としているため、床面上には礫が露呈し凹凸をなす。東西隅に大型の土坑（SK1204）が存する。住居内埋土の遺存状態が悪いため土坑内埋土との相違が判然とせず、当時開放状態にあったか否かはっきりしない。

柱穴 床面上に2基の土坑があるが、ともに柱痕は認められない。

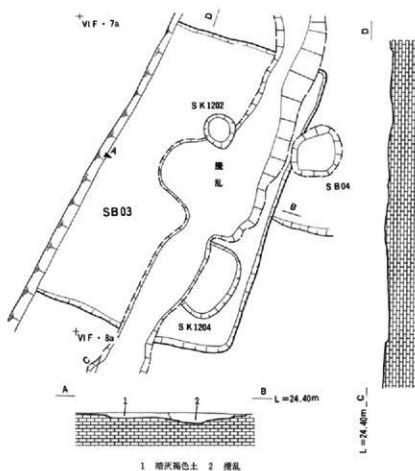
カマド 埋土中に微細な焼土塊を認めたものの、カマドあるいは伊といった施設を検出することはできなかった。

埋積土の状況 上述のように床面近くまで根が蔓延っており、暗灰褐色土の埋土を僅かに認めたに過ぎず、住居跡の埋積状況は明らかではない。

遺物の出土の状況 少量の土器の破片の出土を見たが、埋土が薄いため床面上か埋土中出土かは明確にし得ない。

重複関係 SB05及びSB04と重複関係にあるが、遺存状態が悪く埋土の切り合い関係は明確ではない。出土遺物からみてSB04に切られていると考えられるが、SB05との前後関係は判然としない。

時期 年代の決め手を欠くが、重複関係がないとみられる南半から出土した土器破片がSB06出



第15図 SB03 実測図 (1:60)

土のものと類似しているため、同時期もしくは相前後する時期（7世紀代）と考えておきたい。

第6号竪穴式住居跡（SB06 第16図 図版第11）

調査区の中央北寄り、VIE-8 t・9 t、VIF-8 a グリッドにかけて検出、西半分ほどが調査区外となる。SB07・08と切り合い関係にあるが、平面プランは比較的明瞭に捉えられた。

平面形・規模 平面形は方形を呈するが、遺存する南東・北東隅は僅かに円みを帯びる。規模は南北4.49m・東西2.85+ α mをはかり東壁の方位はN-31.5度-Eを示す。

壁・周溝 壁高は5～9cmで、周溝は認められない。

床面 地山を掘り込んで床面としている。北東側にある大型の土坑（SK1502）は、土層観察によれば当時は埋め立てられていたものと考えられる。

柱穴 床面上には小土坑が5基あるが、いずれも柱痕は認められない。

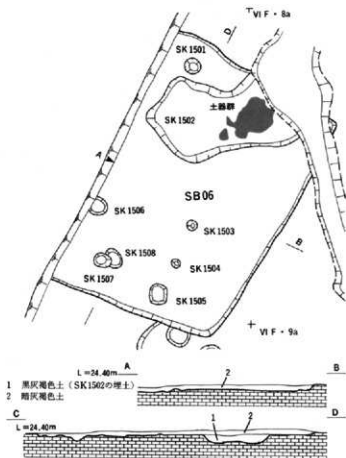
カマド 埋土中に散細な施土塊を認めたものの、伊あるいはカマドといった施設は検出されなかった。

埋積土の状況 埋土は暗灰褐色土の一層のみで、住居跡の埋積状況は明らかではない。

遺物の出土状況 北東隅で3個体ほどの土師器甕および須恵器杯蓋1個体が一括して出土した。これら土器群はSK1502上に位置するが、土器群の底面のレベルが床面と同じであること、および住居埋土と土坑埋土が異なることからみて、土坑とは直接的な係わりをもたないものである。

重複関係 SB08およびSB07を切っている。

時期 北東隅で出土した土師器甕・須恵器杯蓋、とりわけ杯蓋の型式からみて7世紀中葉に位置付けられる。



第16図 SB06 実測図（1：60）

第7号竪穴式住居跡 (SB07 第17図 図版第11)

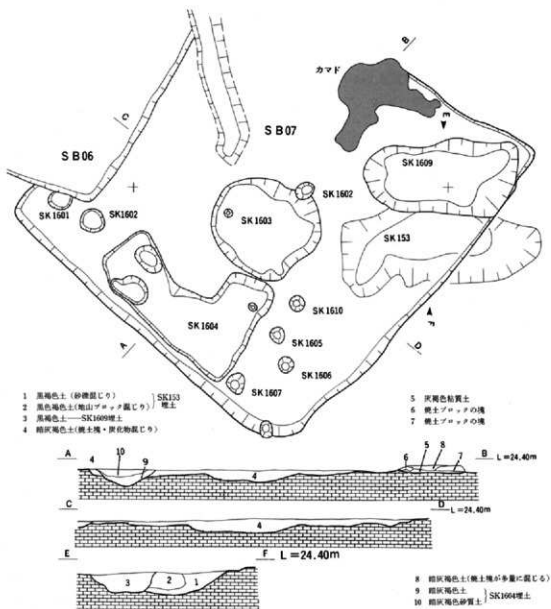
調査区の中央やや北寄り、VIE-8 t・9 t、VIF-8 a・9 aグリッドにまたがって検出された。

西側がSB06により覆われているほか、後世の削平により北壁のプランを把握しなかった。

平面形・規模 平面形は方形を呈するが、南東・南西隅はごく僅かに円みを帯びる。南北5.92m・東西5.72mで、推定床面積33.9㎡をはかる。東壁の方位はN-42度-Eを示す。

壁・周溝 確認し得た壁の高さは1~11cmで、周溝は認められない。

床面 地山を掘り込んで床面としている。床面中央の土坑(SK1603)は土層観察による限り当時は開放状態にあったものとみられる。



柱穴 床面上に8基の小土坑があるが、いずれも柱痕は認められない。

カマド 北壁中央にカマドの残欠とみられる焼土塊(1.56×1.46m)がある。断ち割り調査を行なったが旧状を復元するに至らなかった。

埋積土の状況 埋土が薄く、暗灰褐色土の一層のみで、埋積状況を明らかにすることはできなかった。

遺物の出土状況 カマドの残欠とみられる焼土塊の周辺から土師器甕片と接合するものが少量みられた。

重複関係 SB08・SK153を切り、SB06・SK1604・1609に切られている。なおSK1604の南壁は南壁と平行しており、土坑掘削時にこの住居跡が何らかのかたちで意識されていた可能性がある。

時期 カマドの残欠とみられる焼土塊の周辺から集中的に出土した土師器甕はSB06出土のもの(7世紀中葉)と類似しており、おそらくは同時期とみられる。

土坑(SK)

竪穴式住居跡内に位置するものを除き、土師器(SB06出土品と類似)の出土をみた土坑は第5表の通りである。

土坑内への遺物の混入も考えられるので、これら全てをSB06と相前後する時期、すなわち7世紀代とするわけにはいかない。

SX01(竪穴式住居跡? 第13図)

調査区中央やや南寄り、VIE-14q・14r・15Pグリッドにかけて検出。SD05・SD06・SD07が西に開く「コ」の字形に並ぶ。SD06・07は検出状況からみて一連の溝であった可能性がある。またSD05・SD06はSD01を切っている。SD06とその北延長上及びSD05の東延長上との交点(SD01土器群を切っている)あたりから弥生土器(高藏式期)および土師器・須恵器(7世紀代)が遺構検出面(地山)より20cmほど上、すなわちSD01土器群と相前後するレベルでままとって出土した。3条の溝の埋土はいずれも黒褐色土であるが概して土質は軟らかである。そしてこれら溝に囲まれる

第4表 古墳時代(7世紀中心)の土坑(SK)

番 号	グリッド	長径×短径	深さ (cm)	埋 土	備 考
SK13	VIE - 9 t	0.30×0.26	0.13	黒 褐 色 土	土 師 器 ・ 須 恵 器
SK19	VIE - 9 t	0.63×0.49	0.27	暗 灰 褐 色 土	弥 生 土 器 ・ 須 恵 器
SK50	VIE - 13・14 r	0.75×0.30	0.21	黒 褐 色 土	(弥 生 土 器) ・ 土 師 器
SK53	VIE - 13・14 s	0.48×0.29	0.11	黒 褐 色 土	土 師 器
SK88	VIE - 18 g	0.32×0.23	0.12	黒 褐 色 土	弥 生 土 器 ・ 土 師 器
SK110	VIE - 14 r	0.34×0.28	—	黒 褐 色 土	弥 生 土 器 ・ 土 師 器
SK113	VIE - 16 p	1.55×0.78	0.16	黒 褐 色 土	弥 生 土 器 ・ 土 師 器
SK127	VIE - 11 s	0.32×0.22	0.07	黒 褐 色 土	土 師 器
SK134	VIF - 11 a	(0.15)×1.36	0.14	黒 褐 色 土	弥 生 土 器 ・ 土 師 器

部分の土質も同様に軟らかであったことから、遺構の性格として竪穴式住居跡の可能性も考えられる。しかし、その場合これら溝は周溝ということになるわけであるが、それにしては幅がやや広すぎるきらいがある。このように遺構の性格については判然としないものがあるが、ここでは7世紀代の性格不明の遺構（SX01）としておきたい。

C 平安時代の遺構

平安時代の遺構としては、竪穴式住居跡（SB）2棟、土坑（SK）1基がある。何れも調査区北半で検出された。

竪穴式住居跡（SB）

第1号竪穴式住居跡（SB01 第18図 図版第11）

調査区の北半、VIF 6b・7b・7cグリッドにまたがって検出された。壁高はさほどないものの、プランは明瞭に確認された。

平面形・規模 平面形は方形を呈するが、カマドの付く北壁が幾分外側へ張り出す形態である。各隅部は僅かに円みを帯びる。規模は南北辺4.33m・東西辺4.12mで、床面積は16.7㎡をはかる。

西壁の方位はN-19.5度-Eを示す。

壁・周溝 壁高は1～7cmほどで、周溝（深さ2～4cm・断面U字形）が西壁～南壁中央にかけてL字形に残っている。

床面 地山を掘り込んで床面としている。床面中央でカマド前にある浅くて大型の土坑（SK1009 径1.9×1.6m・深さ0.12m）は、その埋土に焼土塊が多く含まれていたことからみて当時は開放状態にあったものと考えられる。

柱穴 床面上に小土坑が14基ある。このうちSK1007・1008・1010・1012・1013・1017は一直線上に並んでおり他の土坑と組合わせて掘立柱建物？を構成する。そのほかの床面上の土坑にはいずれも柱痕は認められず、位置的にみても積極的に柱穴と見做し得るものはない。

カマド 北壁のほぼ中央において、カマドの残欠とみられる焼土塊（1.7×1.9m）が検出された。断ち割り調査を行なったが、その旧状を復元するには至らなかった。

埋積土の状況 埋土は暗褐色土の一層のみで、埋積状況は明らかではなかった。

遺物の出土状況 埋土が薄いため、床面上か埋土中出土かという点が明確にはならなかったものが殆どである。ごく僅かにカマドの残欠の焼土塊中より出土した土器もある。何れも小片である。

重複関係 SB04を切っている。

時期 遺物は何れも細片で時期決定の決め手に欠ける。しかし、カマド残欠の焼土塊中から折戸53号窯式期の灰釉陶器碗片が出土しているため、このSB01は10世紀末の築造とみておきたい。

第4号竪穴式住居跡 (SB04 第18図 図版第11)

調査区の北半、VIF-7 a・7 bグリッドにかけて検出。東側がSB01により壊されかつ、西側も攪乱溝により壊されている。

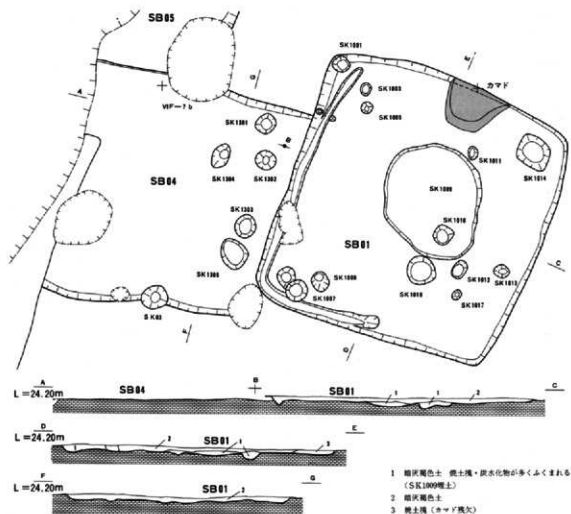
平面形・規模 西・東壁が失われているが、遺存する南・北壁はほぼ直線をなし、平面形は方形と推察される。規模は南北辺7.00m・東西辺(3.30+ α)mで、北壁の方位はN-18度-Eを示す。

壁・周溝 壁高は5~9cmで、周溝は認められない。

床面 地山を掘り込んで床面としているが、地山面は礫層で拳大の円礫が露呈し、細かな凹凸をなしている。

柱穴 床面上に小土坑が5基みられる。何れも柱痕は認められない。

カマド 北壁中央が攪乱を受けているためか、カマド状の焼土塊はみられなかった。



第18図 SB01およびSB04 実測図 (1:60)

埋積土の状況 遺存する壁高が5～9cmと低いため、埋土は暗灰褐色土の一層のみで、その埋積状況については明らかではない。

遺物の出土状況 土師器甕、灰釉陶器碗・皿・瓶類が主として南東部で出土した。ただ埋土が薄く、床面上か埋土中の出土かは明確ではない。灰釉陶器皿のほぼ完形品が出土した。

重複関係 出土遺物からみてSB04はSB03およびSB05を覆しているとみられる。またSB04はSB01に切られている。

時期 灰釉陶器の碗・皿・瓶はいずれも折戸第53号窯式期に属し、土師器甕も同時期と解して差し障りないものである。したがってSB04の時期は10世紀末と考える。

土坑（SK）

平安時代の遺物が出土した土坑は1基（SK03）検出されたのみである。

SK03

IVF-7a・7bグリッドで検出。平面形は円形（0.41×0.35m）で、深さ0.09mをはかる。埋土は暗灰褐色土で、埋土中から折戸第53号窯式の灰釉陶器碗が出土した。SB04との切り合い関係は明らかにし得なかった。ただこのSK03は上記SB04内の遺物が集中する箇所に当たるため、遺物が混入した可能性がある。さらにこのSK03はSK1018・1012・2103・06・154と共に掘立柱建物（SB13? 桁行2間・梁行1間 4.50m×3.00m 棟方位N-84度-E）を構成する可能性もある。ただし、この場合、桁行の柱間長が不揃いという問題が残る（第22図）。

D 鎌倉時代の遺構

鎌倉時代の遺物が出土した遺構としては、SK01・SK70・SK149の3基の土坑があり、これらは調査区中央南寄りの部分に集中している。なおSK70・149のほかの土坑と組み合わせる掘立柱建物の柱穴を構成する可能性もある。時期はどれも13世紀代。

土坑（SK）

SK01（第19図）

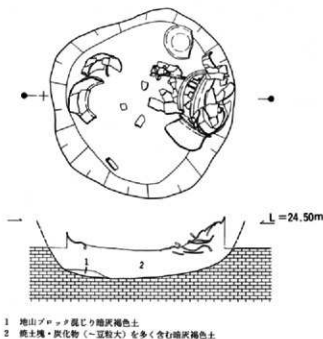
VI E-13s・13tグリッドにまたがって地山面で検出された。平面形は不整形（1.04×1.00m）で、深さ0.15m（遺物の出土状況からみて、本来は少なくとも0.35mはあったと考えられる）を測る。埋土は底部に薄く地山ブロック混じりの暗灰褐色土（掘削時の地山の二次堆積か）がみられるほかは、多量の焼土小塊および小炭化物片を含んだ黒褐色土となっている。埋土に焼土塊・炭化物をふくむものの土坑の底・壁面に被熱した痕跡は認められない。13世紀代の土鍋4点・灰釉系陶器碗（山茶碗）2点はこの黒褐色土中から出土した。

SK149

IVE-14s グリッドで検出。平面形は不整形円形(0.32×0.25m)で、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色土で、底部近くから13世紀代の灰釉系陶器碗(山茶碗)・中世土器皿各1点が出土した。ともに口縁部を写ほど欠く。SD01を切っている。

SK70

SK149の南南西8.00m、VIE-16r グリッドで検出。平面形は円形(0.27×0.24m)で、深さ0.20mを測る。埋土は黒褐色土で、底部近くから口縁部の大半を欠いた13世紀代の灰釉系陶器碗(山茶碗)1点が出土。



第19図 SK01 遺物出土状態実測図(1:20)

掘立柱建物?

既述の通り、SK149・SK70は、位置的にみて埋土が共通するSK109・SK60・SK157・SK65と組み合わせられて桁行2間、梁行1間の掘立柱建物(SB14? 棟方位N-25.5度-E 約8.20m×4.80m)の柱穴を構成する可能性もある。ただこの場合SK149とSK157、SK109とSK60の間隔がSK157とSK70、SK65とSK66の2倍強となり間隔が広すぎてしまう。柱痕が認められない点も含め、これらの土坑群を直ちに掘立柱建物と断定しきれない理由である。

E 時期を特定し得ない遺構

今回の調査で検出された遺構のなかには、出土遺物がごく僅かで、時期を特定し得ない遺構も少なからずある。それらの殆どは土坑(SK)で、ほかに2棟の竪穴式住居跡(SB11・12)がある。ここでは竪穴式住居跡についてのみ説明を加えることとする。

第11号竪穴式住居跡(SB11 第20図 図版第11)

調査区中央や北寄り、VIF-9a・10a・10b・グリッドにまたがって検出。東側が調査区外となる。

平面形・規模 平面形は方形を呈するが、遺存する北西隅は幾分円みを帯びる。東壁と北・南壁の一部が調査区外となる。規模は南北辺2.93m・東西辺(2.80+a)mで、西壁の方位はN-40度-Eである。規模が小さく「住居跡」とするには疑問点も残る。

壁・周溝 壁高は9~11cmで、周溝は認められない。

床面 地山を掘り込んで床面としている。床面は緩い凹凸面となっている。

柱穴 床面上に小土坑か6基みられるが、SK2001・2006は住居跡の埋土を切っている。SK2002～2005には柱痕は認められず、また位置的にも積極的に柱穴と見なし得るものはない。

伊・カマド 検出部分では、伊・カマド状の施設は認められなかった。ただし、埋土中に焼土塊が含まれている点は留意する必要がある。

埋積土の状況 埋土は2層認められる。1は焼土塊・炭化物混じりの暗灰褐色土で、2は地山ブロック混じりの暗灰褐色土である。2は1に比べ軟らかく、プランを十分に把握し得なかったが、新しい時期の土坑埋土（ないしは耕作に伴う攪乱？）ではないかとの印象を調査時には得た。なお基本層序の第II層とは地山ブロックが多く混じる点で明らかに異なる。

遺物の出土状況 埋土中より弥生土器・土師器・須恵器片が出土したが、出土層位の区分を明確にし得なかった。

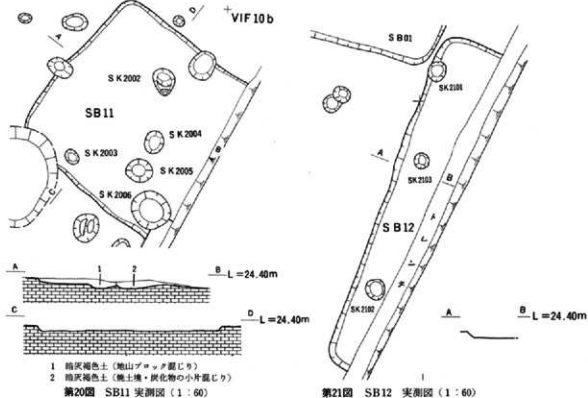
重複関係 SK2001およびSK2006に切られる。

時期 5世紀末の須恵器杯身が1点みられたほか、量的に最も多い土師器は大半が時期を特定し得ない壺片ばかりである。出土層位が1か2層（後世の土坑・攪乱の可能性はある）か判然とせず、したがって出土遺物からは時期を決定することは難しい。

第12号竪穴式住居跡（SB12 第21図 図版第11）

調査区北部、VIF-7c・8b・8cグリッドにまたがって検出。西壁を除く大半は調査区外となる。SB01の南東隅に接する位置にある。

平面形・規模 遺存する西壁からみて、平面形は方形を呈するものとみられる。ただ西北・南西隅は



幾分円みを帯びる。西壁長は5.65mで、方位はN-20.5度-Eを示す。

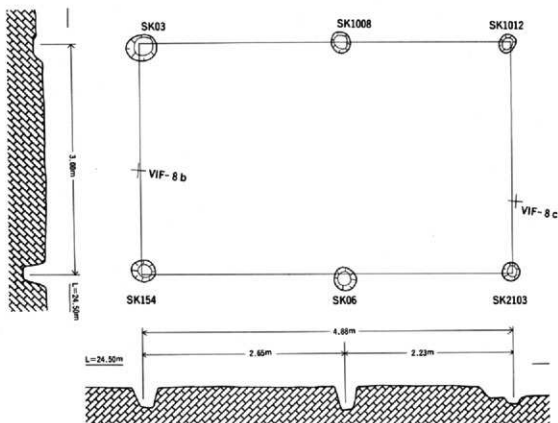
壁・周溝 壁高は8～20cmほどで、周溝は認められない。

床面 地山を掘り込んで床面としている。北側の床が15cmほど低くなっている。この部分の床は凹凸が激しく、地山ブロック土により埋まっている。住居構築時に床面を掘りすぎたためその排土で埋め戻した結果と解されようか。

柱穴 床面上から小土坑2基が検出されたが、ともに柱痕は認められない。

炉・カマド 検出範囲が狭いためか、炉・カマド状の施設はみられなかった。ただ、埋土中に焼土塊・炭化物の細片が認められた。

埋積土の状況 埋土は上記の地山ブロック土が覆う低みを除き暗灰褐色土の一層のみで、埋積状況



第22図 平安時代 掘立柱建物？(S B13?) 実面図(1:50)

については明らかにし得ない。

遺物の出土状況 遺物は極端に少なく、埋土中から僅かに3点の土器片の出土にとどまる。

時期 3点の内、1点は弥生土器（高蔵式期）、ほかの2点は弥生土器ないし土師器の甕片（1点は壺の可能性がある）であり、これらから時期を確定することは出来ない。ただ埋土から判断とすると弥生時代中期（弥生時代のものは概して黒味が強い埋土である）に遡る可能性は少ないと思われる。

（註）

(1) 豊橋市教育委員会 1982 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第3集』

第5章 遺物

今回の調査で出土した遺物としては、土器・陶磁器類、石器、土製品、石製品、ガラス製品がある。遺物量は整理箱(34×54×14cm)に150箱ほどで、そのうちの殆んどを土器・陶磁器類が占め、そのほかはごく少量である。

これらの遺物は既述のように、(A)弥生時代中～後期、(B)古墳時代後期(6～7世紀)、(C)平安時代(10世紀末)、(D)鎌倉時代(13世紀)の4時期にまとめられる。以下、順に節を分ちて遺構出土品を中心に遺物について報告する。なお、量的に少なくかつその帰属時期を特定し得ない石製品、土製品、ガラス製品等については、便宜上、最後に一括してまとめた。

第1節 弥生時代(中～後期)の遺物

弥生土器および石器があるが、石器はごく僅かである。弥生土器は調査区のはば全域にわたって出土したが、堅穴式住居跡群および方形周溝墓が検出された調査区中央部から南よりにかけてのところに集中する傾向にある。弥生土器は、瓜形式、高藏式および山中式土器がみられるが、高藏式以外は量的には少ない。殊に第10号堅穴式住居跡(SB10)出土品は、甕を欠くきらいがあるが、調査例の少ない東三河地方の高藏式土器¹⁾の一括遺物として注目されるものである。

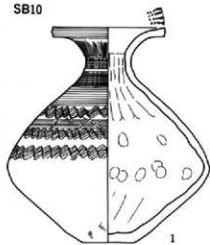
以下、まず遺構出土品について記し、最後に遺構外出土土器および石器について述べる。

第10号堅穴式住居跡(SB10)出土品

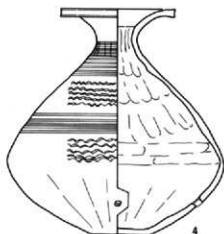
床面上より、壺7個体以上、甕2個体、高杯2個体の総計11個体以上の土器が出土した(第23図の土器番号は第7図の出土状態図の番号と一致する)。これらはその形態および紋様等より高藏式土器に比定される。

壺(第23図1～17) 1はソロバン玉形の体部に、著しく細い頸部より大きく外反する口縁がつくいわゆる細頸壺である。紋様は口縁部および頸部から体部上半にかけてみられる。口縁部の紋様には、口縁端面の凹線紋と口縁部内面の櫛状工具の刺突による列点紋がある。頸部より体部上半にかけての紋様帯は、上より、麻状紋帯(2帯)+直線紋帯+波状紋帯+直線紋帯+波状紋帯(2帯)の構成をとる。なお体部上半の紋様帯には半截竹管状の工具による大ぶりの斜格紋が認められる。4は1に較べ薄手のつくりであるが、ほぼ同形の壺である。口縁部の紋様を欠くものの頸部から体部にかけての紋様は、波状紋のピッチが細かい点を除くと、その構成は同じである。下胴部に焼成後の穿孔が認められる。2・3・6は、ソロバン玉形の体部で、1・4と同型の壺とみられ、その紋様構成についても類似している。2は紋様を欠くが、これは器面の磨滅によるためである。5は「袋状口縁」などとよばれる高藏式土器に特有の口縁部片で、ソロバン玉形の体部片と組み合わせるものである。口縁外面に凹

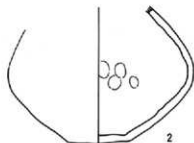
SB10



1



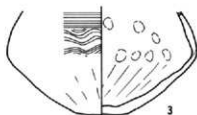
4



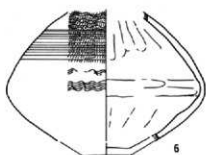
2



5



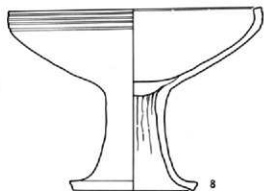
3



6



7



8



10



9

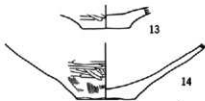


11

SB08



12



14

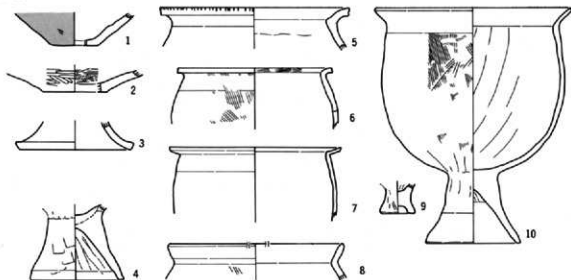


13

0 10 20cm

第23图 SB10·SB08出土土器実測图(1:4)

SB09



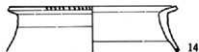
SK40



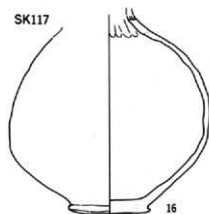
SK43



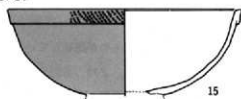
SK46



SK117



SK14



SK139



SK125



SD08



SD11



0 10 20cm

第24図 SB09・SK40・SK43・SK46・SK117・SK14・SK125・SD08・SK11出土土器実測図(1:4)

線紋帯を施しその下にヘラ状工具のオサエ・刺突による斜行線紋を施している。7は1・4等に較べ幾分丸い体部をなし、外面は全面ヘラミガキ調整で仕上げられている。底部は短く突出する。その形態・作行きは1～6とは異なり、在地系と称されるものである。このほか図示し得ないが在地系とみられる褐色を呈する壺片が3個体(第7図a～c)ほど認められる。

高杯(第23図8・9) 8は、浅い碗形の杯部に中空の柱状で裾部がわずかに広がる脚部がつくものである。厚手の口縁は幾分内湾ぎみに直立し、外面に凹線紋を施される。杯部と脚部との接合は「円板充填法」による。9は、8と同型の杯部の口縁部片である。8に較べ大ぶりであり、太く短かい「台」がつく「台付鉢」の可能性もある。

壺(第23図10・11) 10は体部から「く」の字に短かく外傾する口縁部のつく甕で、口縁端面にヘラ状工具による刻目を加える。体部内面は左上りのヘラケズリ調整。11は、台付甕の台部で、基部は短かい中実の柱状をなす。

第8号竪穴式住居跡(SB08) 出土品

伊跡の南西側の床面上よりまとまって出土。殆んどが壺の破片がある。甕はごく僅かでは小片にすぎない。また、壺の破片の大半は体部片で図示し得るものは少ない。

壺(第23図12～14) 12は、細頸壺の口頸部片である。短かく外反する口縁部の端面にはヘラ状工具による刻目が加えられている。細長い柱状の頸部には紋様はなく、頸部から体部に移行する部位に、上から直線紋帯+波状紋帯+直線紋帯+斜格紋帯(所々を消し去り、いわゆる単位紋としている)+直線紋帯の構成をとる紋様帯がみられる。13、14は壺の底部片で、底が幾分突出する。これら12～14は、褐色を呈するとともに、その形態、作行きからみて在地系と称されるものである。そのほか図示し得ない胴部片のなかには体部中央、最大径の部位が、ソロバン玉形を呈さずに球形をなすものがみられる。

第9号竪穴式住居跡(SB09) 出土品

出土土器の多くは細片であり、図示し得たものは少ない。高蔵式と山中式のもの混在している。

壺(第24図1～2) 1は灰白色を呈するもので、外面に赤彩が施されている。2は、上記SB08の13、14と同型の壺底部片である。このほか細片で図示し得ないが、櫛歯の縦型流水紋を有する壺の胴部片がある。

高杯(第24図3) 3は緩く外反する裾部片である。このほかに遺存状態が悪く図示し得ないが、緩く外反する裾部片で、穿孔がみとめられる山中式の高杯片がある。

甕(第24図4～10) 甕は各種みられる。5～7は、体部に対してほぼ直角に折れる短かい口縁部を有するもので、高蔵式に比定される。5は厚手で口縁上端を幾分斜め上方へ突出させ端部に刻目をつけている。6の口縁内面に残るハケ目は、口縁部外方へ折り曲げた際のものと思われる。7は薄手のもので、口縁部が僅かに内湾傾向にある。8、10は外傾する口縁部がつくものである。10は台付甕で、体部に較べ台が大ぶりである。体部の内面は板状工具によるナデ調整が施され、外面はハケ目調整である。外傾する口縁部は内外面ヨコナデ調整。形態より山中式期のものと思われる。9は所謂「台

付甕の「ミアチュア」である。4は台付甕の台部片で、基部は厚手で形状は9の台に類似する。

第2号溝（SD02）出土品

量的には少ないが、黒褐色土層より弥生土器の小片が出土した(第25図)。図示したものはいずれも壺の胴部片でVIF-5 bグリッドより出土したものである。22・24は紋様、器面状況からみて同一個体の可能性がある。22・24は、いわゆる古井式、下長山式とよばれる土器の紋様構成に近いものである。23は高蔵式に通常の波状紋帯をもつ。25は黒褐色を呈し、シャープさを欠く波状紋帯であることからみて、在地系とみられる。なお22-24は黄褐色で、25は黒褐色を呈する。

第1号方形周溝墓（SZ01）出土品

北側の周溝（SK106…調査時の遺構番号）および東側の周溝（SD08）より10数点の弥生土器片が出土。器種としては壺・甕が認められるが、いずれも細片で図示し得るものは少ない。

壺(第24図18) 18は台付甕の台部片で、基部が中実の柱状をなす、明赤(黄)褐色を呈する。

壺(第25図26) 26は壺の胴部片で、直線紋帯と波状紋帯が認められる。厚手の破片で、その形状からみて大型壺であろう。

これらは、高蔵式に比定されるもので、このほか図示し得ないものについても、型式を判別し得るものは何れを高蔵式とみられる。

第125号土坑（SK125）出土品

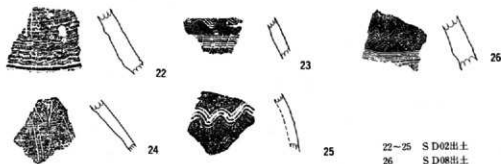
甕の破片が少量出土。

壺(第24図21・21) 20・21とも台付甕の台部片。20は比較的小型のもので、おそらくは高蔵式期のものであろう。21は内外面ハケ調整痕をのこす。時期は特定し得ない。

第40号土坑（SK40）出土品

壺および甕片が十数点出土。細片が多く図示し得たのは2点の甕のみである。

壺(第24図11・12) 11は、厚手の甕で体部に対して直角に折れる短かい口縁部を有する。端面にへ



第25図 SD02・SD08 出土土器実測図(1:3)

22-25 S D02出土
26 S D08出土

ラ状工具による刻み目をつける。その形状からみて高藏式に比定される。12は、口縁部が「く」字状につくものである。山中式期のものか。

第43号土坑（SK43）出土品

壺および甕片が数点出土。

壺(第24図13) 13は厚手の甕で緩く外反する口縁部を有する。口縁端面にはヘラ状工具により刻み目がつけられている。時期を特定し得ない。このほか図示し得ない甕片のなかには、短く直角に折れる口縁部を有し高藏式に比定されるものがある。

第46号土坑（SK46）出土品

甕の破片が2点出土。

壺(第24図14) 図示し得たのは1点である。14は体部に較べ薄手の口縁部である。口縁部はヨコナデ調整で、体部もナデ調整でヘケ目を消し去っている。口縁部の形状より高藏式に比定される。

第139号土坑（SK139）出土品

高藏式の大型の壺および高杯（台付鉢か）片が出土。図示し得ないが大型壺片は、ソロバン玉形の体部をなす。

高杯(第24図17) 17は口径34cmをはかる大型の杯部片である。垂直に立ち上がる口縁部の外面に3条の凹縁がめぐる。高杯としたが、大形ゆえに台付の鉢とみるべきかもしれない。

第117号土坑（SK117）出土品

口頸部が欠損する壺が1個出土。

壺(第24図16) 体部は略完存する。口頸部の欠失が故意によるものか、後世の削平によるものかは判然としない。器面の荒れが著しく紋様等の有無がはっきりしないが、体部の最大径が下半にあること、底が短く突出することおよび頸部が著しく細いことなどから高藏式期の在地系の壺とみられる。

第14号土坑（SK14）出土品

台付鉢の鉢部が1点出土。従来、東三河地方では例をみない特異な形態のものである。

台付鉢(第24図15) 脚部を欠く。「鉢」部は半球形の碗形を呈す。体部の上端を幅1.6cmほど折り返し尖帯状に肥厚させ口縁部とし、その外面にクシ状工具の刺突による列点紋を加えている。体部外面には赤彩が施されている。口径24.5cmで、鉢部の高さ9.2cm、脚基部の幅8.0cmをはかる。砂粒混じりの胎土で、黄褐色を呈す。なお内面に黒斑が認められる。

遺構外出土土器

遺構に伴わずに出土したおもな弥生土器を第26図に示した。出土地点等については第5表第28図で示した。ここでは特徴的なものについて若干の説明を加える。

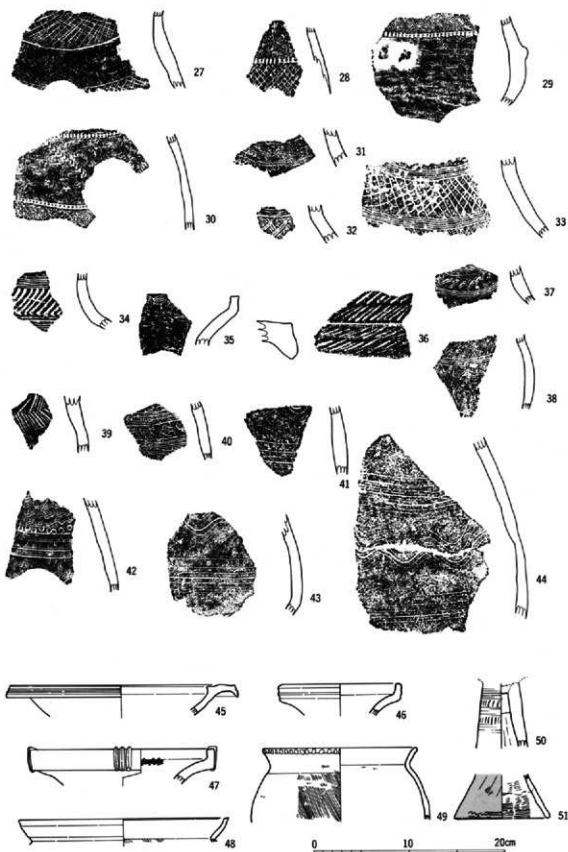


圖26 包含層出土 弥生土器実測圖 (拓本 1:3 実測圖 1:4)

拓影の27~44は瓜髷式および高藏式のもので、いずれも壺の破片である。45・46は高藏式期の高杯および壺の口縁部。50は山中式の高杯脚部片で、49は同期の壺であろう。47は大きく外反する頸部に短かく直立する口縁のつくもので、遠江以東に多くみられる口縁形態である。口縁外面に3本1単位の棒状浮紋がつく。口縁部内面（頸部上端というべきか）に波状紋が巡る。51は脚（台）で器種を特定し得ない。外面に赤彩がみられるほか、端部外面には波状紋が施されている。東三河地方で従来例をみない形状のものである。信州方面からの搬入品か。48は受け口状口縁の壺片。

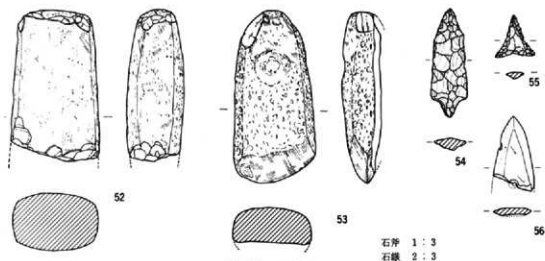
石器

今回の調査で出土した石器を備かに5点を数えるにすぎない¹⁹⁾。その内訳は打製石鏃2点、磨製石鏃1点、磨製石斧2点（内1点は敲石として転用）である。このほかに図示していないが打製石錘とおもわれるものが1点ある（第6表、第29図）。

石器の所属時期については、伴出遺物を欠くなどこれを特定し得ないが、ここでは調査区内より出土した土器型式から大まかに高藏式期を中心とする時期の石器群として据えておくことにしたい。打製石鏃（第27図54・55） 凸基有基式のもの（54）と凹基無基式（55）とがある。54は弥生時代に特有の形態のものであるが、54については縄紋時代の可能性もある。調整はともに両面加工であるが、片面の一部に一次調整面を残す。

磨製石鏃（第27図56） 基部を欠くが、他遺跡の出土品からみておそらくは凹基式のものであろう。全面を研磨仕上げている。平らな鏃部の中央に両側穿孔による孔がみられる。

磨製石斧（第27図52・53） ともに大型始刃石斧である。52は刃部を欠き基部のみ。断面は隅丸長方形で、頭部を除き研磨されている。53は片面を欠くもので、敲石として転用されている。そのためか、刃部および基部の一部を除き研磨面が認められない。刃部は片側が使用により磨耗している。断面はだ円形に近い隅丸長方形を呈す。



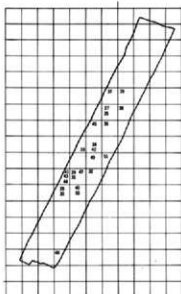
第27図 石器実例図

石斧 1 : 3
石鏃 2 : 3

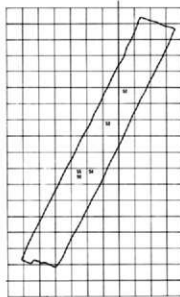
第5表 包含層出土 弥生土器一覽表

番号	器種等	出土地点等	備考	時期
第28回27	壺 胴部片	VIE・104 検1	黒褐色	瓜瓠式
28	壺 胴部片	VIE・158 検1	灰黄褐色	瓜瓠式
29	壺 胴部片	VIE・147 検1	黒褐色～灰褐色 2つの突起 (円形突起の一種?)	瓜瓠式
30	壺 胴部片	VIE・159 検1	黒褐色	瓜瓠式
31	壺 胴部片	VIE・147 検1	黒褐色	瓜瓠式
32	壺 胴部片	VIE・148 検1	黒褐色	瓜瓠式
33	壺 胴部片	VIE・127 検1	赤黄褐色	瓜瓠式
34	壺 頸部片	VIE・128 検1	黄灰褐色	高塚式
35	壺 口縁部片	VIE・104 検1	黄灰褐色	高塚式
36	壺 口縁部片	VIE・111 検1	赤褐色	高塚式
37	壺 胴部片	VIE・91 検1	緑赤褐色	高塚式
38	壺 胴部片	VIE・102 検1	黄褐色	
39	壺 胴部片	VIE・92 検1	灰黄褐色	
40	壺 胴部片	VIE・158 検1	黄褐色	高塚式
41	壺 胴部片	VIE・149 検1	灰褐色	高塚式
42	壺 胴部片	VIE・128 攪乱	灰黄褐色	高塚式
43	壺 胴部片	VIE・149 検1	黄灰褐色	高塚式
44	壺 胴部片	VIE・149 検1	黄褐色	高塚式
45	高 杯	VIE・113 グリッド 検1		高塚式
46	煎取壺	表面は牙		高塚式
47	(広口) 壺	VIE・147 グリッド S D01	縁状浮上は3本1単位 であるが、何箇所に集 されるかは不明	(山中式)
48	壺	VIE・199 グリッド 検1	受口状口縁	(山中式)
49	(台付) 壺	VIE・138 グリッド 検1		山中式
50	高 杯	VIE・157 グリッド 検1	杯部との接合は円板状 痕	山中式
51	?脚(台)部片	VIE・131 グリッド 検1	周部に巻状紋 外面赤彩	(?)

■ 41, 43, 44は同一個体か?



第28回 弥生土器(包含層)出土地点



第29回 石器出土地点

第6表 石器一覽表

■ 単位はcmおよびg () で表示したものは現存値

番号	器種等	出土遺構・グリッド	材質	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第27回55	打製石鏃 凹基有蓋式	VIE・147 S D01土器群	チャート	完 存	1.6	1.5	0.3	0.4g	
54	打製石鏃 凸基有蓋式	VIE・148 S D01	頁 岩	完 存	4.3	1.4	0.4	2.6g	
56	磨製石鏃	VIE・147 S D01土器群	結晶片岩	基部欠損	(2.3)	(1.6)	(0.3)	(1.3g)	中央に穿孔 (両側)
53	磨製石斧 大型給刃	VIE・111 攪乱坑	ホルンフェルス	片面欠	13.5	6.4	(3.0)	(460g)	磨石として 転用
52	磨製石斧 大型給刃	VIF・9 a S K1604	緑色岩	刃部欠	(11.9)	7.0	4.4	(734g)	
—	打製石鏃?	VIF・9 b	砂 岩	欠損	(9.1)	7.6	2.4	(230g)	

第2節 古墳時代後期（6～7世紀代）の遺物

古墳時代後期の遺物には、須恵器、土師器がある。これらは大別して6世紀（中葉）と7世紀代のものに分けられる。前者はほぼ森岡第2号墳（S Z 02）の南側周溝（S D 01）より出土したS D 01土器群に限られ、後者は主として堅穴式住居跡群からの出土品である。とくにS D 01土器群はその量および一括性からみて、従来不明であった東三河地方の古墳時代後期の土器、とりわけ土師器研究に資するところ大と考えられるものである。

以下、古墳時代後期の遺物について、A. 6世紀代、B. 7世紀代の二項に分かれて報告することにする。

A. 6世紀代

上記のように6世紀代の遺構出土の遺物はS D 01土器群に限られる。このほかに包含層中より若干の遺物の出土がある。

S D 01土器群出土土器

このS D 01土器群は森岡第2号墳（S Z 02）の南側周溝（S D 01）の南西コーナー部、IVE-4 r グリッドで検出したもので、出土土器は総計で119個体を数える。

検出の経過

このS D 01土器群は、表土剥ぎ後の攪乱土等の除去作業の際に、径1.0m前後の範囲に土器片が露出し、その存在を察知したものである。当該地は旧家屋の母屋の真下で、家屋建築に伴う基礎工事（掘り返し、填圧等）のみならず取り壊し時に攪乱をうけるなどしており、土層の汚れがひどく、一部では土層が填圧で硬化している所もみられるという状況にあった。そのため以後の土器群および遺構の検出は困難をきわめた。当初、土器群は土坑等の遺構内にあるのではないかと予測のもと遺構の検出作業をすすめたが、予期に反し、幅3.0mほどの溝、すなわち森岡第2号墳（S Z 02）の南側周溝（S D 01）内にあることが知られるにいった。ただ周溝内出土とみるにはその広がりが大きいため十分な検討を要するものと考え、周溝埋土の掘削に先立って土器群周辺にトレンチを数箇所入れ、断面観察による遺構検出を試みるとともに、土器群における土器の重なり状況の把握につとめた。その結果、断面観察でも土器群をとりまく遺構は認められず、この土器は周溝内に0.4m前後の土砂が堆積したのちに形成されたもので、土器が据え置かれた状態にあることが判明した。これをうけ周溝埋土の掘削にあたっては、土器群の底レベル前後を殊に慎重を期したが、土層の変化を捉えることはできなかった。そして結局のところ、この土器群と森岡第2号墳との関係を明らかにし得なかった。なお、作業の進行上、S D 01の掘削を土器群の取り上げ、実測に先行させて行なった。実測は原位置を逆搬しているものと判断されたものを取り上げ、基底に並べ置かれた土器の輪郭があらかた明確になった時点で行なった。

土器の出土状態

土器の取り上げ時の所見から、周溝(SD01)内の底から0.4mほど土砂が堆積したのち、その上面に中・大型の甕・壺類を相接するように据え置き、その上に須恵器の杯・高杯類および土師器の高杯、小型壺、碗、鉢等を重ね置いたり、入れ子状に入れたりしてこの土器群は形成されたものと解された。これを復元的に示したものが第34図である。図中の円は、もっとも下におかれた土器の最大径を示し、番号に○印を付したものは、積み重ねられていた土器の番号を示す。出土状態図に忠実に取り上げ位置へおとすと、円は重なることなく整然と並びこの土器群が単なる投棄、流れ込みにより形成ものでなく、人為的に据え置かれたものであることが理解される。直線的に並ぶ箇所がいくつかみられるが据え置かれ方に明確な法則性・規則性を見出すにいたっていない。ただ、土器群の中央やや南寄りのところには北東から南西へ帯状に土器の空白部分が認められる。この空白部分が果たして当初のものであるのか、後世の擾乱により生じたものか断定はできないが、調査時の印象では前者のようであった。ここではひとまず、この空白に意味をみとめる立場にたち、以後、便宜的にその南側をA群、北側をB群とよび分けることとする。なお積み重ねられた土器については、擾乱時の移動を考慮する必要があろう。

本来ならば、個々の土器についてその出土状況をつぶさに記述する必要があるが、この点については、煩雑をさけるため第34図および第7表で以ってそれにかえたい。

出土土器

SD01土器群からは土師器102個体と須恵器17個体の総計119個体の土器が出土した。上記のようにこのSD01土器群には土器の空白部分が帯状に存し、それを境に南側のA群と北側のB群とに分けられた。これをうけここではA群出土品とB群出土品の2群に分けて報告することにする。

報告にあたっては、可能なかぎり実測図の掲載に努めたが、充分にこれを果し得なかったものもある。それらについては、その出土位置を第34図にA～Iの記号を付与して示し、必要に応じてふれることとした。また各々の土器の法量については第7表によられたい。

なお、この土器群の年代、組成等については、第6章で検討することとし、ここでは一部についてふれるにとどめる。

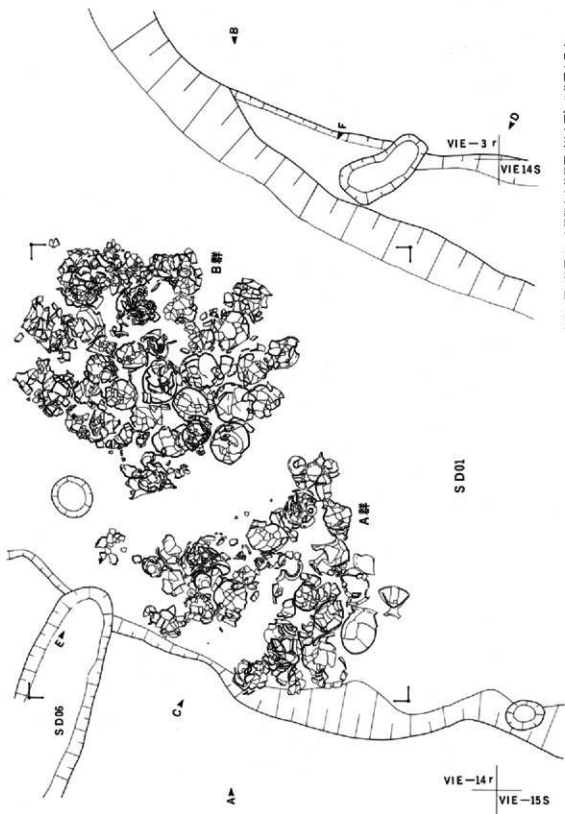
土器の説明に用いる器面の調整手法については概ね慣例に従うが、ハケ調整について若干の区別を行なっているので、あらかじめここでふれておきたい(第32図)。

ハケ調整 感覚的ではあるが、1cmあたり10本前後の平行の条線がつくものをハケ(I)調整、同じく1cmあたり4～5本前後の平行の条線のものハケ(II)調整とよぶ。条線が多く、乱雑で繊維の束状のもので擦ったとみられるものを便宜的にハケ(III)調整として一括する。このハケ(III)調整は、ナデ調整の際に生じる細かな条線と分別し得ないものもみられ、ハケ調整・ナデ調整について再検討の必要を感じるところである。

A群出土土器

A群からは須恵器12個体と土師器53個体が出土した。

1. 須恵器



第30図 S D 01土器群出土状態図(1) (1 : 30)
 矢印で示す範囲は、土器群出土状態図(拡大図)の位置を示す。

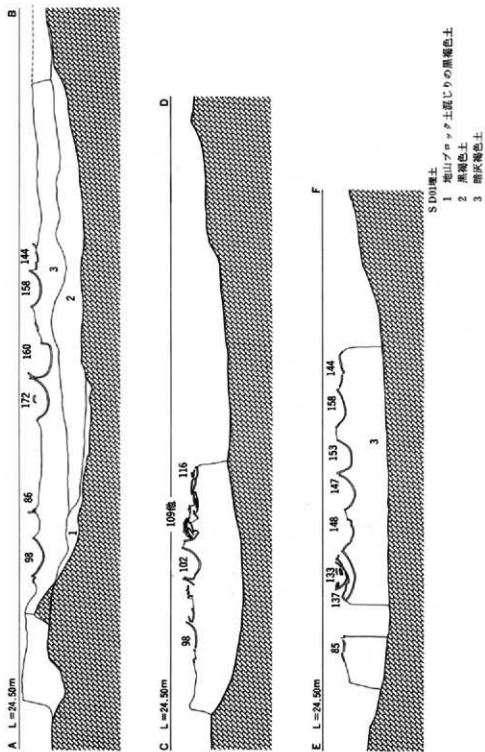


圖31 圖 S D01土器群出土状態(2) (1:30)

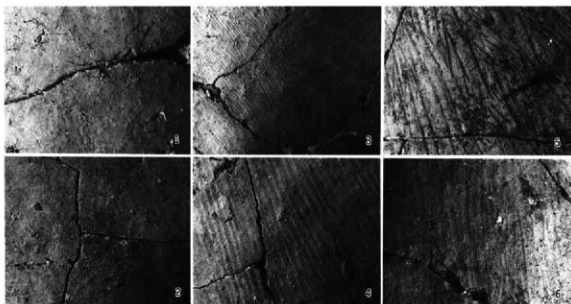
須恵器には蓋杯、杯身、有蓋高杯がある。

蓋杯（第36図65） 蓋杯は1個体みられる。円蓋状の頂部に垂下する口縁部が付く形式のもので、頂部と口縁部とを分ける稜は鈍く、あまり突出しない。口縁端部はわずかに外反し、内面には緩い段がみられる。

杯身（第36図57～64） 杯身は蓋に較べ多く、8個体みられる。いずれも丸底の体部にたちあがり有する受け部がつく形式のものである。57・58は口縁端部にやや内傾する端面を有するもので、端面上は沈線状の凹みがめぐる。59～63のたちあがりは57・58に較べ薄手で短く、口縁端部は丸くおさえられている。底外面の回転ヘラ削り調整は、57が受け部近くまで、58が体部の $\frac{2}{3}$ ほどに及んでいる。これに対し59～64は底外面の $\frac{1}{3}$ ほどにとどまり、底部は平底風になっている。なお、57は、受け部からたちあがり部にかけての外面にのみ降灰軸が認められる点は、焼成方法を考える際の参考となろう。

形態および調整方法よりみて57・58はMT-15型式、59～62はTK-10型式に比定される。

有蓋高杯（第36図66～68） 有蓋高杯は3個体みられる。66は脚部を欠くが、杯部の底外面の破面からみて有蓋高杯の杯部に比定される。概して厚手で、たちあがりはほぼ直立し、口縁端部は丸く（断面三角形）おさまられている。体部外面に降灰軸が認められることから焼成時には蓋がかぶせられていたことが窺われる。67は所謂「短脚1段3方スカシ」の有蓋高杯である。杯部は薄手で、たちあがりは長く、端面は大きく内傾し緩い凹みがめぐり、段状をなす。脚は直線的に開いたち端部近くで外反し端部は内湾する。長い二等辺三角形のスカシが柱状部に穿たれるが、その間隔は均等ではない。端部近くに一条の突帯をめぐらせ、さらに上端面を上方に突出させている。68は、69と較べ薄手で「短脚無スカシ」の有蓋高杯である。口縁部の内面が僅かに凹み、かすかに段をなしている。脚はラッパ状に開き、脚端近くで丸末を帯びて内湾するもので柱状部に2条の沈線がめぐり、脚端部近くには一条の突帯がみられる。



第32図 ナデ・ハケ調整

1. ナデ 2. ナデ 3. ハケ(I) 4. ハケ(II) 5. ハケ(III) 6. ハケ(III)

形態上よりみて、66・67はMT-15型式、68はTK-10型式に比定される。⁹³

2. 土師器

土師器の器種には高杯、碗、鉢、小型壺、壺、甕、埴等がある。量的には甕が最も多い。

高杯 (第36図69-74) 高杯は6個体みられる。口径23.0cmほどの大型品(74)と口径14.0cm前後の小型品(69-73)とがある。74は大きく直線的に開く杯部と、中実の柱状部を有したのち外反し端部が僅かに内湾する脚からなる大型の高杯。内外面ともハケ(II)調整で、口縁部および脚端部の内外はヨコナデ調整が加えられる。小型の高杯は各種あり、杯部の形態から、碗形のもの(69)、稜をなして屈折し外上方へ開くもの(70・72?)、底部と口縁部との移行がなだらかで屈折部外面が凹むもの(71)、同じく底部と口縁部の移行がなだらかで、口縁部が緩く外反し両者の境が稜をなすもの(73)に分けられる。69は碗に台を付けたものである。また71は精良な胎土で、内外面に赤彩が施される。

碗 (第36図76-80) 碗は5個体みられる。いずれも丸底のものである。形態上、半球形をなすもの(碗A 77-80)と腰が張り口縁部が直線的なもの(碗B 76)に大別される。分量についてみると碗Aは口径10-12cm大のもの(78, 79)と16cm大のもの(77・80)とに分けられる。碗Bは口径14cmをはかる。76は碗Bで、内面ナデ、外面不調整で、口縁部内面をヨコナデして仕上げられている。78は碗Aで、口縁端部が外反する。内外面ナデ調整で、口縁部内外面はヨコナデ調整、外面に黒斑を有する。77は碗Aで、底外面が平底風になっている。口縁部は分厚く、端部は丸くおさまられている。内外面ナデ調整で、口縁端部をヨコナデしている。79は小型の碗A。内面ナデ、底外面は不調整で、口縁内外面を幅広くヨコナデしている。精良な胎土。80は口縁部片であるが、外面は緩いカーブをなし、半球形を呈するものとみられる。口縁部内面に突出する稜がみられる。

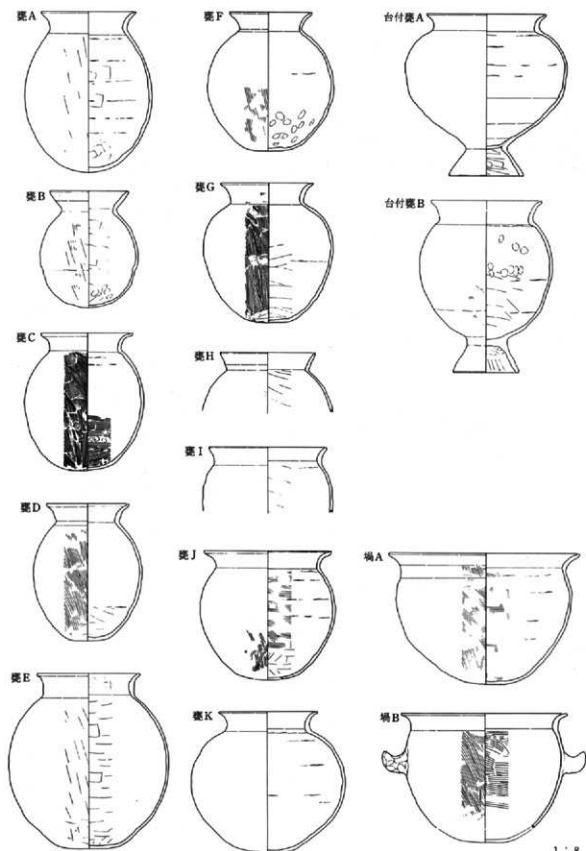
鉢 (第36図75) 鉢は1個体みられる。丸底状の底部に直線的に開く口縁部がつくもので、口縁部は幾分内湾する。「鉢」としたが、穿孔された底部を有する「甕」の可能性もある。底内面ナデ調整で、外面の大半はハケ(III)調整。口縁部内面および外面の一部はヨコナデ調整。

小型壺 (第36図81-84) 小型壺は4個体みられる。81は球形の体部に外反する口縁部がつくもので、胴径10.8cmをはかる。83は扁球形の体部に直立する口縁部がつく直口壺で、体部に較べ口縁部が短い。84は体部と口縁部とが略同長の直口壺で、口縁部内面がヨコナデにより凹んで緩い段をなしている。体部外面にハケ目が着取される。82は肩の張った体部に短く外反する口縁部がつく小型の広口壺である。

壺 (第36図85) 壺は1個体みられる。口縁部を欠く。下ぶくれぎみの体部で、外面ハケ(I)調整、内面はハケ(IIないしIII)調整のちナデ調整で、下半部の凹凸が著しい。なおこの85については出土地点がA群の西のはずれでSX01に交わるころにあたる。この種の壺を他にみないことから、SX01に伴う可能性を否定し得ない。

甕 (第37図-第40図86-106, 110-121) 甕は35個体みられる。これらの甕はその形態から丸底の甕と台付甕に大別され、さらに丸底の甕はA-Iの8種に分けられる。

甕A (97-100) やや長胴の体部に外反する口縁部がつく丸底の甕。口径12cm・器高25cm前後の小型品(97)と口径20cm・器高34cmを越える大型品(98-100)とがある。いずれもナデ調整を基調として顕著なハケ目は認められない。98・100とも内面は平滑ではあるが、粘土の接合痕を充分に消し去っ



第33圖 土器器種分類表(甕・台付甕・埴)

1 : 8

ていない。98の口縁部はヨコナデが強く内面に緩い稜が生じている。このほか、体部が細身のきらいがあるが、110は甕Aの口縁部片とみられる。

甕B (95・96) やや長胴の体部に外傾する口縁部がつく丸底の甕。口径16.5cmの小型品(96)と口径70.0cmの大型品(95)とがある。96の下胴部内外面に段が生じている。外型の使用を示唆するものであるか否か興味もたれるが、ここでは内外面の調整はその上下にまたがっている点を指摘するにとどめておきたい。95は体部の丸みが強く、底外面は平底風に近くなっている。ともに外面にハケ(III)調整が認められるが、条線は薄く外見上はナデ調整と変わらないものである。

甕C (105・94・103・104) やや長胴の体部に直立したのち大きく外反する口縁部がつく平底風の丸底の甕。105・94とも体部はいずれもハケ(I・II)調整を基調としている。103・104は甕Cの口縁部とみられるもので、104の外面はハケ(II)調整である。

甕D (92・93) やや長胴の体部に、外傾ぎみに立ち上がったのち外反する大ぶりの口縁部がつく平底風の丸底の甕である。頸部および口縁端部は強くヨコナデされ、口縁端部が断面三角形を呈する点が上記甕Cと異なる点である。92・93とも外面は縦位のハケ(IIないしIII)調整で、92は口縁部外面にハケ目が残る。このように口縁部外面にハケ目度が残るのは、甕Cに多くみられることである。

甕E (89・90) 丸い体部に短く外反する口縁部がつく平底風の丸底の甕で、口縁部外面が直線的で、内面が湾曲する点を特徴の1つとする。89は口径22.0cm・器高36.8cmの大型品である。89・90とも口縁部内(横位)、外面(縦位)にハケ目を残す。

甕F (102) 丸い体部に短く直立したのち大きく外反する口縁部がつく丸底の甕。口縁端部は断面三角形を呈する。頸部がひきしまっており「壺」とみるべきかも知れない。体部外面はナデ調整で一部ハケ(III)調整が看取される。内面はオサエ・ナデ調整で下部と上半部に凹凸が顕著。

甕G (101) 肩のはった長胴の体部に外反する口縁部がつく丸底の甕。101の1個体。口縁の形状は甕Aに類似し、分けられない。体部内外面ともハケ(III)調整を施すが凹凸が顕著である。

甕H (112) 丸い体部に薄手で外傾する短い口縁部がつくもので、口縁部と体部とが明確な稜でもって分けられる。

甕I (113) やや長胴の体部に短く外反する口縁部がつく広口の甕。113の1個体のみ。

台付甕B (117) 球形に近い体部で、外反する口縁部がつく丸底の甕に台がついた台付甕。117の1個体のみ。台は「貼付」による。

甕の底部片等(114-116、118-121) 115は、外反する口縁部片で、かるい広口のものである。後記甕Jの口縁部片か。116は厚手の体部片で口縁端部および底部を欠く。上記の甕A~Iにあてはまらないものである。120は丸底、114・118・119は平底風の丸底の甕片。平(丸)底の121は分厚く、このS D01土器中においては異質な印象をもつものである。

塀A (第39図107-109) 半球形に近い体部に大きく外反する口縁部がつくもので、口径は体部最大径を上まわる。「塀」という呼称については、適切さを欠くきらいがあるが、ここでは甕との器形上の相異を強調することに主眼をおき、あえて「塀」という呼称を用いることとした。口径30cmほどのもの(107)と口径40cm前後のもの(108・109)の大小がある。底部は略完形品の109をみる限りでは平底風の丸底である。

B群出土土器

B群からは須恵器5個体と土師器49個体が出土した。

1. 須恵器

須恵器には、蓋杯、杯身、有蓋高杯がある。

蓋杯(第42図122) 蓋杯は1個体みられる。円蓋状の頂部に垂下する口縁部がつく形式のものである。比較的薄手のつくりで、頂部と口縁部との境は断面三角形の突帯状となっている。垂下する口縁部はその中位が外へ緩く張り出し、僅かに外反する口縁部内面は浅い凹線がめぐり緩い段をなす。この122は杯身123と組み合せて出土したもので、器質・色調等からみて焼成時より組み合っていたものとみられる。

杯身(第42図123-125) 杯身は3個体みられる。いずれも丸底の体部にたち上がり有する受け部がつく形式のものである。123は薄手のつくりで、たちあがりは長く、端部内面には浅い凹線がめぐり緩い段をなす。この口縁端部の造作は組み合せて出土した上記蓋122と同じである。124は、たちあがり短く内傾し、端部は丸くおさめられている。受け部の直下に凹線がめぐり体部の回転ヘラケズリは底近くに限られる。125は焼成不良のもので、器面の磨滅が進行しており調整手法および細かな形態上の特徴を捉えることはできないが、全体の形状は124に似る。

122および123はMT-15型式に、124・125はTK-10型式(～TK-43型式)に比定されるものである。125はともかくとして、124はその少量等TK-43型式に近いものであり、S D01土器群出土の須恵器のなかで唯一、TK-10型式を下る可能性をもつものである。

有蓋高杯(第42図126) 有蓋高杯は1個体みられる。短脚で無スカシのものである。杯部は厚手でたちあがり短く内傾し端部は丸く(断面三角形)おさめられている。脚部は太く、緩やかに外反して開いたのち段を有して幾分内湾する脚端部にいたる。接地面は平らになっている。脚部の形状には、甕の口頸部を彷彿させるものがある。

杯部の少量形状等よりみて、TK-10型式に比定される。

2. 土師器

土師器の器種には、高杯・碗・小型壺・鉢・瓶・壺・甕・埴等がある。量的には甕が多い。

高杯(第42図127) 高杯は1個体みられる。杯部は底部と口縁部との移行がなだらかなもので、緩い段を設け両者を区別している。精良な胎土で、杯部内外面および脚外面には赤彩が施される。

碗(第42図128-129) 碗は2個体みられる。128は半球形を呈する碗Aである。ハケ(II)調整痕が顕著で、外面には黒斑が認められる。129は口縁部が直線的に外傾する碗B。口縁端面は面をなす。

鉢(第42図132) 平底で、口縁部が筒状をなす小型品。必ずしも適切な呼称とはいえないが、ここでは鉢とした。粘土紐を積み上げ、簡単なオサエ・ナデを加えただけのもので内外面の凹凸が著しい。

瓶(第42図133) 球形の体部に、外傾し端部が短く直立する口縁部がついた壺の肩部に環状の把手を1対貼付したもので、須恵器の提瓶と意識・模倣してつくったものとみられる。

小型壺(第42図130・131・135) 小型壺は3個体みられ、その形態は様々である。130は「ハ」の字状に広がる台のつく球形の体部に、外反し端部が短く直立する口縁部がつく、小型台付壺である。

上部は、「円板充填法」による装着である。外面はハケ（Ⅰ）のちナデ調整。131は、口縁部の大半を欠くが、球形の体部に直立する口縁がつく直口壺とみられるものである。体部外面はハケ（Ⅲ）のちナデ調整。135は、小型の壺底部片とみられるもので、硬質に焼き上がっている。

壺（第45図156） 壺は1個体みられる。156は球形の体部に、短く直立したのち大きく外反する小ぶりの口縁部がつくもので、口径18.0cm、器高33.2cmをはかる大型壺である。体部外面は、荒いハケ（Ⅲ）調整である。底部を欠くが、周辺部の状況からみて丸底ないし平底風の丸底になるものと考えられる。

壺（第43図138～149・153・157～172） 壺は38個体みられる。これらは形態等の相違から丸底の壺と台付壺に大別され、前者はさらに7種に分けられる。

壺A（163） 163は壺Aの口縁部片とみられるもので、体部は内外面ナデ調整で、口縁部内外面をヨコナデして仕上げている。

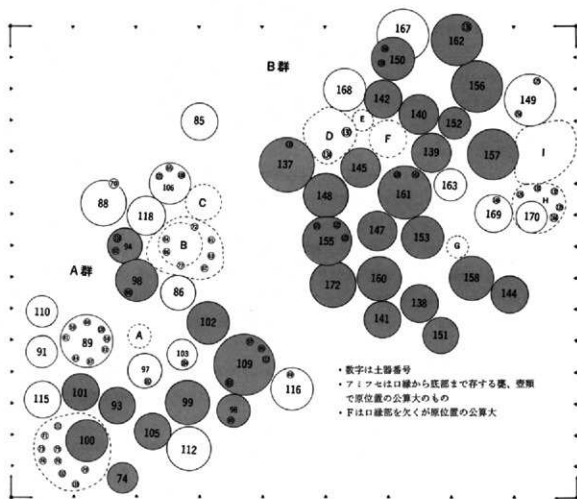
壺C（138～143・146・148・164・165） やや長胴の体部に、直立したのち大きく外反する口縁部がつく平底風の丸底の壺。この壺CはB群出土の壺のなかではもっとも多いものである。148が口径20.0cm・器高34.0cmをはかるほかは、口径18.0cm・器高28.0cm前後のものである。138～143は形態の上では類似するが、調整手法は、138～141がハケ調整を基調とするのに対し142・143がナデ調整とし、2つに大別される。146は体部の中位部分を欠くもので、図上復元で示した。体部の丸味が強いのはこのためかも知れない。調整はハケ調整を基調とする。148は、大型の壺Cで、調整は外面がハケ（Ⅲ）のちナデ調整、内面上半が左上りのナデで下半はナデである。164・165はその形態より壺Cの口縁部片とみられるものである。

壺D（144） やや長胴の体部に、外傾ぎみに立ち上がったのち端部が外反する口縁部がつく平底風の丸底壺である。壺Dは1個体みられる。体部に比べ口縁部は大ぶりで、口縁端部は断面三角形を呈する。体部内面上半に、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に看取される。

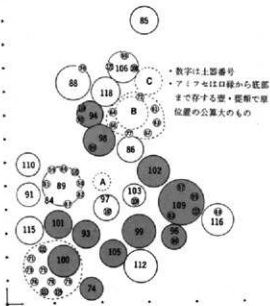
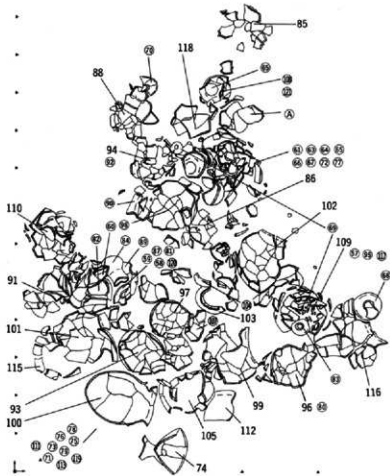
壺F（147・149） 丸い体部に、短く直立したのち大きく外反する口縁部がつく平底風の丸底壺で、口縁端部は断面三角形を呈する。2個体みられる。147は、体部の外面上半がナデ、下半がハケ（Ⅱ）調整、内面がナデ、オサエで、下部にオサエが顕著となっている。口縁部内外面ともヨコナデ、149は硬質のもので、体部内外面および口縁部内外面にハケ（Ⅱ）調整痕が看取される。この壺Fは、頸部のしまりが強く「壺」とすべきかも知れない。

壺G（153） 肩のはったやや長胴の体部に、外反する口縁部がつく平底風の丸底壺。1個体みられる。この153はなで肩で、その形態は須恵器の壺・甕類を彷彿させるものがあり、その調整手法の相違のためかA群にみられた壺Gとは焼きを異にする。別種として扱うべきかも知れない。

壺J（154・155・172） 丸い体部に外反する口縁部がつく丸底の壺。3個体みられる。155は器面の遺存状態が悪く調整不明。172は、ことに遺存状態が悪く脆弱で、発掘時において十分な取り上げが出来なかったものである。調査時の所見では、155に似た大形の丸い体部を有するものであった。154は体部下半を欠くが、体部外面ハケ（Ⅱ）のちナデ調整、内面はハケ（Ⅲ）調整で、口縁部内外面をヨコナデして仕上げている。頸のしまりの強い155の形態からすれば、この壺Jは「壺」とすべきかも知れない。



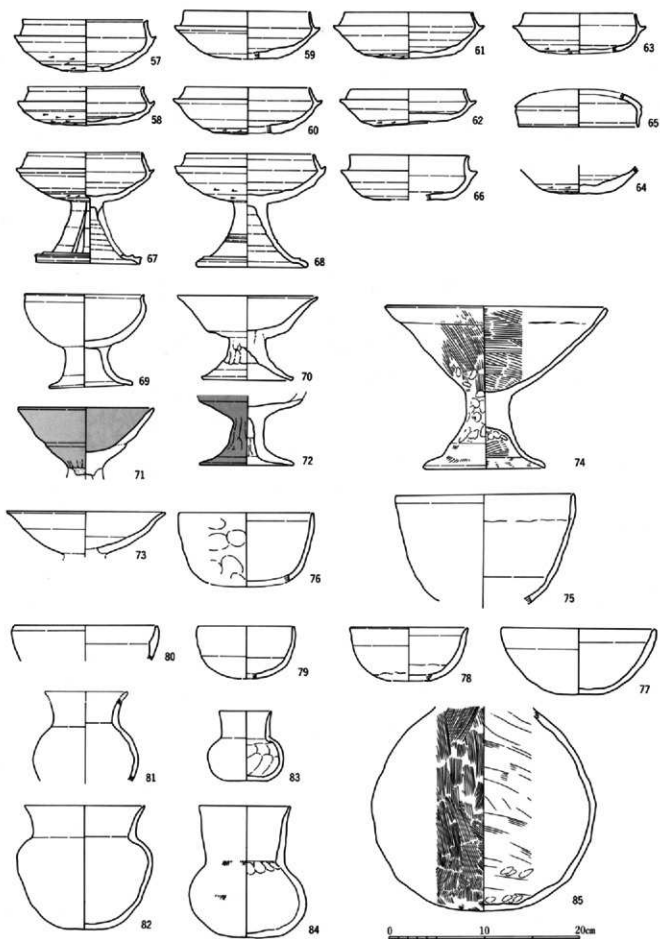
第34図 SD01土器群出土状態 模式図 1/24



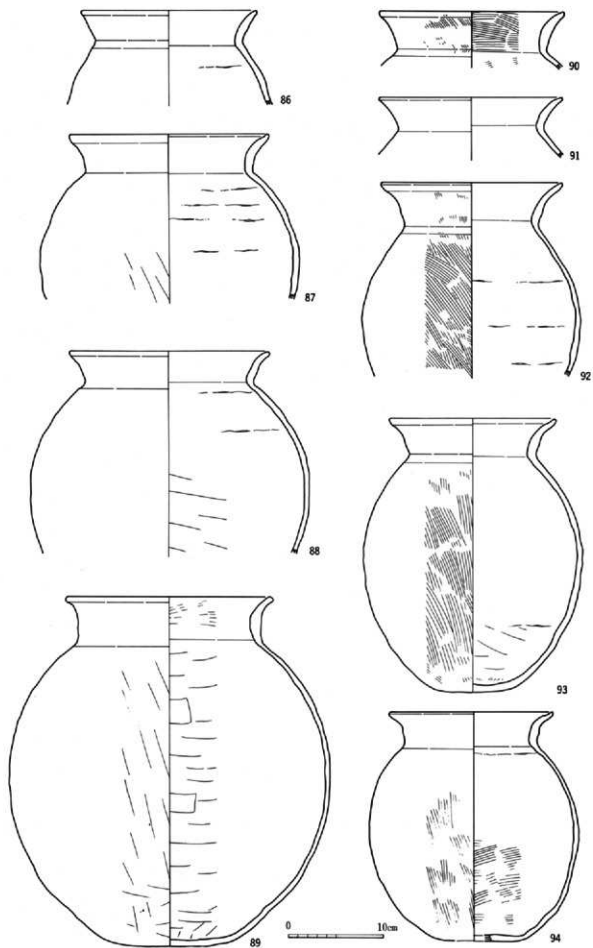
第35図 S D01土器群(A群)出土状態図

(上) 実測図 1 : 20

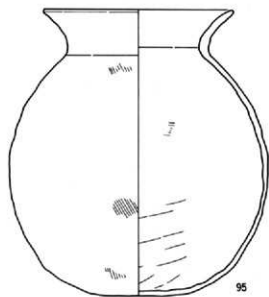
(下) 模式図 1 : 60



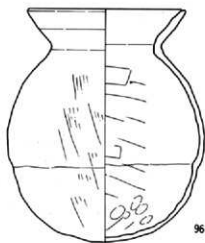
第36图 SD01土器群(A群)出土土器実測図(1) (1:4)



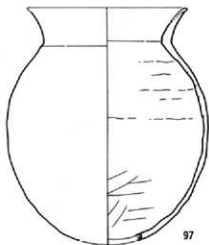
第37图 S D01土器群(A群)出土土器实例图(2) (1:4)



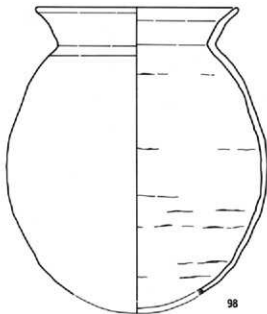
95



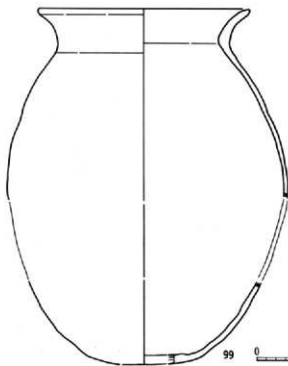
96



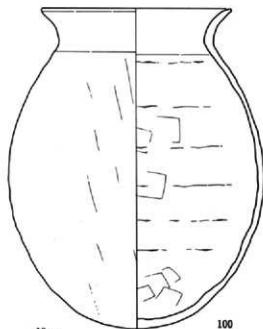
97



98



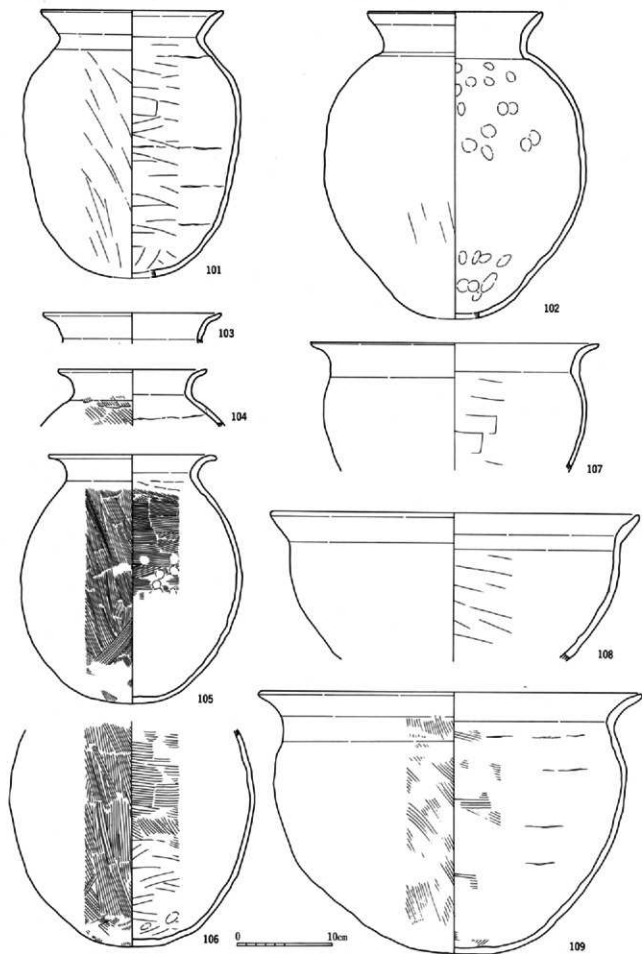
99



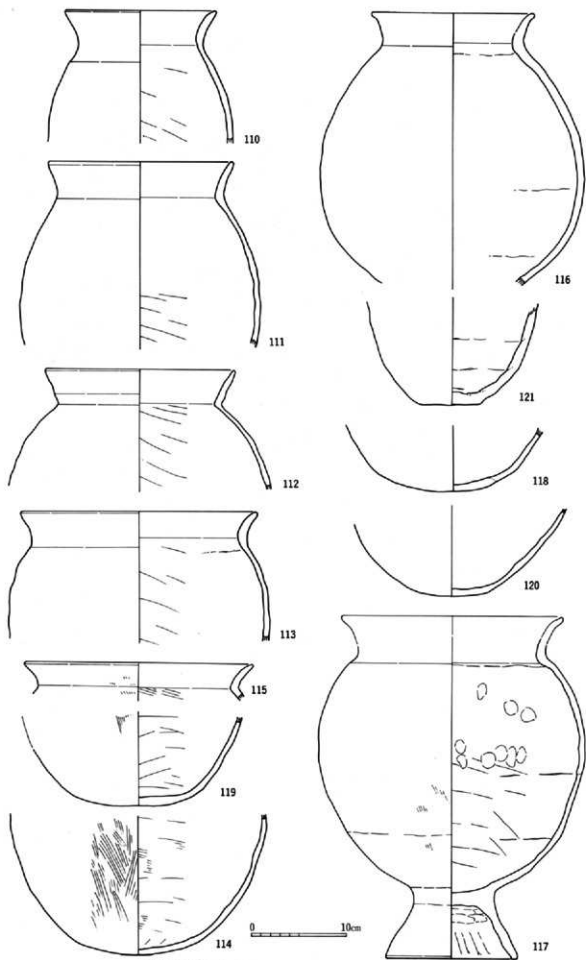
100

0 10cm

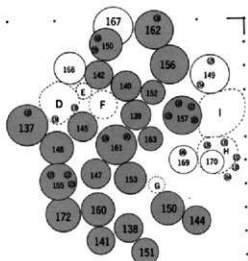
第38图 S D01土器群 (A群) 出土土器実測图(3) (1:4)



第39图 S D01土器群(A群)出土土器実測图(4) (1:4)



第40图 S D01土器群(A群)出土土器实测图(5) (1:4)

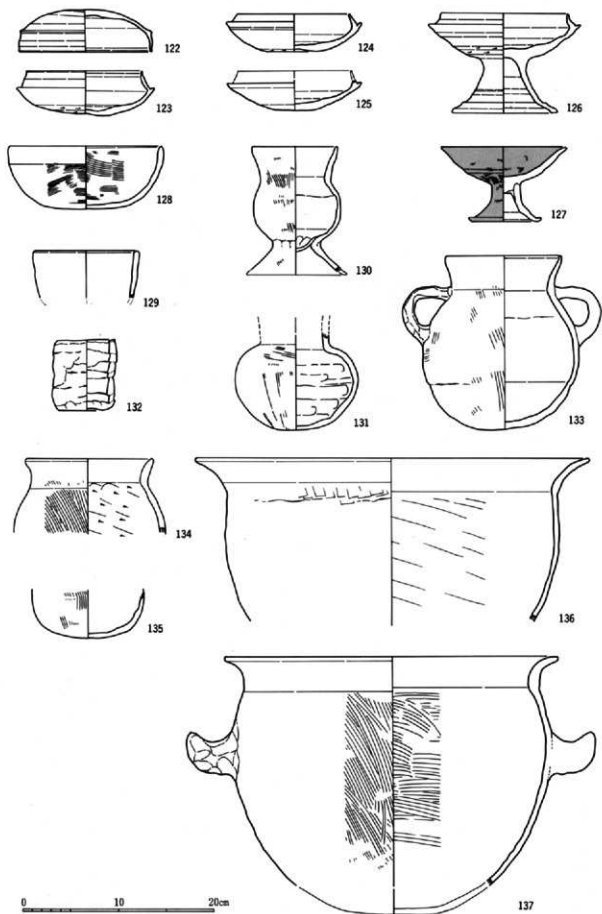


- ・数字は土器番号
- ・Aはふせは口縁から底部まで存する礎・壺類で原位置の公算大のもの
- ・Fは口縁部を欠くが原位置の公算大

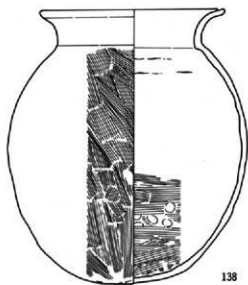
第41図 S D01土器群(B群)出土状態図

上 実測図 1 : 20

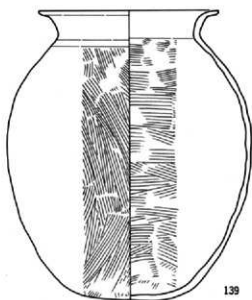
下 模式図 1 : 60



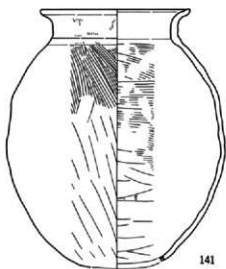
第42图 S D01土器群(B群)出土土器実測图(1) (1:4)



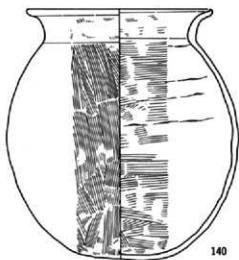
138



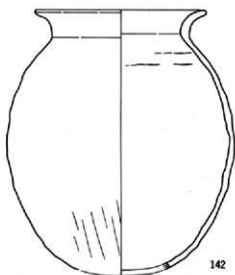
139



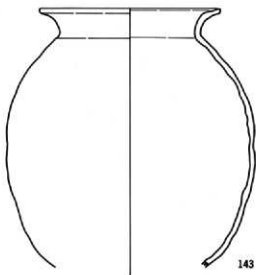
141



140



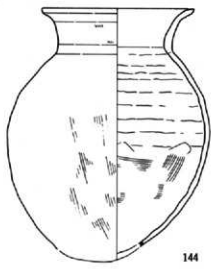
142



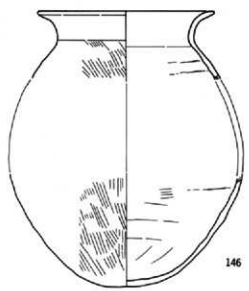
143

0 10 20cm

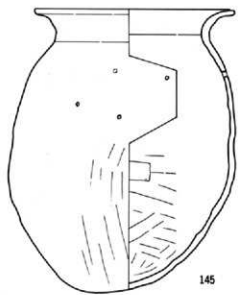
第43图 SD01土器群 (B群) 出土土器実測図(2) (1:4)



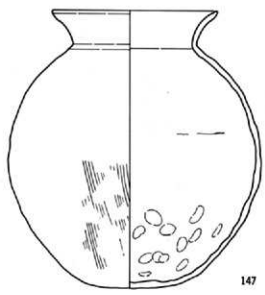
144



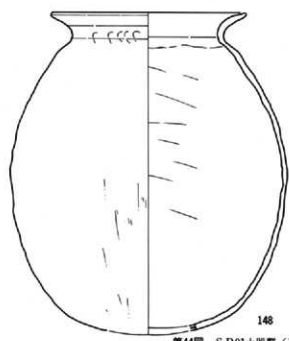
146



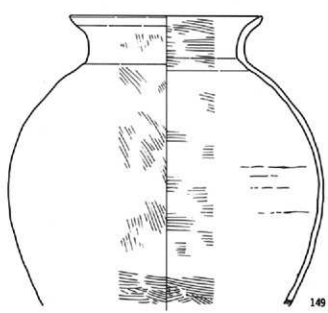
145



147



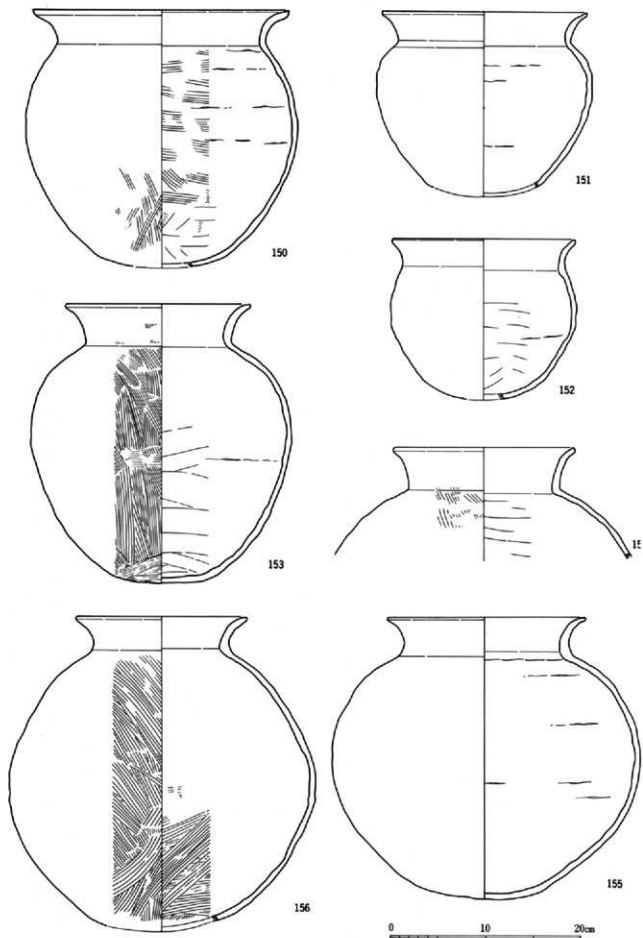
148



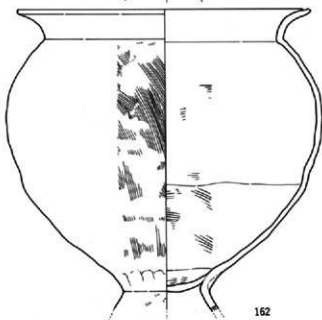
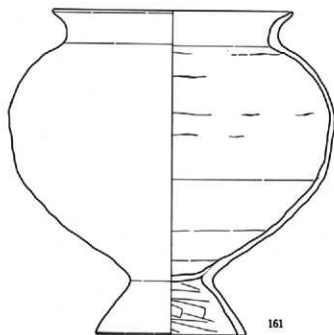
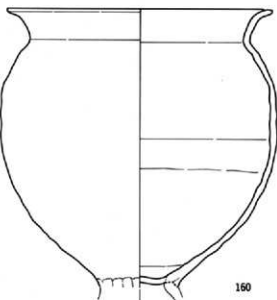
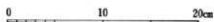
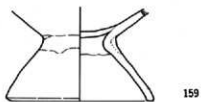
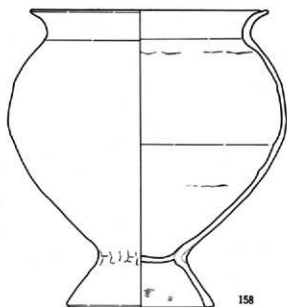
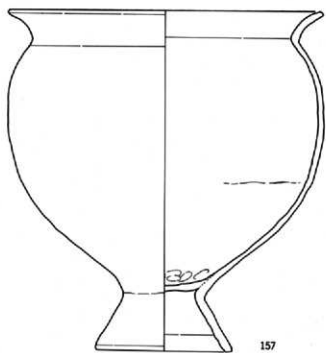
149



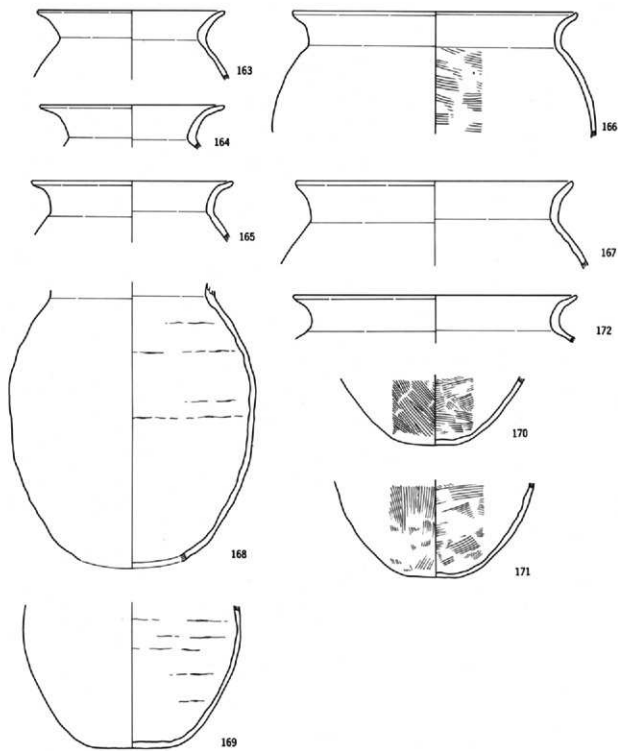
第44图 SD01土器群 (B群) 出土土器実測図(3) (1:4)



第45图 S D01土器群 (B群) 出土土器実測图(4) (1:4)



第46图 S D01土器群 (B群) 出土土器実測図(5) (1 : 4)



第47图 S D01土器群(B群)出土土器实测图(6) (1:4)

第7表 S D01土器群出土一覧表

S D01土器群 (A群)

※出土状況欄の右下の番号は調査時取り上げ番号備考欄に口縁部までの容量(実測からの算出)を示した。()内は頸部までの容量

番号	器種	調整手法等			色調	容量 上:口径 下:器高	出土状況	備考
		口縁部	体部外面	体部内面				
57	杯				灰色	13.0 5.4	109に重なって出土	9-5
58	杯				(青)灰色	12.2 4.0	89に重なって出土	24-6
59	杯				灰(緑)色	13.2 5.0	89に重なって出土	38
60	杯				(青)灰色	13.0 5.0	89に重なって出土	33
61	杯				黄(緑)灰色	13.4 4.8	Bに重なって出土	54-3
62	杯				暗青灰色	11.9 3.9		56-1
63	杯				暗青灰色	11.7 4.2	Bに重なって出土	54-4
64	杯				灰(緑)色	—	Bに重なって出土	54-6
65	蓋杯				灰色	12.6 (4.0)	106に重なって出土	54-1
66	有蓋高杯				(青)灰色	12.4 —	Bに重なって出土	54-2
67	有蓋高杯				暗青灰色	12.8 11.6	Bに重なって出土	54-5
68	有蓋高杯				灰色	13.2 12.0	116に重なって出土	32

(土師器)

番号	器種	調整手法等			色調	容量 上:口径 下:器高	出土状況	備考
		口縁部	体部外面	体部内面				
69	高杯		ハクイガキ		赤黄灰色	12.6 9.8		9-100
70	高杯	ヨコナデ			赤褐色	14.5 9.0	89に重なって出土	51
71	高杯			赤彩	黄灰色	14.0 —	100上およびその周辺出土	22-6
72	高杯		赤彩		黄灰色	—	Bに重なって出土	54-8
73	高杯	ヨコナデ			赤(灰)色	16.6 —	100上およびその周辺出土	22-7
74	高杯	ヨコナデ	ハク(II)	ハク(II)	赤褐色	23 17.2		21
75	鉢	ヨコナデ	ナデ	ナデ	赤黄灰色	18.6 (12.2)	100上およびその周辺出土	22-8
76	鉢		ナデ、オヤニ	ナデ	赤黄灰色	14.0 (8.5)	100上およびその周辺出土	22-11
77	鉢	ヨコナデ	ナデ、オヤニ	ナデ	赤黄灰色	16.0 7.0	Bに重なって出土	54-7
78	鉢	ヨコナデ	ナデ、オヤニ	ナデ	黄赤灰色	12.2 5.6	100上およびその周辺出土	22-9
79	鉢	ヨコナデ	ナデ、オヤニ	ナデ	赤褐色	10.0 5.6	100上およびその周辺出土	22-10
80	鉢		ナデ、オヤニ	ナデ	赤黄褐色	15.0 —	96に重なって出土	12-2
81	小型壺	ヨコナデ	ナデ、オヤニ	ナデ	黄灰色	(8.6) (11.0)	89に重なって出土	24-5
82	小型壺				赤褐色	12.4 13.0	89に重なって出土	40
83	小型壺	ヨコナデ	ナデ	オヤニ	赤黄灰色	5.3 7.4	109に重なって出土	10

番号	器種	調整手法等			色調	法量 上:口径 下:器高	出土状況	備考
		口縁部	体部外面	体部内面				
84	小型甕	ヨコナゲ	ハケのちナゲ		赤赤褐色	9.4 13.8	99に重なって出土	35
85	甕		ハケ(I)	ナゲ、ハケ(III)	赤黄褐色	—	—	76
86	甕	ヨコナゲ	ナゲ	ナゲ	赤黄褐色	18.2	—	27
87	甕	ヨコナゲ	ハケ(III)	ナゲ	赤黄褐色	20.0	99に重なって出土	24-2
88	甕	ヨコナゲ	ハケ(III)	ナゲ、ハケ(III)	黄灰色	20.8	—	50
89	甕 E	ヨコナゲ	ハケ(III)	ナゲ ハケ皿(板ナゲ)	灰黄色	21.6 37.0	24-1	20374(19.205)cc
90	甕 E	ハケ(II)(のちナゲ)	ハケ(II)	ナゲ	(赤黄褐色)	19.2	99に重なって出土	28-2
91	甕	ヨコナゲ	ナゲ	ナゲ	赤黄褐色	19.2	—	25
92	甕 D	ヨコナゲ 外ハケ皿のちヨコナゲ	ハケ(III)	ナゲ	暗茶褐色	18.8	94に重なって出土	99-1
93	甕 D	ヨコナゲ	ハケ(III)	ナゲ	赤灰褐色	18.2 28.2	—	17
94	甕 C	ヨコナゲ	ハケ(III)	上半 ナゲ、オヤム 下半 ハケ(III)	暗茶褐色	16.8 24.2	99-3	
95	甕 B	ヨコナゲ	(ハケ皿?のち) ナゲ	ナゲ 下部(板)ナゲ	明黄褐色	19.8 30.2	109に重なって出土	9
96	甕 B	ヨコナゲ	ハケ(III)	(板)ナゲ、オヤム	赤褐色	16.4 24.6	13-1	4.854(4.365)cc
97	甕 A			ナゲ 下部(板)ナゲ	黄赤褐色	16.4 (28.0)	—	31
98	甕 A	ヨコナゲ	ナゲ(ハケ皿?)	ナゲ(ハケのち)	黄灰色	21.0 (32.2)	28-1	
99	甕 A			ナゲ	赤褐色～ 黄赤褐色	27.0 (37.6)	—	14
100	甕 A	ヨコナゲ	(板)ナゲ(ハケ皿)	板ナゲ	暗褐色～ 赤黄褐色	19.8 34	22-1	11.496(10.530)cc
101	甕 G	ヨコナゲ	ハケ(III)	(板ナゲ)ナゲ	(赤)黄褐色	19.0 28.2	—	18
102	甕 F	ヨコナゲ	ナゲ	ナゲ・オヤム	赤褐色	18.2 32.4	—	26
103	甕 C	ヨコナゲ				18.8	—	36-37
104	甕 C	ヨコナゲ	ハケ(III)	ナゲ		16.0	103に重なって出土	36-37
105	甕 C	ヨコナゲ	ハケ(I)	上半 ハケ(I) 下半 ナゲ・オヤム	赤黄褐色	17.0 26.2	—	15
106	甕		ハケ(II)	ハケ(II)・ナゲ	赤黄褐色	—	—	56-2
107	甕 A	ヨコナゲ	板ナゲ	板ナゲ	暗褐色	29.8	97に重なって出土	36
108	甕 A	ヨコナゲ	(板)ナゲ	(板)ナゲ	赤黄褐色	38.4	106に重なって出土	55-1
109	甕 A	ヨコナゲ	ハケ(II)のちナゲ (皿)	ハケ(II)のちナゲ (皿)	黄褐色～ 褐色	40.0 28.6	9-3	20.214(17.366)cc
110	甕 A	ヨコナゲ	ナゲ	ナゲ	黄灰色	15.8	—	23
111	甕 Aホ	ヨコナゲ	ナゲ	ナゲ	黄灰褐色	19.2	100上およびその周辺出土	22-2
112	甕 H	ヨコナゲ	ナゲ	(板)ナゲ	褐色	19.8	—	13
113	甕 I	ヨコナゲ	ナゲ	(板)ナゲ	赤褐色	24.6	100上およびその周辺出土	22-3
114	甕		ハケ(III)	ハケのちナゲ	赤褐色	—	94に重なって出土	99-2
115	甕 J	ヨコナゲ	ハケ	ハケ(II)	赤褐色	24.0	—	19

番号	部種	調整手法等			色調	流量 上：口徑 下：器高	出土状況	備考
		口縁部	体部外面	体部内面				
116	甕 A コ	ココナデ	ナデ	ナデ	(赤)赤褐色	16.6 —	11	
117	台付甕B	ココナデ	ナデ(ハト目) 台は軸付	ナデ・オナエ	赤(灰)褐色	23.2 36.2	109に重なって出土	9-1 11.447(10.146)cc
118	甕		ナデ	ナデ	(灰)赤褐色	—	52	
119	甕		ナデ ハト目	(灰)ナデ	赤黄褐色	—	100上およびその周辺出土	34-4
120	甕		(ナデ)	(ナデ)	赤褐色	—	99に重なって出土	24-3
121	甕		ナデ	ナデ・オナエ	赤褐色	—	106に重なって出土	55-2
A	甕類						37	
B	台付甕		ナデ	ナデ			54	
C	甕		ナデ	ナデ			53	

S D01土器群 (B群)

〈須恵器〉

番号	部種	調整手法等			色調	流量 上：口徑 下：器高	出土状況	備考
		口縁部	体部外面	体部内面				
122	蓋杯				明青灰色	13.9 4.4	156に重なって出土	66-1
123	杯身				明青灰色	12.1 4.4	156に重なって出土	66-2
124	杯身				青灰色	11.9 3.9	161に重なって出土	62-1
125	杯身				灰緑色	—	149に重なって出土	84
126	有蓋筒杯				青灰色	13.4 10.5	H及びI70に重なって出土	89・90

〈土師器〉

番号	部種	調整手法等			色調	流量 上：口徑 下：器高	出土状況	備考
		口縁部	体部外面	体部内面				
127	高杯	ココナデ	杯底外面 ハト目のもナデ 内外面 赤彩		黄灰色 赤	13.0 7.8	157に重なって出土	86-5
128	碗	ココナデ	ハテ(I)・ナデ	ハテ(I)・ナデ	(赤)黄褐色	16.0 6.6	157に重なって出土	86-4
129	碗	ナデ	ナデ	ナデ	黄灰色	11.2 —	157に重なって出土	86-2
130	小型甕	ココナデ	ハテ(II)のもナデ 台は片断光景出による着流	ナデ・オナエ	(赤)黄褐色	8.8 (13.5)	Dに重なって出土	64-2
131	小型甕		ハテ(II)のもナデ	ナデ・オナエ	赤黄褐色	—	HおよびI70に重なって出土	80-3
132	鉢	ナデ	ナデ	不調整	(赤)黄褐色	5.4 7.4	HおよびI70に重なって出土	88
133	瓶	ココナデ	ハテ(III)・ナデ(II)	ナデ	赤褐色	11.8 18.4	137に重なって出土	57 1.968(1670)cc
134	甕	ココナデ	ハテ(II)	ナズリ	灰黄褐色	13.2 —	Dに重なって出土	89
135	小型甕		ハテ(II)	ナデ	暗(赤)褐色	—	HおよびI70に重なって出土	80-3
136	瓶 A	ココナデ	ナデ	(灰)ナデ	(赤)黄褐色	41.2 —	162に重なって出土	70-2
137	瓶 B	ココナデ	ハテ(II) 肥字の磨殺法は不明	ハテ(II)・ナデ	赤褐色	34.4 (27.2)	58	
138	瓶 C	ココナデ	ハテ(I)	上平 ナデ・オナエ 下平 ハテ(I)	赤黄(灰) 褐色	19.2 28.8	5	7.668(7.185)cc

番号	器種	調整手法等			色調	流量 上：口径 下：器高	出土状況	備考
		口縁部	器部外面	器部内面				
139	甕 C	ヨコナヅ	ハケ(II)	ハケ(II)	緑茶褐色	18.4 20.6	150に重なって出土	9.860(9.366)cc
140	甕 C	ヨコナヅ	ハケ(II)	ハケ(II)	赤褐色	19.2 26.4		73
141	甕 C	ヨコナヅ	ハケ(II)・(III)	上半 ハケ(II) 下半 (瓶)ナヅ	(赤)深灰色	16.4 (27.4)		4
142	甕 C	ヨコナヅ	ナヅ・ハケ(II)	ナヅ・オヤム	暗褐色	17.8 (28.3)		75
143	甕 C	ヨコナヅ	ナヅ(ハケIII)	ナヅ・オヤム	赤黄褐色	18.8 (31.0)	161に重なって出土	62-3
144	甕 D	ヨコナヅ	ハケ(II)のちナヅ	上半 ナヅ・オヤム 下半 ハケ(II)・ナヅ	赤褐色	15.8 (26.6)		1
145	甕	ヨコナヅ	ナヅ ハケ(III)	上半 ナヅ・オヤム 下半 瓶ナヅ	赤黄褐色	20.8 29.6		65
146	甕 C	ヨコナヅ	ハケ(III)	ハケ・ナヅ	緑茶褐色	17.0 —	169に重なって出土	86-6
147	甕 F	ヨコナヅ	ナヅ・ハケ(III)	(瓶)ナヅ	(深)緑褐色	17.2 29.2		10.262(9.610)cc
148	甕 C	ヨコナヅ	ナヅ・ハケ(III)	ナヅ・オヤム	暗褐色	20.2 (34.0)		64-1
149	甕 F ハケ(II)のち ヨコナヅ		ハケ(II・III)のちナヅ	ハケ(II・III)・ナヅ	赤系褐色 暗茶褐色	20.2 —		84
150	甕 K	ヨコナヅ	ハケ(III)・ナヅ	ハケ(III)・ナヅ	黄灰色	26.8 27.2		72-1
151	甕 K	ヨコナヅ	ナヅ	ナヅ・オヤム	(赤)深灰色	21.5 (19.6)		5.128(4.182)cc
152	甕 K	ヨコナヅ	ナヅ	(瓶)ナヅ	(赤)深灰色	19.0 17.0		3.473(2.715)cc
153	甕 G	ヨコナヅ	ハケ(II)	ハケ(II)・ナヅ	赤黄褐色	19.2 28.4		10.166(9.431)cc
154	甕 J	ヨコナヅ	ナヅ	(瓶)ナヅ	黄灰色	19.0 —	149に重なって出土	82
155	甕 J	ヨコナヅ	ナヅ	ナヅ(オヤム)	赤黄褐色	20.4 29.8		14.792(13.964)cc
156	甕	ヨコナヅ	ハケ(III)	上半 ナヅ 下半 ハケ(III)	赤黄褐色	17.6 (33.3)		15.145(14.632)cc
157	台付甕A	ヨコナヅ	ナヅ 台は円筒光輝法による着装	ナヅ	暗褐色	32.6 36.0		17.292(15.512)cc
158	台付甕A		ナヅ 台は円筒光輝法による着装	ナヅ・オヤム	赤黄褐色 ～赤褐色	24.8 31.4		11.926(9.713)cc
159	台付甕A		ナヅ	ナヅ	暗褐色	—		72-3
160	台付甕A	ヨコナヅ	ナヅ 台は円筒光輝法による	ナヅ	赤黄褐色	27.6 —		8
161	台付甕A	ヨコナヅ	ナヅ	ナヅ	赤黄褐色	25.0 34.2		15.540(14.182)cc
162	台付甕A	ヨコナヅ	ハケ(III)・ナヅ	ハケ(III)・ナヅ	赤黄褐色	30.4 —		16.083(14.385)cc
163	甕 A	ヨコナヅ	ナヅ	ナヅ	赤黄褐色	19.4 —		91 縹色の台脚?片付 品
164	甕 C	ヨコナヅ			暗褐色	19.4 —	且および170に重なって出土	80-1
165	甕 C	ヨコナヅ			赤黄褐色	21.0 —	157に重なって出土	86-3
166	甕 K	ヨコナヅ	ナヅ	ハケ(III)	黄灰色	29.8 —	150に重なって出土	72-2
167	甕 ?				赤褐色	29.0 —		72-4
168	甕		ナヅ(ハケIII)	ナヅ(ハケIII)	暗褐色	—		98-2
169	甕		ナヅ	ナヅ	(赤)深灰色 色	—		98-1
170	甕		ハケ(II)	ハケ(II)・ナヅ	赤黄褐色	—		80-2

器種	調整手法等			色調	法量 上:口径 下:器高	出土状況	備考
	口縁部	体部外面	体部内面				
I11 甕		ハケ(II)のみナデ	ハケ(III)・ナデ	赤褐色	—	155に重なって出土	66-3
I12 甕 J	ヨコナデ	(ナデ)	(ナデ)	(赤)黒灰色	29.6		6
D 甕 類							96
E 甕 類							74
F 甕		ナデ	ナデ・オサユ				63 胴部片
G 甕		ナデ	ナデ				96
H 甕 類							80
I 甕 類							85

第8表 S D01土器群(A群)出土須恵器法量表
単位(cm)

器種	番号	口径	器高
杯 蓋	65	12.6	—

器種	番号	口径	受部径	器高
杯 身	57	13.0	15.0	5.4
	58	12.2	14.5	4.0
	59	13.2	15.2	5.0
	60	13.0	15.6	5.0
	61	13.4	15.8	4.8
	62	11.9	14.1	3.9
	63	11.7	14.0	4.2
	64	—	—	—

有蓋高杯	66	12.4	14.0	—(4.8)
	67	12.8	14.4	11.6(5.2)
	68	13.2	15.6	12.0(5.2)

器高の()は有蓋高杯の杯部高

第9表 S D01土器群(B群)出土須恵器法量表
単位(cm)

器種	番号	口径	器高
杯 蓋	122	13.9	4.4

器種	番号	口径	受部径	器高
杯 身	123	12.1	14.6	4.4
	124	11.9	14.1	3.9
	125	—	14.0	—

有蓋高杯	126	13.2	16.0	10.4(4.8)
------	-----	------	------	-----------

器高の()は有蓋高杯の杯部高

甕K (150~152・166) やや肩の張る球形の体部に、外反する口縁部かつ広口の甕で、口径は体部最大径とほぼ同大である。法量的には大中小に分かれる。すなわち、口径27.0cmの中(151)、口径19.0cmの小(152)である。A群でみられた小型甕はその形態からこの甕Kの小型品とみることができるとも知れない。調整は大品型にハケ調整がみられ、中・小型品はナデ調整を基調とする。

そのほかの甕(134・145・168~171) 134は細身の体部に外傾する口縁部がつく小型の甕。体部外面は左上がりのハケ(II)調整、内面は左上がりのヘラケズリで口縁部内外面をヨコナデして仕上げている。器壁は分厚く、器面調整等、土器群中のなかには異質なものとなっている。145は、基本的には甕Cと同形のものであるが、口縁上端面と底部外面の接地面とが併行せず、加えて体部上半に径2~3ミリ大の小穴を施成前に穿っているなど異なる。底部の傾き、穿孔の意味について充分な説明をなし得ない。168はやや長胴で平底風の丸底甕の体部片。外面はハケ(III)ないし条線の強いナデ調整で、内面はナデ調整。169~171は、甕の底部片で、いずれも平底風の丸底である。

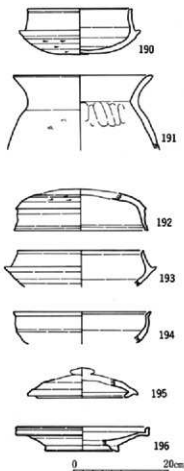
台付甕A (157~162) 肩のはった倒卵形の体部に大きく外反する口縁部がつく台付甕。台はいずれも「円板充填法」による装着である。6個体みられる。ここでは台付甕Aとして一括したが、形態上の差は大きく、これを変異の幅でとらえるか、別種とみなすかは今後の課題である。器面調整はナゲ調整を基調としハケ目をのこさないが、162についてはハケ目を充分に消し去っていない。

場A (第42図136) 半球形の体部に大きく外反する口縁部がつくもので、口径は体部の最大径を上まわる。口径42.0cmの大型品が1個体みられる。

場B (第42図137) 半球形の体部に、外反する口縁部がつくもので、肩部に1対の把手をつける。口径34.5cmの大型品が、1個体みられる。体部外面は左上がりのハケ(II)調整、内面は横位のハケ(II)調整で、口縁部内外面をヨコナゲして仕上げている。把手は、挿入法によるものか貼付法によるものか定かにし得ない。

包含層等出土品 (第48図 190~195)

190は、須恵器の杯身で、S B11埋土中出土の破片とVIF-10aのグリッド出土の破片とが接合したものである。長いたち上がりの口縁端面は内傾する平坦面をなしており、底外面の回転ヘラケズリは丁寧で、受け部近くにおよんでいる。口径11.0cm。その形態、技法より5世紀後半のTK-208型式に比定されるものである。本例は、確実に5世紀代に遡る唯一の遺物である。191は、上記190が出土したS B11より出土した土師器の甕である。外面はハケ(I)のちナゲ調整、内はナゲ、オサエ調整で、口縁部内外面はヨコナゲ調整である。既述のようにS B11は攪乱坑が多々みられ、190とこの191とが確実な伴出関係とみることはできない。192は、VIE-14qグリッド出土の須恵器の蓋杯。口径14.2cmで、口縁端部は浅く凹む面をもつ。MT-15型式ないしTK-10型式に比定される。193は、VIF-9 a・bグリッド出土の須恵器の杯身。口径13.0cm、受け部径16.0cmをはかる。口縁端は丸くおさめられている。TK-10型式に比定される。194は、VIE-10tグリッド出土の須恵器で、高杯の口縁部片とみられる。口縁端部が短く受け口状に外反する。7世紀代に下るものとみられるが、時期を特定し得ない。195は、7世紀代のものであるが、ここで説明する。VIE-9 sグリッドより出土した須恵器の杯蓋で、端部内面にかえりを有する。灰白の胎土で、外表面に暗緑色の降灰釉がかかる。



第48図 包含層出土須恵器・土師器実測図
(1:4)

B. 7世紀代

7世紀代の遺物は、竪穴式住居跡、土坑より出土した。殊にS B06出土品は須恵器と土師器壺とが一括して出土したもので、土器編年の際に基準資料となりうるものである。

第2号竪穴式住居跡（S B02）出土品

カマド跡とみられる焼土塊周辺より土師器壺がまともって出土した。このほかに細片ではあるが須恵器瓶類の口縁部片が1点出土。

土師器（第49図174・175） 破片数は多いが図示し得たのは174・175の2個体である。ともに肩の張らない長胴の体部に緩く外反する口縁部がつく形態の甕ではほぼ同形同大。ともに体部外面は縦位に近い左上りのハケ目調整、内面ナゲ調整（174はナゲ調整前のハケ調整痕が看取される）で、口縁部内外面をヨコナデして仕上げる。赤黄褐色で砂粒および赤色粒をふくむ胎土・色調もこれまた一致する。口径は20.8cm前後。

須恵器 細片であり図示し得ないが、瓶類（直口瓶？）の口縁部片が1点ある。

これらの年代については、判断としない。土師器壺の形態は上記S D01土師群（6世紀中葉）のものに較べ長胴であるが、後述のS B06出土例（7世紀中葉）よりも丸味をもち、口縁部内外面をヨコナデする手法はS D01土器群に近い。こうした点からみて、大まかに両者の間ということ（6世紀後葉～）7世紀前葉という編年上の位置づけを与えておきたい。

第5号竪穴式住居跡（S B05）出土品

上記S B02と同じようにカマド跡とみられる焼土塊の周辺より土師器壺片がまともって出土した。

土師器（第49図176） 体部の細片が殆んどで、調整手法の相違等より2～3個体存するものとみられるが、図示し得たのは176の1点にとどまる。176は、中胴の体部に緩く外反する口縁部がつく形態の甕で、上記S B02出土例と類似する。ただ本例の方が口縁部が一回り大きい。体部外面は、左上りのハケ目調整、内面も左上りのハケ目調整で、口縁部内外面をヨコナデして仕上げている。口径19.2cm。

この土師器壺の年代については、形態が上記S B02出土例と類似することから、これと同時期と考えられる。ただし口縁部が幾分大きく目である点は、後述のS B06等にもみられる要素であり、S B02よりも幾分後出のものと捉えるべきかも知れない。

第7号竪穴式住居跡（S B07）出土品

カマド跡とみられる焼土塊の周辺より土師器壺の破片が比較的まともって出土した。ほかに数点の須恵器の細片がある。

土師器（第49図177～179） いずれも甕である。177は、比較的肩の張った体部に外反ぎみに外傾する口縁部がつくものである。口径17.5cm。おそらく体部下半は179のような形状を呈するものと考えられる。体部外面は左上りのハケ目調整、内面は横位のハケ目調整で、口縁内外面をヨコナデして仕上

げているが、口縁内面には横位のハケ目調整痕が看取される。178は、緩く外反する口縁部片である。口径は19.0cm。外面は左上りのハケ目調整、内面は横位のハケ目調整で、口縁端部をヨコナデして仕上げている。このヨコナデにより口縁上端部が幾分上方へ突出する。砂粒まじりの胎土で、赤黄褐色を呈す。179は、平底に近い丸底の壺底部片である。体部外面は縦位近い左上りのハケ目調整、内面は横位を基調とするハケ目調整で、底内面は不定方向となっている。比較的硬質で、暗赤褐色を呈す。

須恵器 瓶頸とみられる細片が2点あるが、器形を復元し得ない。

これらの年代について考えてみる。177は、肩の張る壺とみられるもので、ほかに比較対照する例を欠き、編年の位置を求めにくい。178は、その調整手法の上で後述のS B06・S X01出土例と同様であるが、形態の上では上記S B05出土例(176)に近いものがある。したがって大まかに形態・調整手法上からS B05・S B06の中間に位置づけられる。これは、このS B06により切られていることと矛盾しない。

第6号竪穴式住居跡(S B06)出土品

東北隅近くより土師器壺3個体(以上)および須恵器杯蓋1個体がまとまって出土した。なお、このS B06は上記S B07を切っている。

土師器(第49図180~182) 壺が3個体(以上)出土した。180は、長胴壺で長胴の体部に緩く外傾する口縁部がつく。底は平丸底(底部と胴部との境が明瞭でない——稜を有さない——平底の意)となっている。外面は、体部から口縁部にかけて一連の縦位のハケ目調整。内面の調整は体部と口縁部とは異なり、体部内面が横ナデ調整(底内面は不定方向)で、口縁部内面は横位のハケ目調整である。口縁端部はヨコナデして仕上げられている。内面のハケ目の部分が外傾することから、口縁部内面のハケ目は口縁部を外傾させる目的を兼ねたものとみられる。なお体部外面のハケ目は底外面にはおよんでいない。砂粒混じりの胎土で赤褐色を呈す。黒斑が胴部外面、相対する位置関係で認められる。底より胴部中ほどにかけてススの付着がみられ、底部外面の一部が二次加熱により赤変している。口径19.0cm、器高31.0cm。181は、180に較べ幾分丸い体部の壺とみられるもので、調整手法はハケ目が密である点を除き180と同じである。口径20.4cmで、暗茶褐色を呈す。182は、肩の張りの弱い体部に僅かに外傾する口縁部がつくもので、壺というよりは鉢と呼称すべきかも知れない。口径16.4cm。調整手法は基本的な180・181と同じである。ハケ目は181と酷似。暗茶褐色を呈す。

須恵器(第49図183) 古墳時代特有の形式の杯蓋(90)が1点みられる。小型品で、緩い段により蓋頂部と口縁部とを分けている。口径10.2cm、器高3.2cm。頂部は回転ヘラケズリ調整。灰(白)色を呈す。

これらの土師器壺および須恵器杯蓋の年代については、須恵器杯蓋は、その形状からみて遺投簡編年の岩崎第17号竪穴式(陶邑編年 TK217型式)に比定されるもので、7世紀中葉(7世紀第3四半を中心とする時期)という年代観が与えられる。このS B06は、これまでの記述のなかでふれてきたように、S D01土器群以外で唯一年代比定をなし得る須恵器と土師器の壺とが伴出した遺構である。一例という点で問題もあろうが、ここでは本例を以て7世紀中葉の土師器壺代表例と考えておきたい。

SX01（竪穴式住居跡？）出土品

遺構の項で記したように、ここに示した土器群を遺構出土物としてよいか否かは問題があり、たんなる包含層中における土器の集積としておくべきかも知れない。須恵器と土師器が伴出するが、上記の理由で一括遺物とみなすには問題を有する。

土師器（第49図184～187） いずれも甕である。184～186は、同形同大のもので、長胴の体部に緩く外反する、口縁部がつくものである。体部より口縁外面にかけて縦位を基調とするハケ目調整、体部内面はナダ調整、口縁部内面は横位のハケ目調整で、口縁端部をヨコナデして仕上げている。185・186は、184に較べ口縁内面の横ハケ調整の及ぶ範囲が広い。口径は21.5cm前後。赤(黄)褐色を呈す。187は、形態的には上記のものと同様だが、体部との境がより不明瞭である。体部外面は縦位のハケ目調整、内面は横位のハケ目調整で、口縁部内外面はヨコナデして仕上げる。口径20.0cm。口縁部内外面にハケ目調整痕が看取され、184～186が口縁内面の横ハケの際に、口縁を外反させたものと解されるのに対し、本例はヨコナデにより口縁部を外反させているものと推察される。赤(黄)褐色を呈す。

須恵器（第49図188・189） 高杯および高台付杯身がある。188は浅い皿形の杯部にラッパ状に開く脚がつく高杯。杯部の下部に回転ヘラケズリ痕が看取されるほかは回転ナダ調整である。杯部の口縁端部は水平方向に幾分突出する。脚は無透しのもので、壺の端部は垂直な面をなす。口径15.2cm、器高11.4cmで灰白色を呈す。189は、口径11.5cm、器高4.0cmほどの小型の高台付杯身で、底部と口縁部との間に明瞭な境は認められない。杯部はあたかも肩の張った杯蓋の感がある。灰白色を呈し、器高の状況は188と類似する。

これら土師器および須恵器の年代については、須恵器が岩崎第17号窯式もしくは後出の岩崎41号窯式に比定される点からみて、SB06と同時期かそれより新しい時期を考えた。土師器の口縁部がSB06に較べ大きくなっている点からみれば、新しい時期を考えるべきかも知れない。ただし、これら遺物の一括性について問題が存することは、先に述べたとおりである。

第3節 平安時代（10世紀末）の遺物

第1・4号竪穴式住居跡（SB01・04）および掘立柱建物（SB13）の柱穴の1つであるSK03より平安時代（11世紀）の遺物の出土をみた。このほか、ごく少量ではあるが調査区のほぼ全域にわたって灰釉陶器の細片が出土している。

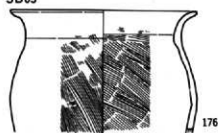
第1号竪穴式住居跡（SB01）出土品

灰釉陶器碗および土師器甕片の出土をみる、いずれも細片で図示し得ない。細片のため年代の特定には困難を伴うが、判別し得る限りでは下記SB04出土品と同種のものであり、同時期（遺構の切り合い関係では後出）のものともみなされる。

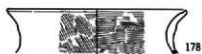
SB02



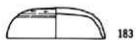
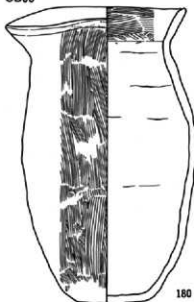
SB05



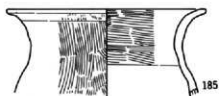
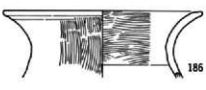
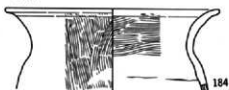
SB07



SB06



SX01



0 10 20cm

第49圖 SB02・SB05・SB07・SB06・SX01 出土土器実測圖(1:4)

第4号竪穴式住居跡（SB04）出土品

東南隅部の埋土中および床面上より灰釉陶器・土器器の破片が比較的多量に出土した。

灰釉陶器（第50図197～202） 碗・皿・瓶類がある。197は浅手の碗で、口縁部が水平方向に短く屈折する。口径20.6cm。灰（白）色を呈し、内面に降灰釉（発色の悪い施釉か？）が部分的に看取される。200・201は碗類の底部片とみられるもので、内面には底径と同大の重ね焼き痕が認められる。高台は底部と体部の境に貼付され、底外面は回転ヘラケズリ調整。灰色を呈す。198は皿で、水平方向に延びる口縁端部は幾分下方を向く。内面には重ね焼き痕が認められる。ただこの重ね焼き痕の径は底径よりも小さく、違う器種を重ねた公算が大である。口縁端部よりこの重ね焼き痕にかけて降灰釉？がかかる。底外面には糸切り痕が残る。高台は断面逆三角形である。器壁は灰色を呈すが、所々に黒色の「浮き出し」（黒ホクロ）が認められる。口径15.0cm、器高2.9cmをはかる。199は198に較べ幾分厚手の皿である。口縁端部は短く外反する。内面には底径と同大の重ね焼き痕の部位にかけて降灰釉？がかかる。高台は底部と体部の境に貼付される。底外面は回転ヨコナデ調整。灰色を呈す。口径15.1cm、器高3.2cm、202は小型の瓶類（小瓶）の底部片。体部外面の下端部は強いヨコナデにより凹み、外見上は高台状を呈する。底外面は回転糸切り痕が残る。灰白色を呈し、外面には灰釉がかかる。底径7.0cm。

土器器（第50図203～106） いずれも甕である。203と204は同一個体とみられるもので平丸底でやや肩が張り、底部がしぼられる体部に強く外反する口縁部が付く甕が想定される。203は体部外面ナデおよびオサエ調整、体部内面は横ナデ調整で、口縁部内外面をヨコナデで仕上げる。体部外面の凹凸が顕著である。203の底部とみられる204は胴部と底部とが明瞭な稜を軸さない平丸底で、内・外面とも調整は基本的には203と同じ。ただし底内面のナデ調整があまく、指圧痕とみられる凹凸を充分に消去されていない。砂粒を含むものの概して精良な胎土で硬質に焼き上がっている。明赤褐色～茶褐色を呈し、底部より口縁部にいたる外面にススの付着が認められる。205・206も204と同質の平丸底の底部片であるが、内外面にハケ目調整が看取される点で若干異なる。

これらの遺物の帰属年代については、土器器の編年研究が進んでいない現段階では灰釉陶器に依拠せざるを得ない。灰釉陶器の199・200・202は黒笹第90号窯式の特徴をもつが、198・201は折戸第53号窯式に比定されるものである。従って、ここでは帰属年代として折戸第53号窯式期はじめ、すなわち10世紀末を考慮しておきたい。

遺構外出土遺物

208はVIE-9 t グリッド出土の灰釉陶器碗である。焼成不良で一部生焼け状となっているが、口径13.0cm、器高4.4cmをはかる。底内面には底径と同大の重ね焼き痕が認められる。高台は体部と底部の境に貼付されている。このほか量的には少ないが調査区のほぼ全域にわたって灰釉陶器の細片が出土している。器種としては碗・皿・広口瓶・平瓶（把手付）がみられる。これらは総じて折戸第53号窯式に比定されるものであるが、平瓶など一部黒笹第90号窯式にさかのぼるものもある。また土器器では、SB04出土の甕と同型式のもののほかに、「清郷型甕」と称される口縁部を著しく肥厚させた甕も

1点出土している。

第4節 鎌倉時代（13世紀末）の遺物

鎌倉時代の遺物は量的には少なく、調査区中央から南部にかけて散見されるにとどまる。種類としては灰釉系陶器の碗（山茶碗）および中世土器の土鍋・皿がある。殊にSK01出土品は、従来不明であった渥美窯産の灰釉系陶器碗と土鍋の伴出関係を知る上で注目されるものである。

第1号土坑（SK01）出土品

灰釉系陶器の碗2個体と土鍋（「伊勢型鍋」）4個体が径1.0mほどの土坑内より一括して出土した（第19図）。

灰釉系陶器（第50図213） 碗（「山茶碗」）が2個体出土したが、うちの1個体は底部の小片で図示し得ない。213は口縁の一部をオサエて注口状にしている。体部は直線的で、口縁端部が僅かに外反する。高台は底外面に貼付され、端面には砂粒痕（？）がつく。底外面は丁寧にナデられている。口縁部 $\frac{1}{2}$ を欠失する。口径15.4cm・器高48cmをはかる。渥美窯産（もしくは湖西窯産……本来は一群の窯跡とみる見方が有力）と推定される。

土鍋（第50図209～212） 扁球形の体部に、垂直に短く立ち上がったのち大きく外反する口頸部がつくもので、口縁端部が折り返され肥厚するという特徴をもつ土鍋。4個体ある。これらは口径28.0cm前後の大型品（209、211、212）と24.0cm前後の小型品（210）とに分けられる。210は口径24.2cmの小型品で、器高は15.0cmほどである。体部外面は左上がりのハケ目調整のちヘラケズリ調整（底部）、内面はナデ調整のちヘラケズリ調整（底部）で、口頸部はヨコナデで仕上げられる。口縁端部の折り返し部はヨコナデを経て段差を充分に解消し得ていない。209は口径29.0cmの大型品で、器高は16cmを超えるものとみられる。口縁端部の調整方法等は基本的には上記210と同じであるが、折り返しが器体の大きさに較べ短い点および体部内面のヘラケズリ範囲が中位に及んでいる点で少し異なる。211も口径27.4cmの大型品で、器高は推定で18.8cmをはかる。器面の調整等は基本的には上記210・209と同じであるが、体部内面のナデ調整があまく接合痕を充分に消し去っていない。212は口径28.0cmの大型品で、器高16cmを超えるものとみられる。基本的な形状については上記のものと同じであるが、口縁端部の折り返し部が強くヨコナデされ上面が凹む点が特徴的である。調整についても基本的には同手法とみられるが、体部外面のハケ目調整部とヘラケズリ調整部との間に指頭圧痕が顕著なナデ調整の部位がある点で異なる。この指頭圧痕はあきらかにハケ目調整後、ヘラケズリ前に加えられたものである。これは、前記209～211よりも一工程多いものと解され、製作技法が異なる可能性があり注意を要する。胎土についてみると、砂粒をふくむものの概して精良で硬質な212と砂粒混じりで精良さを欠く209～211とに分けられる。先にみたように調整技法の相違とともに212の特異性が注目されるところである。なお、4個体とも外面は底から口縁にいたるまでススが付着している。また口頸部には穿孔は認められない。

これらの遺物の年代については、灰釉系陶器碗が13世紀前半代に比定されることから、土鍋も同時期に比定されよう。

第70号土坑（SK70）出土品

SK70は、掘立柱建物の柱穴の可能性をもつ土坑で、その底部より灰釉系陶器碗および中世土器皿が各1個体出土した。

灰釉系陶器（第50図214） 碗が1個体ある。底部は完存するものの体部および口縁部は%ほどが欠失している。厚手で幅広い底部に直線的に外傾する体部がつく形状のものである。口径15.4cm、器高4.8cmをはかる。貼付高台は低く端面には砂粒痕?が認められる。

中世土器（第50図215） 幅広い底部に外傾する体部がつく皿が1個体みられる。底内面はナゲ調整、口縁部内外面はココナゲ調整で、底外面不調整というものである。%ほどが遺存するにすぎない。口径13.0cm、器高3.2cmほどをはかる。胎土は精良で暗（茶）灰褐色を呈す。

これらの遺物の年代についてみると、灰釉系陶器碗は、上記の213とはほぼ同時期（13世紀前半代）のものである。ただ213と較べて体部がわずかではあるが、より直線的である点で新しい傾向を示す。皿については東三河地方における中世土器の編年研究が未開拓の分野となっている現在ではその編年の位置を検討し得ない。

第149号土坑（SK149）出土品

SK149は、前記SK70と同じ掘立柱建物の柱穴の可能性をもつ土坑で、その底部より口をふせた状態で灰釉系陶器碗が1個体出土した。

灰釉系陶器（第50図216） 碗が1個体ある。底部は略完存するが、口縁部の%ほどが欠失している。口径15.8cm、器高5.2cmをはかる。214に較べ幾分深手であるが、体部は直線的に外傾し、口縁端部は尖りぎみにおさめられている。底外面には回転糸切り痕が看取される。

年代については、深手である点は古い傾向ではあるが、全体の形状からして上記213・214とはほぼ同時期（13世紀前半代）に比定される。

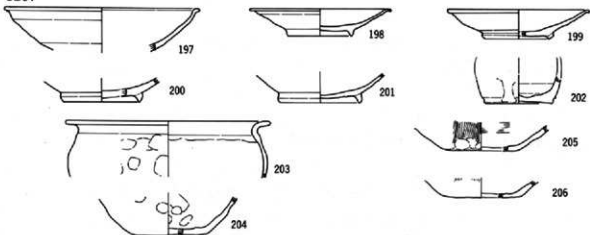
第5節 そのほかの遺物

1. 縄紋土器

鉢形土器1個体、甕形土器1片がある。いずれも検出の際もしくは試掘トレンチ内から出土したもので、遺構内の出土ではない。

甕形土器（第51図217） 試掘Cトレンチ出土。口頭部がゆるやかに外反する。口端部はしっかりと面取りされ、中央部が弱く凹む。器壁外面は太目の半載竹管を原体とする斜方向ないしは縦羽状条痕を施す。条痕は深く刻まれ力強いタッチである。内面は横方向の刷目調整を施す。内外面とも砂粒は沈めない。器壁は外面茶黄色、内面赤褐色を呈する。時期は水沖平式（麻生田IV期 甕F1類）に

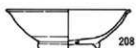
SB04



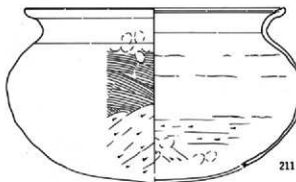
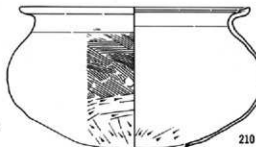
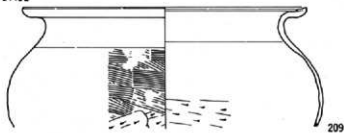
SK03



包倉層



SK01



SK70



SK149

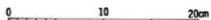
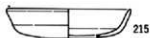
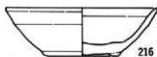
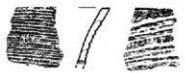


圖50 SB04・SK03・SK01・SK70・SK149 出土土器実測圖(1:4)

比定される。

鉢形土器 (第51図218) 調査区南端から検出の際出土したものである。体部が弱い“く”字形に内傾する鉢形土器である。口端は面取りされる。器壁外面は削りを施した後ミガキ調整を加える。内面は雑なナデ調整である。胎土は径0.5~1.5mmほどの砂粒を多く含む(特に雲母片が多い)、光沢を持つ。色調は黒褐色を呈する。時期は特定できないが、縄文時代晩期後葉前半期に比定される。口径:20.8cm、推定器高:9.0cm、底径:6.6cm。



217



第51図 縄文土器実測図(1:3)

森岡遺跡の所在する石巻地区には、白石遺跡、玉川変電所遺跡等、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期にかけての所謂条痕系土器を主体とする遺跡が多くみられる。当遺跡の土器もこれらと一連のものと考えられる。

2. 奈良時代の須恵器

奈良時代に比定される須恵器盤が1点みられる。

盤(第48図196) VIE-14 r グリッドより出土。低くて浅い杯部に高台が付くもので、口径14.2cm、器高2.5cm、高台径7.8cmをはかる。杯部の縁端を内傾ぎみに折り曲げたのちその端部をかすかに外方に曲げて上面が平坦な口縁部を形成している。

3. 石製品

石製品としては砥石が1点みられる。

砥石 VIE 7 b グリッドより出土、図示していないが、凝灰岩の転石を利用したもので、砥ぎ減りが著しい。長さ9.0cmほどのものであり、年代を特定し得ない。

4. 土製品

土製品としては、土製紡錘車および土玉が各1点みられる。

土製紡錘車(第52図219) VIE-15グリッドより出土。截頭円錐形を呈すが、仔細にみると側面は幾分丸味をもつ、上面の径7.8cm、下面の径3.8cm、厚さ2.4cm、重さ121.6gをはかる。砂粒混じりの胎で黄褐色~(黄)灰褐色を呈し、焼成は良好である。器面の一部にハケ目調整痕が残るが、概して平滑である。穿孔は焼成前に行なわれている。穿孔方向は不明。包含層中よりの出土であり、年代を特定し得ない。

土玉(第52図220) VIF 10 a グリッドより出土。手捏ねによるためか形はいびつである。径1.8cm、長さ1.3cm、重さ1.6gをはかる。胎土は砂粒が混じるものの概して精良で赤褐色を呈す。穿孔は焼成前に行なわれている。穿孔方向は不明。包含中よりの出土であり年代を特定し得ない。

5. ガラス製品

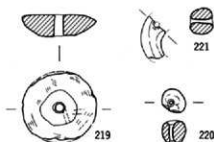
ガラス製勾玉が1点みられる。

ガラス製勾玉(第52図221) 頭部および尾部を欠く。遺存長1.0cm、腹部幅・厚さとも0.4cmである。

透明感の少ない濃紺色を呈す。気泡はその中央部が、穿孔部に向かって曲折している。

(註)

- (1) 現在、高塚式土器について、これを弥生時代中期末とする見解と後期のはじめに位置付ける見解とがある。ここでは前者の立場をとる。
- (2) 石器および後述の石製品の石質鑑定は当センター森秀一の肉眼観察による。
- (3) 以下、特にことわらないかぎり、土器・陶器類の編年観は第3章第2節の註②の文献に依拠する。



第52図 土製品・石製品・ガラス製品実測図
(219 1:4 220・221 1:1)

第6章 考 察

第1節 遺構の時期別変遷

既述のように今回の調査により検出された遺構は、大別して、

- (A) 弥生時代中～後期
- (B) 古墳時代後期（6～7世紀）
- (C) 平安時代（10世紀末）
- (D) 鎌倉時代（13世紀）

の4時期にまとめられる。ここではそれぞれの時期における遺構の配置・組み合わせを復元的に整理し、その性格等に検討を加えるとともに派生する若干の問題についてふれてみたい。

第53～57図は、主な遺構の時期別変遷を周辺地形図とともに示したものである。地形については現行の地形図（1/2500国土基本図）より等高線を抽出した。その際、なるべく往時の地形に近づけるため、地元の方々からの聞き取りをもとに、調査区北側の崖下にある畑部分を削除し、調査区西側の崖部分を幾分張り出させるという変更を加えている。遺構については竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・墳墓を主として取り上げ、土坑については特記されるもの以外は割愛した。また切り合い関係にある遺構のなかには一部を推定復元して示したものがある。このほか図の作成に係わる点として若干の付記をすれば、いうまでもなく古い時期の遺構は新しい時期のものに壊される公算が大であり、総じて古い時期の遺構数が本来よりも減っている可能性を有する点、および同時期の遺構として示したもののなかには伴出遺物が同型式であることを根拠とするものが多々あるが、周知のように一型式の時間幅を考えた場合、厳密な意味での同時存在でない点も図をみる際に考慮する必要がある。図の作成上の留意点等についての説明はこれくらいにとどめ、以下、遺構の時期別変遷をみていくことにしたい。

(A) 弥生時代中～後期（第53図）

土器編年の上からは高蔵式期（中期）と山中式期（後期）に分けられるが、合わせて図示した。高蔵式期の遺構としては竪穴式住居跡3棟（SB08・09・10）、溝1条（SD02）、方形周溝墓1基（SZ01）がある。崖近くSD02は環濠の残欠ではないかとも考えられるが確証はない。また方形周溝墓と竪穴式住居跡群が接近している点は、集落構成を考える上で興味深いものといえようか。なお両者の間を分ける遺構は認められない。

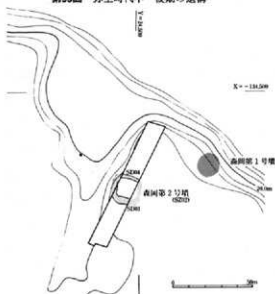
山中式期の遺構は竪穴式住居跡1棟（SB09）が検出されたにとどまり、その性格等については判然としない。ただ検出位置が高蔵式期の住居跡群中にあたることからして、集落が継続していた可能性が考えられよう。



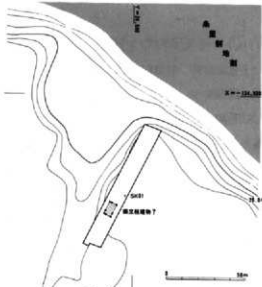
第53図 弥生時代中～後期の遺構



第56図 平安時代（11世紀）の遺構



第54図 古墳時代の遺構（6世紀）



第57図 鎌倉時代（13世紀）の遺構



第55図 古墳時代の遺構（7世紀）

(B) 古墳時代後期（6～7世紀）（第54図および第55図）

これまで古墳時代後期（6～7世紀）として一括してきたが、これまた遺構の性格の相違から6世紀代と7世紀代に分けられる。

6世紀代（第54図）

一辺13mほどの方墳である森岡第2号墳（SZ02）が造営される。主体部を欠き築造年代を明らかにし得ないが、周溝中の土器群が6世紀中葉に比定されることから6世紀中葉を下ることはない。本墳の北東50mの崖近くに存する森岡第1号墳をはじめとする森岡古墳群は、これと相前後する時期に形成されたものか。

7世紀代（第55図）

竪穴式住居跡が5棟以上（SB02、03、05～07、時期不詳のSB11、12およびSX01も形状からみてこの時期か？）みられ、ふたたび集落の形成をみた時期。上記森岡第2号墳の墳丘が存したためか、遺構は墳丘部をさけている感がある。

(C) 平安時代（10世紀末）

7世紀以降、11世紀に至る間については奈良時代の須恵器が僅か1片認められるにとどまり、この間の様相については定かにし得ない。

10世紀末の遺構として竪穴式住居跡2棟（SB01、04）および掘立柱建物（？）1棟があり、再度、集落の形成をみたことが窺われる。ここで注意しておきたいのは、建物として竪穴式住居跡が構築されている点である。現在のところ東三河地方における竪穴式住居跡の検出例としては最も新しい例の一つである。なお調査区の北側、現水田地帯にかけて存した条里制地割がいつの時期に形成されたかは判然としませんが、当該期の人々が眼下に望んだであろうことは想像に難くないところである。

(D) 鎌倉時代（13世紀）

遺構は土坑1基（SK01）および掘立柱建物（？）1棟と少ない。遺構の性格からして集落がこの時期営まれたものと考えられるが、包含層出土品も含め、遺物量が極端に少ないことからして、短期間ないし小規模な集落あるいは集落の縁辺であったものと推察される。なおここで注目しておきたいのは、SK01が上記の森岡第2号墳の墳丘部を穿っている点である。これよりみて少なくとも森岡第2号墳の破壊はこの時期にははじまっていたものと解されよう。

鎌倉時代を最後に遺構・遺物の上では、以後江戸時代末頃に至るまで人々の足跡は認められない。参考までに記せば、森岡遺跡の所在地をふくむとみられる旧「森岡新田」は、高20石余の新田として貞享年間以前（1684～1688）に開発され、安政5年（1858）の時点での家数は4、人数は18であったとのことである^{13）}。

第2節 出土土器に関する若干の考察

今回の調査で出土した遺物のうち、SD01土器群およびSB06出土の土器について、その性格および編年上の位置に関する若干の考察を加えることとする。

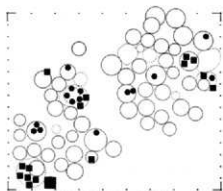
A. SD01土器群出土土器について

既述のように森岡第2号墳の南側周溝内において検出されたSD01土器群から総計で126個体を数える土師器・須恵器が、あたかも据え置かれたと解するに相応しい状況で出土した。これらは、従来、判然としなかった6世紀代中ごろの土師器の様相を知り得る資料であり、またその特異な出土状況が注目された。

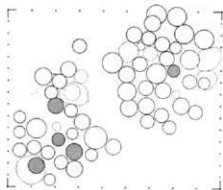
以下、ここでは、まず土器群の器種構成について検討を加え、そのうち編年上の位置を考えるとともに派生する若干の問題についてふれることとしたい。

器種構成

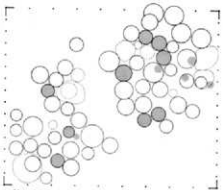
SD01土器群出土の須恵器・土師器の器種構成は第10表に示した通りである。この表からも明らかのように、甕に対して壺が異常に少ない点がまず指摘される。6世紀中ごろと云えば、須恵器生産が確立した時期であり、須恵器の壺類の伴出が予想されるところである。にもかかわらず出土をみないことは注目に値しよう。このことに関連するかもしれないこととして、数多い壺類の殆んどに明瞭なススの付着が認められないことを指摘し得る。あるいは器形は「甕」であるが、「壺」として用いられていた可能性を考慮しておく必要があるかもしれない。また、土器群の南半のA群と北半のB群とでは幾分その器種構成に差異が認められる。A群にあってB群に認められないものとしては、土師器の大型高杯・甕B・甕E・甕H・甕I・台付甕Bがあり、逆にB群にあってA群に認められないものとしては、瓶・甕J・甕K・台付甕A・壺Bがあげられる。さらに正確を期すため丸底の壺類について、明らかに基底に据え置かれたとみられるもの、すなわち原位置を動いていないことが確認されるものを整理して示したのが第10表の括弧内の数字である。これよりA群には甕A・B・C・D・E・Fが、B群には甕C・D・F・G・J・Kが存し、A群のみに存するものとして甕A・B・Eが、B群のみに存するものとして甕J・Kが指摘される。このほかB群における甕Bの多さが目立つ。須恵器について云えば、ともに杯蓋・杯身・有蓋高杯がみられるが、杯蓋を除き量的にはA群の方が多いこと、および両群とも杯蓋は杯身に比べ圧倒的に少なく、有蓋高杯の蓋が認められない点が器種構成上の特徴として指摘されよう。こうしたA・B両群の差異が生じた要因としては、時期を異にするため、同時期のもので据え置きの際に器種毎にまとめられたため、といったこと等が考えられる。つぎの須恵器・土師器の型式編年上の検討によればA群に古い様相をもつものが多くみられる傾向が看取されるが、積極的に時期を異にして形成されたものと見ることは出来ない。したがって、現状では後者の考え方が妥当な見方であろう。なお器種の違いによる配置・配列については規則性を見出すに至っていない。参考までに主要器種についてその配置状況を第58～61図に示す。



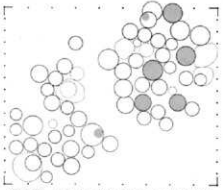
第58図 S D01土器群
●印 須恵器 ■印 土師器・高杯・碗・鉢



第59図 S D01土器群 (アイフセ: 甕A)



第60図 S D01土器群 (アイフセ: 甕C)



第61図 S D01土器群 (アイフセ: 台付甕)

第10表 S D01土器群 器種構成表

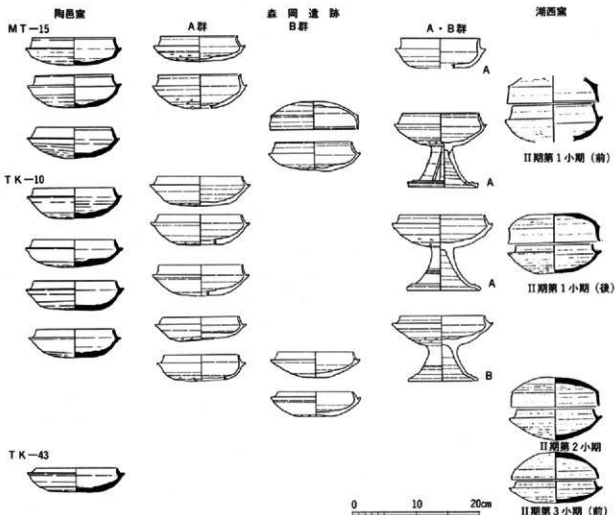
種類・器種		A 群	B 群	計	
須 恵 器	蓋 杯	1	1	2	
	杯 身	8	3	11	
	有蓋高杯	3	1	4	
土 師 器	高杯 大	1	0	1	
	高杯 小	5	1	6	
	碗	A	4	1	5
		B	1	1	2
	鉢	1	1	2	
	小型壺類	4	3	7	
	瓶	0	1	1	
	甕	1	1	2	
	甕	A	9(4)	1	10
		B	2(1)	0	2
		C	5(2)	10(6)	15
		D	2(1)	1(1)	3
		E	2(1)	0	2
		F	1(1)	2(1)	3
		G	1(1)	1(1)	2
H		1	0	1	
I		1	0	1	
J		0	3(2)	3	
その他	K	0	5(3)	5	
	底 部	1	2(1)	3	
台付甕	A	0	6	6(5)	
	B	1	0	1	
	台 部	1	0	1	
塙	A	3(1)	1	4	
	B	0	1(1)	1	
計		65	54	119	

() は原位置のままとみられるもの

編年の位置

須恵器 A・B群出土の主な須恵器を、第62図に陶邑窯・湖西窯編年とともにしめた²⁾。これより明らかなように形態・調整手法等からみて、杯蓋・身について云えばA群出土品は陶邑窯MT-15型式に比定され、B群出土品はMT-15型式からTK-10型式に比定される。有蓋高杯についてみると、A群出土品では脚を欠く66がMT-15型式に先行する様相を有するほか、66・67はそれぞれMT-15・TK-10型式に比定され、B群出土の126はTK-10型式に比定される。このように型式編年上ではB群の方が後出的であるが、積極的に両群が時期を異にすると云い得るものではない。したがって須恵器の型式で見ると、A・B両群、すなわちSD01土器群はTK-10型式、6世紀中葉の所産と考えられる。

なお、これら須恵器の産地については特定し得ない。少なくともB群出土の122・123に関する限り、薄手で垂下する口縁部の中程を外に緩く張りだし湾曲する点および口縁端部の段の造作など（第63図矢印）は、東山第61号窯出土品³⁾に共通するもので、距離的に至近であるが、厚手で垂下する口縁部が外反するなどの特徴を有する（峠場第1地点 第1号窯出土品）湖西窯産とは考えたいものである。



第62図 須恵器編年図

土師器 森岡遺跡の存する東三河地方における土師器の編年研究は立ち遅れており、土器の形態の地域差と年代差を明確に分別することが出来ない⁴¹⁾。現段階では、このSD01土器群の編年の位置を求めるためには、地域差と年代差を混同するおそれを少なくするためになるべく狭い範囲にある遺跡の出土品との比較・検討からはじめるべきであろう。しかしながら森岡遺跡周辺では6世紀代の調査例は少なく、ここでは幾分範囲を広くって愛知県東部の東三河地方から静岡県湖西市周辺を対象とし、検討を加えることとする。

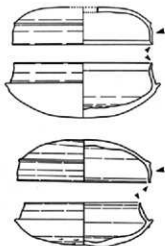
上記の須恵器の型式からみて、これら土師器はひとまずTK-10型式の時期、すなわち6世紀中葉ごろと見ることが出来る。

まずSD01土器群に先行するとみられるものからみていく。5世紀代後半から6世紀初頭に位置付けられる土器様式として「神明式土器」が、西三河の豊田市神明遺跡31・3・4・7・15号住居跡出土土器を標識として設定される⁴²⁾。神明式土器に相当するものとして、東三河地方では瀧美郡瀧美町青山貝塚A地点下層竪穴出土土器があげられているが、器種が少なくSD01土器群との比較を充分になし得ない。そこで地域がはなれるが豊田市神明遺跡出土品と比較すると、口縁部と底部の接合部に段あるいは沈線状の凹みを有する高杯および碗の一部に共通する要素が認められるものの、平底甕で丸底の甕が見られない点で大きく異なることを指摘し得る。この神明式土器に伴出する須恵器はTK-23型式に比定されるものである。

これにつづくものとしては豊橋市水神第2号窯出土品(第64図)がある⁴³⁾。TK-47型式(もう少し新しく位置付けるべきか)の須恵器を焼成した窯内からやや長胴の体部に外反する口縁部がつく丸底甕が1個体出土している。外面(ハケのち)ナデ調整、内面はナデ調整で、口縁部内外面をヨコナデして仕上げている。これはここで云うところの甕AでSD01土器群出土品と較べると体部が丸い。

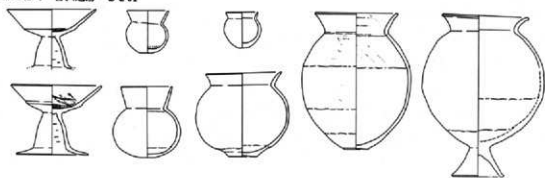
なお、神明式土器より古い様相をもつ土器として豊田市高橋遺跡第9次第14号住居跡出土土器⁴⁴⁾が位置づけられているが、これに併行するものとして東三河地方では飯飯郡一宮町宮沢遺跡SU01出土土器⁴⁵⁾(第64図)があげられる。甕についてみると平底甕と台付甕がある。平底甕はやや長胴で平底の体部に外反する口縁部がつくもの。台付甕は丸い体部に外反する口縁部がつくもので台は「ハ」の字状に開く。台付甕の口縁部～体部はほかの甕類と形態・造作の上では異なる。

SD01土器群に併行する時期のものは、周辺では調査例がない。敢えてあげるとすれば地域がはなれるが、静岡県浜松市伊場遺跡KD-14(竪穴式住居跡)出土品⁴⁶⁾(第64図)をあげ得る。ここで云う甕A・甕Cがみられ、MT-15～TK-10型式の須恵器が伴出するなど、その様相はこのSD01土器群と類似する。ただ、KD-14出土の甕は、その底部の造作に籠を用いていたことを示す「籠目」を看取され、そのためか底が平底風になるものがみられる。これに対してSD01土器群ではかかる底筋は認められない。おそらくは底部の作り方を異にしていたものと見られる⁴⁷⁾。

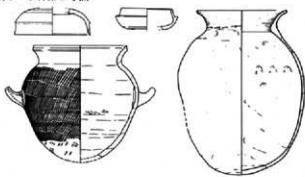


第63図 東山第61号窯出土品(上)と森岡遺跡出土品(下) 1:4
 出: 愛知県教育委員会「愛知県遺跡・古蹟調査報告(II)」1981

宝飯郡一宮町 宮沢遺跡 SU01

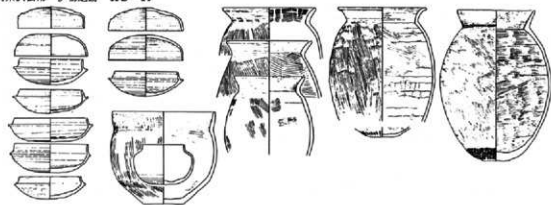


豊橋市 水神第2号窯

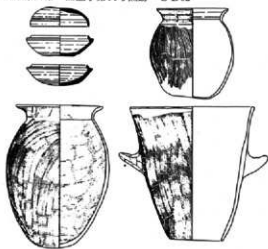


0 20cm

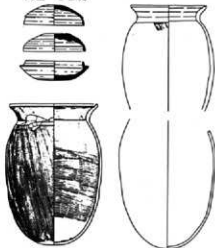
静岡県浜松市 伊場遺跡 KD-14



静岡県浜西市 西笠子第64号窯跡 SB02



岡左 SB03



第64図 宮沢遺跡・水神第2号窯・伊場遺跡・西笠子第64号窯跡出土品(1:8)

S D01土器群に後続するとみられるものとしては、静岡県湖西市西笠子第64号窯跡のS B02・S B03出土品¹¹⁾(第64図)があげられる。S B02から出土した須恵器は湖西窯編年Ⅱ期第3小期(TK-43)¹²⁾に比定されるもので、土師器の器種としては、ここで云う甕C・甗および幅広の底部を有する丸い体部に外上方に立ち上がったの外反する口縁部がつく平丸底の小型の甕(甕Cで捉えるべきか)がある。甕CはS D01土器群出土のものに較べ、体部がより長胴のものがある。湖西窯編年Ⅱ期第4小期(TK-43とTK-209の間)の須恵器が出土したS B03には甕Cが2個体と器種を特定し得ない甕の体部片がみられる。甕Cは上記S B02出土品よりもより長胴のもので、口縁端部が短く上方に揃み上げられている。

以上のように、比較資料は何れも器種が乏しく、断片的であるが、これをもとに検討の対象となった甕A・甕Cに台付甕を加え、伴出の須恵器の型式に基づいて単純化をおそれずに配列したものが第65図である。これよりすれば、次の3点を指摘し得る。すなわち、第1に、甕Aは古い時期からみられ、逆に甕Cは新しい時期に盛行する可能性があること、第2に、甕A・Cについては伴出須恵器の型式が新しくなるにつれて体部がより長胴化したものとなっており、甕A・Cはこの方向で型式変化を遂げた可能性があること、第3に、伴出須恵器の編年観を以て土師器の編年の位置付けを行なったわけであるが、土師器の変化をこのように見た場合、土師器相互の先後関係に特に疑義はなく整合的に理解できること、である。もとよりここでとりあげた遺跡の遺構出土品は何れも器種が少ないものであり、この当否を含め型式の設定・段階区分についてはいましばらく調査の進展・資料の蓄積を待つべきであろう。

なお、甕AはA群に多くみられ、甕CがB群に多く見られることから、須恵器の在り方を勘案し、A群が形成された後にB群が形成されたこととみることも不可能ではないが、伊場遺跡KD-14の在り方および甕Cが量的な多少があるものの両群にわたってみられることからして、ひとまずA・B群を一つの土器群と見ておく方が、出土状況(底のレベルが同じ、等)からみても妥当な見方と考える。

土器群の性格

このS D01土器群の性格については不明な点が多く、出土した位置等からみて「森岡第2号墳」に係わる公算が大であると推測し得るのみである。甕に対して壺が異常に少ないという器種構成、数多い壺類の殆どに明瞭なスの付着が認められない点等は性格解明のための手掛かりとなるかもしれないが、何分にもほかに比較対照資料がなく推測の域をでない。今後の調査例の蓄積を待ちたい。

B. S B06出土土器について

第6号壑穴式住居跡(S B06)より、7世紀中葉に比定される須恵器・土師器がまとまって出土したほか、幾分一括性を欠くきらいがあるが、S X01からもS B06に相前後する時期の須恵器・土師器の出土をみた。必ずしも良好な資料とは云えないが、これらは資料が乏しくかつ断片的であったため、従来、その様相が判然としなかった東三河地方の7世紀代の土器の一端を示すものとして注目されるものである。ここではS B06およびS X01出土土器について、数少ない周辺遺跡出土品との比較・検討を行ない、その編年の位置について考えることとしたい。

検討に先立ち、S B06・S X01出土土器の器種および須恵器の編年の位置について再度確認してお

宮沢遺跡SU01

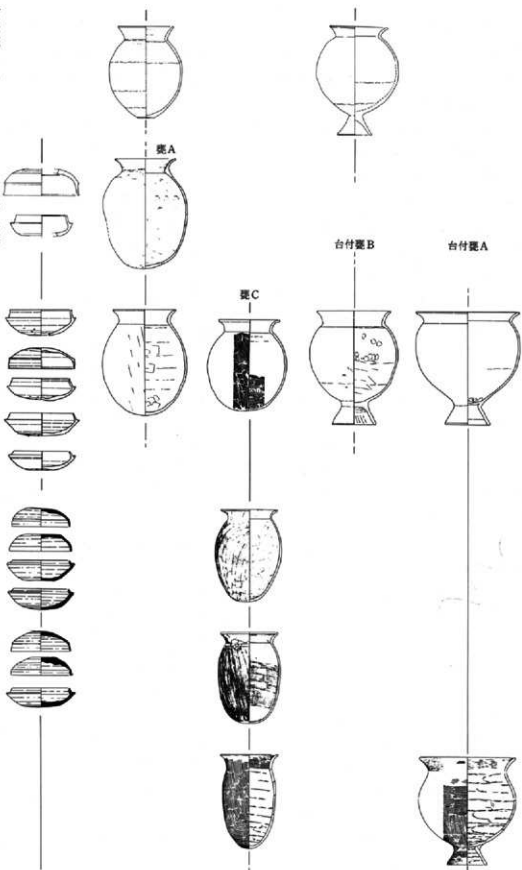
水神第2号窟

森岡遺跡SD01土器群

西笠子第64号窯跡SB02

西笠子第64号窯跡SB03

白山II遺跡SK01



第65図 森岡遺跡SD01土器と相前後する土器(1:12)

きたい。

S B06出土土器 器種としては土師器の甕3、須恵器の杯蓋1がある。杯蓋は猿投窯編年岩崎第17号窯式(=TK-217型式 湖西窯編年Ⅲ期第一小期)に比定され、7世紀中葉という年代観が与えられるものである。

S X01出土土器 器種としては土師器の甕4、須恵器の高台付杯身1、高杯1がある。須恵器はその形態からみてともに岩崎第17号窯式に相前後するものとみられる。ただ、既述のように厳密な意味で一括出土と言いきれないきらいがある。

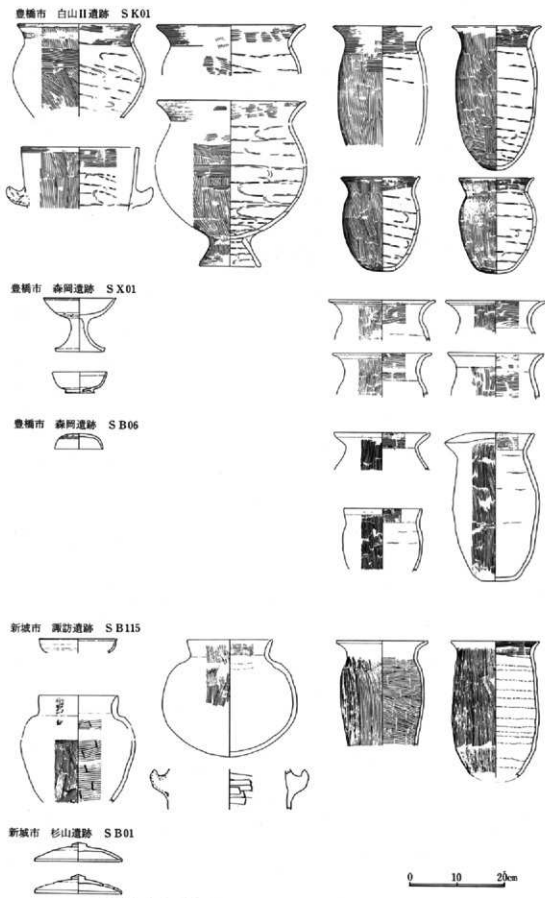
須恵器を見る限り両者はほぼ同時期と見做されるが、土師器甕についていえばS X01のものが大ぶりで、口縁部のつくりが大きいなど相違し、土師器については先後関係を考慮しておく必要がある。

周辺遺跡出土品との比較

これらに先行ないし時期を同じくするものとして、森岡遺跡北東1.0kmにある白山Ⅱ遺跡S K01出土品⁽¹³⁾(第66図)があげられる。径2.3m・深さ0.6mの土坑より出土したもので、甕2・小型甕2・台付甕1・甕1・台付甕とみられる口縁部片2の総計で8個体の土師器がある。甕は長胴の体部に、直立ないし外傾ぎみに立ち上がったのち外反する口縁部がつく丸底のもので、小型甕はやや長胴の体部に、外傾ぎみに立ち上がったのち端部が外反する口縁部がつく平底風の丸底甕である。台付甕は、既述のS D01土器群の分類の台付甕Aに相当するもので、S D01出土品に較べ肩の張りが弱く、体部最大径は中位にある。なお報告書では「体部と台部は別作り」とされるが、台部内側の接合部に粘土の補填が認められないことから「円盤充填法」による可能性を考えたい。甕はS X01出土品と、口縁部から体部上半部にかけては、形態・調整手法とも酷似する。またS B06との比較でいえば、甕の底部がS B06のほうがより平底風になっていること、小型の甕について言えば白山Ⅱ遺跡S K01出土品に較べS B06のものは体部が幾分長胴で、口縁部の外傾・外反の度合いが少ないことなどの相違点を指摘し得る。これらの相違はS K01がS B06に先行することを示唆しているものと解される。

つぎにこれらS B06・S X01に後出するものとしては、新城市の諏訪遺跡S B115出土品⁽¹⁴⁾(第66図)があげられる。須恵器は、底部より丸みをもって立ち上がったのち端部が短く外反する口縁部の杯身が1点みられるのみである。土師器の甕は4種みられる。細身で長胴の体部に直立気味に立ち上がったのち大きく外反する口縁部がつくもの、同じく細身で長胴の体部に外反する短い口縁部がつく平底風の丸底甕、幾分肩の張ったやや長胴の丸い体部に直立ぎみに立ち上がる口縁部がつくもの、丸い体部に外傾する口縁部がつくものの4種である。そのほかに把手付の端が1点みられる。須恵器の杯身からは編年の位置を特定し得ないが、この諏訪遺跡に近接する杉山遺跡S B01⁽¹⁵⁾から土師器甕らが、宝珠鈕の付く頂部から縁部にかけて単一の緩やかな曲線をなす円蓋部とやや丸みをもって垂下する短い口縁部からなる須恵器杯蓋(猿投窯編年 高蔵寺第2号窯式)と伴出しており、8世紀前葉という年代観がえられる。甕23はS X01出土の甕11・12に、甕24はS B06出土の18と形態が類似しており、須恵器の編年観を信じる限りでは11・12→23、18→24という具合に変遷したと見ることが出来る。その場合の変化は体部の長胴化・器壁の薄化として理解される。

以上、簡単ではあるが周辺遺跡出土品との比較・検討を試みた。資料数があまりにも少なく、断定



第66圖 白山口遺跡・森岡遺跡・諏訪遺跡・杉山遺跡出土品実測図（1：8）

的な結論を下すには心許ない。ここでは、下記の2点を指摘するにとどめたい。

- (1) SX01と白山II遺跡SK01との比較より、台付甕Aは7世紀なかごろまで存在することが予想されるに至ったこと⁽¹⁸⁾
- (2) 少なくとも7世紀中ごろから8世紀前葉の間に、いわゆる長胴甕に画期的な変化は認められないこと

なお、若干の付言をするならば、7世紀前葉の確実な資料を欠くため断定できないが、このSX01等にみられる長胴甕は、その形態の類似から6世紀後半代の甕Cに連なるものである可能性がある。また、諏訪遺跡SB115に後続する資料として、豊橋市公文遺跡SX01があげられるが、そこに見られる甕は、形態・調整手法とも大きく相違している。おそらくは8世紀中葉に甕の一大画期があったものとみられる。

一註一

- (1) 豊橋市史編集委員会 1975 『豊橋市史第2巻』豊橋市役所
- (2) 陶邑窯・瀬西窯両年は下記の文献による。
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
後藤健一 1987 「第3章第2節 遺物について」『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』静岡県湖西市教育委員会
同上 1990 「7. 埴輪を須恵器と併焼する古窯跡」『静岡の原像をさぐる』平成2年度埋蔵文化財発掘調査報告会
- (3) 斎藤孝正 1980 「東山第61号窯出土の須恵器」(名古屋大学総合研究資料館報告2)
- (4) 東三河地方における古墳時代後期の土師器の編年研究としては下記の文献がある。
久永春男・斎藤嘉彦 1969 「付載1 高橋遺跡出土の弥生式土器と土師器の編年」『高橋遺跡』豊田市教育委員会
小林久彦 1990 「須恵器出現以降の土師器の変遷」『三河考古』第3号
- (5) 加納俊介・都築みどり 1984 「IX 愛知県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- (6) 豊橋市教育委員会 1987 『水神古窯』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第7集)
- (7) 豊田市教育委員会 1979 『高橋遺跡第9次発掘調査概報』(豊田市郷土資料館報告17)
- (8) 一宮町教育委員会 1989 『愛知県宝飯郡一宮町 宮沢遺跡』(一級河川豊川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)
- (9) 浜松市教育委員会 1987 『伊橋遺跡 遺物編4』(伊橋遺跡発掘調査報告書 第6冊)
- (10) 管見の限りでは、三河地区でこの龍目が認められるものとしては、岡崎市神明遺跡SB13(TK-208型式前後)出土の甕があげられる。
新編岡崎市史編集委員会 1989 『新編岡崎市史 16 史料考古下』
- (11) 静岡県湖西市教育委員会 1987 『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』
- (12) 小林久彦は前掲註4のなかで、TK-10型式とみている。
- (13) 豊橋市教育委員会 1986 『石巻神郷地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第6集)
- (14) 00愛知県埋蔵文化財センター 1989 『諏訪遺跡 杉山端城跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第7集)
- (15) 00愛知県埋蔵文化財センター 1988 『杉山遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第5集)
- (16) 小林久彦は前掲註4のなかで、白山II遺跡SK01出土品を西笠子第64号窯跡SB03出土品と同時期(第VII段階 TK-43型式併行)とみている。見解の分かれるところである。

付、東三河地方における8～15世紀代の土器

—煮沸具（甕・土鍋）の変遷—

ここ数年来の発掘調査の増加にともない、東三河地方の奈良時代から室町時代（8～15世紀代）にかけての土器の様相が次第に明らかになりつつある。型式設定等については将来に委ねることとし、ここではこれまでの知見をもとに大まかではあるが、8～15世紀代の土器について煮沸具（甕・土鍋）を中心にその変遷過程を、一括遺物を羅列するかたちで整理・概観してみたい¹¹⁷。

奈良～室町時代（8世紀から15世紀）にかけての長期間のあいだに、8世紀中葉、11世紀末、15世紀（中葉？）の三つの画期が認められる。

8世紀前葉（～高藏寺第2号窯式）

諏訪遺跡（新城市豊栄）SB115出土品¹¹⁸があげられる。須恵器は杯身片で時期を特定し得ないが、近在の杉山遺跡（同市杉山）SB01¹¹⁹から高藏寺第2号窯式に比定される杯蓋とともに甕が出土しておりこの時期と考える。伴出の甕は四種みられる。細身で長胴の体部に、直立ぎみに立ち上がったのち外反する口縁部がつく甕、細身で長胴の体部に、外反する口縁部がつく甕、球形の体部に外反する口縁部がつくものおよびやや肩の張った丸い体部に直立ぎみに立ち上がる口縁部がつくものの四種である。このほか把手の破片がみられる。甕類はいずれも体部外面に縦位のヘケ（Ⅰ・Ⅱ）調整が施される。甕₁・甕₂は7世紀代から継統する器種である。

8世紀中葉～11世紀代（鳴海第32号窯式～折戸第53号窯式）

やや長胴の半球形の体部につよく外反する口縁部がつくもので、内外面に丁寧なナデ（板ナデ）調整が施され平滑な器面の丸底の甕が、おそくとも鳴海第32号窯式期（8世紀中葉）には出現し、以後、型式変化を遂げつつ折戸第53号窯式期末（11世紀末）に至るまで主要器種として存続する。

形態および伴出遺物からみて、甕₃は下記の順で変遷したものと見られる。

公文遺跡 SX01出土品 鳴海第32号窯式期



諏訪遺跡 SB026出土器 折戸第10号窯式期



諏訪遺跡 SB109出土品 井ヶ谷第78号窯式期



諏訪遺跡 SB301出土品 黒笹第14号窯式期



（真宮遺跡 R12号住居跡出土品 黒笹第90号窯式期）



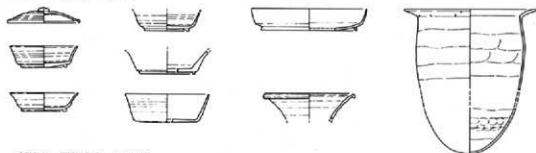
西浦遺跡 SB01出土品 折戸第53号窯式

郷中遺跡 SK26出土品 東山第72号窯式

—折戸第53号窯式

つぎに、口縁部の形状に着目して大雑把ではあるが、その変遷についてみる。

豊橋市 公文遺跡 SX01



新城市 諏訪遺跡 SB026



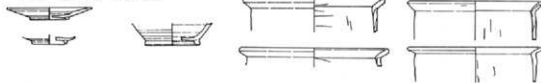
新城市 諏訪遺跡 SB109



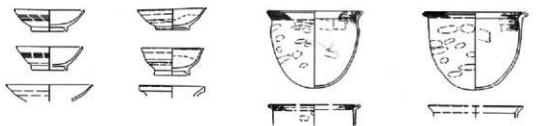
新城市 諏訪遺跡 SB301



岡崎市 真宮遺跡 R13住居跡



宝飯郡一宮町 西浦遺跡 SB01



豊川市 豊中遺跡 SK26

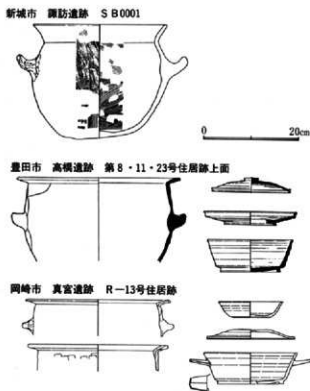


0 20cm

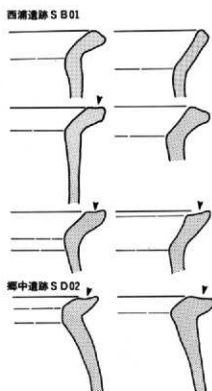
第67図 公文遺跡・諏訪遺跡・真宮遺跡・西浦遺跡・郷中遺跡出土品 (1:8)

鳴海第32号窯式期の公文遺跡S X01出土品²⁷⁰は、管見の限り最古の甕³で、口縁部は外反ぎみに大きく開き、端部は丸くおさまられている。つづく折戸第10号窯式期の諏訪遺跡S B026出土品²⁷¹では、前代に較べ口縁部は短く、外反ぎみではあるが水平方向に開くものとなっている。なかには外反の度が強く端部が下方を向くものもみられる。井ヶ谷第78号窯式期の諏訪遺跡S B109出土品²⁷²では口縁部はより短く、水平方向に直線的に開くものとなっているが、前代のものとの区別が難しいものも多々見られる。ついで黒笹第14号窯式期の諏訪遺跡S B301出土品²⁷³では、口縁部はより短く厚手で、斜め上方へ直線的に開くものとなっている。端部はまだ丸い。つづく黒笹第90号窯式期の資料はいまのところ東三河地方ではみられないので、地域が幾分離れるが西三河の真宮遺跡R12住居跡出土品²⁷⁴に代替させる。口縁部は前代のものに類似するが、より斜め上方方向を開く（外傾）傾向にあって、口縁端面が面をもつ点で異なる。折戸第53号窯式期の西浦遺跡S B01出土品²⁷⁵の口縁部の形状は様々で、a、前代同様に外傾するもの、b、肥厚し端面が幅広いもの、c、口縁端部の上端を水平にナデて平坦面をつくるもの、d、口縁端面を上方に向けるもの等がある（第68図）。つづく東山第72号窯式期の郷中遺跡S K26出土品²⁷⁶では、外傾する短い口縁部は分厚く、上方を向く端面は強いナデにより凹み外端は断面三角形形状を呈する。おそらくは前代のc、dの発達形態とみられる。なお、このS K26出土品は、「清郷型」と呼ばれるものに相当するものである²⁷⁷。

以上、甕³についてみた。もとより煮沸具は、量的には少ないもののほかにもある。第68図に把手付の埴Bを示したが、把手が存する以外は甕³そのものであり、埴Bも甕³と同様な変遷を辿ったであろう



第68図 諏訪遺跡・高橋遺跡・真宮遺跡出土品 (1:8)



第69図 甕の口縁部 (1:8)

ことが予測される。

12世紀～15世紀（中葉？）

土鍋A（伊勢型鍋）は、偏球形の体部に、直立ぎみに立ち上がったのち大きく外反し端部を折り返す口縁部がつくもので、窯業史における中世的表象とされる灰釉系陶器碗類（山茶碗窯）と同時期に出現し、15世紀前葉に至るまで煮沸具の中心となることが、愛知県西部（尾張）の調査により知られている⁽⁹⁸⁾。東三河地方においても発掘調査がすすむにつれて、ほぼ軌を一にして土鍋Aが盛行することが明らかになりつつある。

形態・調整手法および伴出遺物からみて、土鍋Aは下記の順で変遷したものと見られる。

12世紀	宮沢遺跡	S K154出土品
	郷中遺跡	S D02出土品
		↓
13世紀前半	森岡遺跡	S K01出土品
		↓
14世紀	杉山遺跡	S K1368下層出土品
		↓
15世紀（中葉？）	杉山遺跡	S K1263出土品

以下、遺構毎に取り上げ、年代順に見ていく。

宮沢遺跡 S K154出土品（12世紀中葉）⁽⁹⁹⁾

口縁部片が2点みられる。ともに端部を内側に折り返すもので、折り返し面は短かく平坦で、水平である。なお、伴出の中世土器皿は口縁部成・整形によるもので、底外面に回転糸切り痕を残すものがみられる。

郷中遺跡 S D02出土品（12世紀中葉）⁽¹⁰⁰⁾

1点みられる。端部を内側に短く折り返すもので、丸みを有する折り返し面は内傾する。体部外面ナデ・オサ=調整、内面ナデ調整で、口縁部内外面をヨコナデして仕上げている。

森岡遺跡 S K01出土品（13世紀前半）

4点みられる。口縁部の折り返し面はヨコナデにより幾分凹む傾向にある。体部外面は左上がりを中心とするハケ調整ののち下半部をヘラ削り調整、内面はナデ調整のち底内面をヘラ削りしている。口縁部内外面はヨコナデ調整。4点のうち1点は胎土を含め異質で、体部外面はオサ=調整による凹凸が顕著で、折り返し面は内湾傾向にある。

杉山遺跡 S K1368下層出土品（14世紀代）⁽¹⁰¹⁾

1点みられる。伴出遺物はないが、その形状が尾張部の14世紀代にみられるものに酷似する。森岡遺跡S K01に形状・調整手法とも類似するが、胎土は精良で薄手、口縁部の折り返しは薄く頸部とのあいだの段差はほとんどみられない点で異なる。

杉山遺跡 S K1263出土品（15世紀代）⁽¹⁰²⁾

土鍋Aは1点で、土鍋C（内耳鍋）が3点伴出⁽⁹⁸⁾。土鍋Aはより薄手・精良な胎土で、口縁端部の折り返しは短く、折り返し後の強いヨコナデにより端部は内湾傾向にある。調整手法は前代のものと

同じであるが、体部外面のハケは荒い。

土鍋Aはこのような形で変化を遂げたものと解される。なお、杉山遺跡1263については、土鍋Cの盛行段階に含めるべきかもしれない。また、尾張では13世紀後半ごろより、羽釜形の土釜Aが主要器種として加わるが、東三河地方では現在のところ良好な資料を欠き判然としない。ただ、時期幅をもつ溝埋土・包含層中などより出土は確認されており、詳細については今後の調査の進展を待ちたい。

15世紀後半

球形の体部に外反する口縁部がつくもので、口縁部内面に一對の耳が付く土鍋C（内耳鍋）および茶釜型の土釜Bが出現し、以後しばらくの間、この土鍋（内耳鍋）が煮沸具の主力となる。

この時期の資料としては、麻生田大橋遺跡SK548あげられる⁹⁰。伴出の中世陶器は後期古瀬戸様式の灰釉盤等のほか、常滑窯V期前半の壺等がみられ15世紀後半に位置付けられるものである。煮沸具には土鍋Cおよび茶釜形の土釜Bがみられる。なお土鍋C（内耳鍋）そのものは上記杉山遺跡SK1263において土鍋Aと伴出しており、土鍋Cが煮沸具の主要器種として土鍋Aに取って代る時期はさらに遡る公算が大である。また、そのほかの器種の出現・伴出関係については現段階では資料を欠く⁹¹。

以上、極めて大雑把ではあるが東三河地方の8世紀～15世紀代にかけての土器について煮沸具を中心に整理・概観してきた。これを「変遷図」というかたちにまとめたのが第71図である。

(注)

97 ここで用いる編年・年代観については下記の文献による。

植崎彰一 1983 「付、猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(III)』愛知県教育委員会

赤羽一郎 1984 『常滑焼—中世窯の様相』(考古学ライブラリー23)ニューサイエンス社

藤澤良祐 1984 「“古瀬戸”概説」(『美濃陶磁歴史館報』III)

斎藤孝正ほか 1986 『愛知県古窯跡群分布調査報告(V)』愛知県教育委員会

98 前掲註90に同じ

99 前掲註90に同じ

90 豊橋市教育委員会 1988 『公文遺跡(Ⅰ)』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第8集)

91 前掲註90に同じ

92 前掲註90に同じ

93 前掲註90に同じ

94 新編岡崎市史編集委員会 1989 『新編岡崎市史 16 史料考古下』

95 宝飯郡一宮町教育委員会 1987 「一宮東部地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」

96 豊川市教育委員会 1989 「郷中・雨谷」(豊川東部地区県営は場整備事業に伴う郷中遺跡・雨谷遺跡発掘調査報告書)

97 岩野見司ほか 1974 『新編一宮市史 資料編四』 32頁

なお、この「清濁型」壺といった場合、必ずしもその型式(形式?)設定が明確ではない。野末浩之は宝飯郡一宮町西瀬遺跡S B01出土品をもふくめている。ここで「清濁型」壺という呼称を敢えて取りあげなかったのは、壺の発達形態として採り得る公算が大との私見に基づく。

野末浩之 1988 「愛知県内における11～13世紀の煮沸形態」(『愛知県陶磁資料館研究紀要』7)

98 創愛知県埋蔵文化財センター 1987 『土田遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第2集)

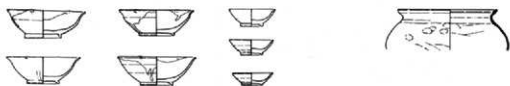
99 前掲註98に同じ

90 前掲註99に同じ

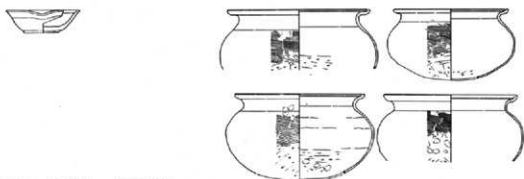
宝飯郡一宮町 宮沢遺跡 SK154



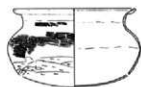
豊川市 郷中遺跡 SD02



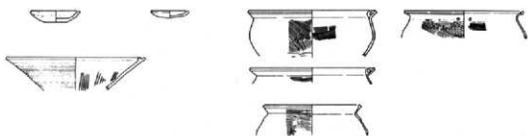
豊橋市 森岡遺跡 SK01



新城市 杉山遺跡 SK1368下層



新城市 杉山遺跡 SK1263

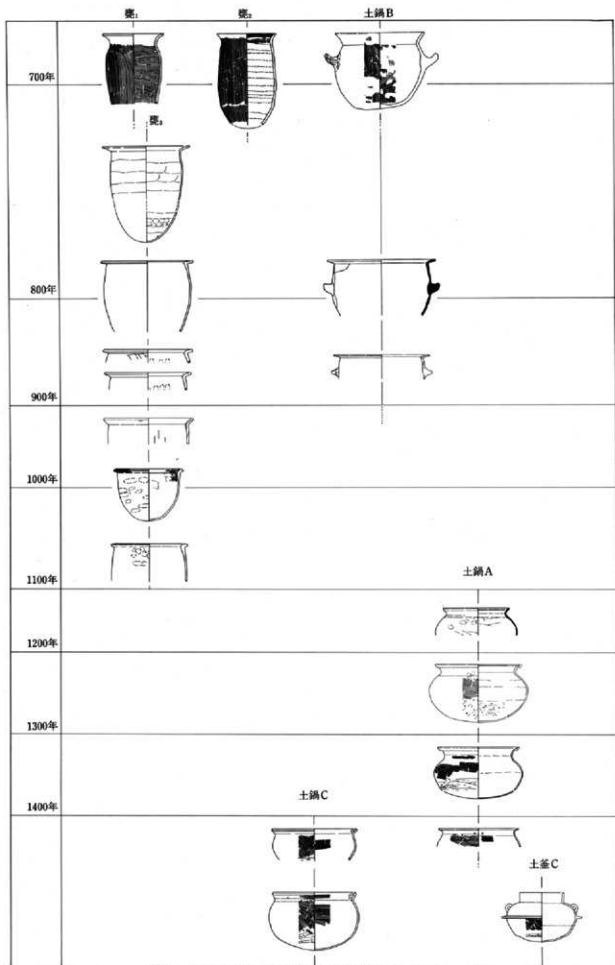


豊川市麻生田 大橋遺跡 SK548



0 20cm

第70図 宮沢遺跡・郷中遺跡・森岡遺跡・
杉山遺跡・麻生田大橋遺跡出土品 (1:8)



第71図 8～15世紀代の土器実測図（煮沸具を中心とした）（1：12）

- 03 土鍋A・C、土釜B等の器種分類は前掲註05に基づく。
- 04 愛知県埋蔵文化財センター 1991 「麻生田大幡遺跡」(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第21集)
- 05 なお、江戸時代に遺存の土鍋D(半球形で体部と口縁部との境を有しない内耳鍋)および土鍋E(皿形の内耳鍋、いわゆるホウロク)の東三河地方における出現時期については資料を欠き判然としない。

第3節 豊川流域における竪穴住居に関する一考察

本稿は森岡遺跡で検出された竪穴住居の位置付けを行う為に、東三河地域なかでも豊川流域に所在する遺跡において発掘調査で確認された竪穴住居を時代別に検討し、各時代の特徴・住居跡の変遷を明らかにする事を目的とする。

1. 分析項目

森岡遺跡を含め豊川流域において発掘調査で検出され、土器型式により時代が特定しうる竪穴住居は15遺跡163軒である。各遺跡名、所在地等は別記の第72図に譲ることとし、比較の為の具体的項目の設定を述べる。基本的には報告書記載の表現、計測値を使用するが、遺構の規模・南北軸の方位・床面積に関しては基準の統一を図るため報告書掲載図面をもとに再計測した。

時期 検出遺構の時期は以下の6区分とする。検出された遺構の内、その存続時期が二時期におよぶ住居については、古段階の形態に規定されながら新段階の形態的要素を取り込んでいると考えることができる。従って今回は該当住居は古段階の資料として扱うものとする。

- I. 弥生時代中期：長床（高藏）期
- II. 弥生時代後期：寄道（山中）、欠山期
- III. 古墳時代前期：元屋敷期
- IV. 古墳時代後期：6世紀代、7世紀代
- V. 奈良時代：8世紀、8世紀末から9世紀初
- VI. 平安時代：9世紀、11世紀

規模 遺構の上端から上端までを一辺の長さとする。計測値は少数点第2位を四捨五入し、南北辺×東西辺の順で表記する。単位はm。カッコ付きの数字は遺構の残存値を示す。平面形については、南北辺・東西辺ともに長さが確定し得た住居については（南北辺）÷（東西辺）=0.9~1.1の範囲を方形住居、それ以外を長方形住居とした⁽¹⁾。またいずれか一辺が残存値の場合の平面形は報告書記載に依った。

掘形比高 検出面からの遺構の深さを表す。但し、一律の計測値ではなく報告書記載の数値である。
床面積 （南北辺）×（東西辺）=床面積とする。したがって全ての住居が若干広く計測されている。またカッコ付きの数値は遺構の残存面積を表す。

方位 南辺の垂直二等分線と真北でつくられる角度を表記。南辺が残存不良の場合は北辺の垂直二等分線を使用した。また報告書記載方位が磁北の場合は、真北とのN-6°-Eの差⁽²⁾を考慮して真北に変更した。

周溝 報告書に記載されている場合は「あり（位置）」、記載が無い場合は「不明」と表記。

炉・カマド跡 報告書に記載されている場合は「あり（位置）」、記載が無い場合は「不明」と表記。

その他 主に柱穴、貯蔵穴について表記。例えば4主柱穴とは柱穴が4本ということである。

2. 具体的分析

先に述べた比較項目にしたがって、以下時代別に住居跡の特徴をみてゆく。但し、比較項目の内、面積・平面形に関しては正確を期す為に南北辺・東西辺共に長さを確定しえた住居（以下面積確定住居と表現）に限定した。

I. 弥生時代中期

分析対象遺構は3遺跡17住居、うち面積確定住居は11棟。最大住居は「橋良」13号住居の54.0㎡、最小住居は「橋良」10号住居の16.8㎡、平均値は28.2㎡である。11棟のうち20～30㎡の範囲に含まれる住居が4棟（37%）と最も多い。そして40～50㎡の範囲の住居が1棟、都合4住居となり、今回の分析対象の住居跡の中では大型の範囲に含まれる住居が検出されている。平面形に関しては、長方形（隅丸長方形を含む）住居が10棟（90%）とその大半を占めている。これ以外は方形（隅丸方形を含む）住居が1棟確認されたのみで、円形住居等は検出されていない。弥生前期の住居跡が検出されていないため形態の変化を追うことはできないが、少なくともこの時期は長方形住居が主流であると考えることができる。

方位は一方に集中することなく、計測可能な15棟のうち南北軸を西へ振る住居が6棟（40%）、東へ振る住居が7棟（47%）と平均している。ここでは面積が40㎡以上の住居がN-30°-E付近に集まっている点、南北軸を東へ振る住居は全て豊川左岸に位置する橋良遺跡で検出された住居跡である点を指摘することができる。

炉・カマドの施設については、17棟のうち7棟で炉跡（明確な遺構ではなく焼土塊である場合が多い）が検出されており、カマドはこの時期の住居からは検出されていない。さらに周溝、柱穴については周溝が確認された住居が15棟（88%）であることから、この時期の大半の住居跡には構造上周溝が備わっていたと考えることができる。柱穴については確認された住居跡の全てが4主柱穴となっている。

II. 弥生時代後期

寄道期 検出遺構は4遺跡20住居、うち面積確定住居は7棟。最大住居は「諏訪」S B101で42.9㎡、最小住居は「南貝津」S B03の20.2㎡、平均値は29.6㎡である。この7棟のうち20～30㎡の住居が5軒と全体の70%を占める様になる。しかし弥生中期にみられた40㎡以上の住居は1棟（14%）と減少している。方位は計測可能17棟のうち南北軸を西に振る住居が12棟（71%）、東へ振るもの5棟（29%）となり、大半の住居が西へ振る様になる。平面形は弥生中期の長方形中心から方形住居4棟（57%）、長方形住居2棟（29%）となり、比率的には逆転している。あわせて円形住居の可能性を持つ遺構（「郷中」S B02）も検出されている。炉・カマドの施設については炉跡が9棟で確認されており、カマドは未だ検出されていない。周溝に関しては7棟で確認されており、変化は見られない。柱穴は4主柱穴が「郷中」S B15で、5主柱穴が「諏訪」S B102で確認されている。

欠山期 4遺跡14住居が検出されており、うち面積確定住居は7棟。最大住居は「石堂野」S B02の48.3㎡、最小住居は「南貝津」S B11の6.8㎡、平均値は28.4㎡である。面積の分布は20～30㎡の住居が3軒（43%）で最も多いがその他の範囲にも全体的に分布している。しかし寄道期同様40㎡以上の住



遺跡名	文中表記	所在地	立地	検出位置							発見時代	平安時代	不詳	その他		
				赤土中層 (瓦葺)	赤土表層 (瓦葺)	赤土表層 (瓦葺)	土溝層 (瓦葺)	赤土中層 (15C)	赤土中層 (16C)	赤土中層 (17C)						
1	南貝塚遺跡	「南貝塚」	新城市	豊川右岸上位段丘	4	5	6									
2	杉山遺跡	「杉山」	新城市	豊川右岸中段段丘							1					
3	諏訪遺跡	「諏訪」	新城市	豊川右岸中段段丘	4	5					41	1				赤土 1
4	宮代遺跡	「宮代」	宝敷郡一宮町	豊川右岸沖段地			10				1					
5	西馬遺跡	「西馬」	宝敷郡一宮町	豊川右岸沖段地									2			
6	誕生田大塚遺跡	「誕生田」	豊川市	豊川右岸段丘縁辺							3					
7	堀中遺跡	「堀中」	豊川市	豊川右岸沖段地	2	10	2	1			2		1			
8	石空野遺跡	「石空野」	宝敷郡海津町	豊川右岸段丘			2				1	8		1		
9	森川遺跡	「森川」	豊橋市	豊川左岸中段段丘	1	2					5		2			
10	多丁遺跡	「多丁」	豊橋市	豊川左岸中段段丘							1					1
11	青木1遺跡	「青木1」	豊橋市	豊川左岸中段段丘							2					
12	西尾敷1遺跡	「西尾敷1」	豊橋市	豊川左岸中段段丘						2						
13	公文遺跡	「公文」	豊橋市	豊川左岸低位段丘									1			赤土(中) 1
14	見了塚遺跡	「見了塚」	豊橋市	豊川左岸低位段丘						5	3					赤土(中) 4
15	磯良遺跡	「磯良」	豊橋市	豊川左岸低位段丘	14											
					17	20	14	15		7	18	51	6	9	6	

第72図 遺跡位置図及び遺跡別検出住居数一覧

居は1棟(14%)と存在するものの比率的には低い。方位は南北軸を西に振る住居が9棟(75%)、東に振る住居が3棟(25%)とこの時期も南北軸を西に振る住居が中心となっている。平面形は「南貝津」S B11が不整形ながら円形を示し、その他は方形住居5棟(71%)、長方形住居が1棟(14%)で方形住居中心の傾向が継続している。周溝、炉、カマドに関しても変化は見られず、周溝は6棟で、炉跡は5棟で確認されているがカマドは検出されていない。柱穴は4主柱穴の住居が3棟確認されている。また貯蔵穴が南貝津遺跡の2住居(S B04、09)で確認されている。

上記のことからこの弥生時代後期に属する2時期の住居は同じ特徴を有しており、住居における時期差はみとめられない。面積的には20~30㎡の範囲の住居が7棟(57%)を占め、40㎡以上の住居は2棟(14%)と存続するものの、弥生時代中期に比して減少傾向にある。方位面では南北軸を西へ振る住居が21棟(72%)とその大半を占める様になる。なかでもN-0°-30°-Wの範囲に14棟と方位測定可能住居29棟の半数に近い住居が属している。尚、ここで扱った住居が全て豊川右岸に位置する住居であり、左岸の資料が含まれておらず単純に比較する事はできないが、弥生時代中期には見られなかった南北軸を東に振る住居が豊川右岸で検出されていることは注目される。平面形は前段階の長方形中心から方形中心へと変化している。また不確定ながら円形住居も検出されている。周溝、炉跡の存在も弥生中期に引き続き確認され、カマドの存在は確認されていない。柱穴は4主柱穴が主流であり、5主柱穴の住居も確認されている。以上の点から弥生時代中期から後期にかけては面積が縮小傾向にあるものの、構造上の変化は見られない。

III. 古墳時代前期

3遺跡14住居が検出されており、うち面積確定住居は10棟。最大住居は「宮沢」S B10の30.3㎡、最小住居は「南貝津」S B20の7.0㎡、平均は16.2㎡。面積の分布は30㎡以下の住居が9棟(90%)を占め、この9棟のうち弥生時代にはみられなかった20㎡以下の住居が6棟検出されている。さらに40㎡以上の住居は検出されておらず、弥生時代の住居と比較して規模が縮小する傾向にあることが理解できる。方位はこの時代も南北軸を西に振る住居が12棟(86%)と大半を占める。しかし主たる方向性は認められず、全般にわたって分布している。あわせて弥生時代後期に豊川右岸で確認された南北軸を東に振る住居がこの時期にも2棟(14%)と少数ながら確認されている。平面形は不整形住居が1棟(「南貝津」S B20)検出されている以外は全て方形住居であり、弥生後期にみられた方形住居への移行が一段と進んでいる事が伺える。柱穴も4主柱穴が4棟検出されており、この点は弥生時代から変化は見られない。

これに対し、炉跡・カマドと周溝については大きく変化している可能性が考えられる。まず該当14住居のうち周溝が確認されている住居は1棟も存せず、この事は遺構の遺存状況に左右されることではあるが、住居の構造に何らかの変化が起きていると考える事ができる。また炉・カマドについても、焼土面や被熱面が5棟で確認されているが、いずれの報告書もどちらの施設であるかについては論及しておらず、周溝の消滅という構造上の変化と併せて考えると、この段階で炉からカマドへ移行してゆくことも想定しうるのではないであろうか。

IV. 古墳時代後期

6世紀代 2遺跡7住居が検出されているが面積を確定しうる住居は「見丁塚」S B02(31.9㎡)1棟

である為、面積の比較、分布は不明。方位については南北軸を西へ振る住居は確認されておらず、測定可能な住居の7棟全てが南北軸を東へ振っており、うち5軒(71%)が $N-10^{\circ}\sim 20^{\circ}-E$ に集中している。但し、この7棟の住居はいずれも豊川左岸に位置しており、当該期の豊川右岸の様相は不明である。平面形は面積同様確定資料が方形住居1棟のみで、この時代の傾向を論ずる事はできない。またこの時代になると周溝を伴う住居が5棟検出されており、住居に周溝を伴う構造に変化(復活?)したものと思われる。炉・カマドはカマドに関してはカマドが2棟と少数ではあるが確認されており、カマドの存在に関して不確定要素の強い古墳時代前期から資料を欠く古墳時代中期にかけて、東三河地域に広まっていったことが推定される。柱穴は変化なく4主柱穴の住居が1棟確認されている。

7世紀代 8遺跡18住居を検出、うち面積確定住居は5棟。最大住居は「宮沢」SB13の49.0㎡、最小住居は「麻生田」SB02の31.4㎡、平均は37.5㎡。面積の分布は30～40㎡の範囲に4棟(80%)が属しており、6世紀代の「見丁塚」SB02も31.9㎡とこの範囲であることから、平均的住居は弥生時代後期よりも拡大傾向にあると考えられる。この点とあわせて50㎡以上の大型住居が1棟検出されることも住居の拡大傾向に沿った動向である。方位は南北軸を西に振る住居が7棟(39%)あり、いずれも $N-0^{\circ}\sim 20^{\circ}-W$ の範囲に含まれている。東へ振る住居は11棟(61%)で分散して構築されているが、6世紀代に最も南北軸方向が集中した $N-10^{\circ}\sim 20^{\circ}-E$ に4棟(36%)の住居が含まれ、この7世紀代の住居も同じ傾向を示している。平面形は円形、長方形住居は検出されておらず、方形住居が5棟とやはりこの時代も方形住居が中心であることが理解できる。その他の施設についても周溝が構築され、カマドを伴い、柱は4主柱穴という住居が一般的と思われる。

以上の様に、古墳時代後期とした6世紀代と7世紀代の住居の各項目を比較した場合、いずれのデータに関しても同一範疇として捉えることができる。面積的には30～40㎡が平均となり、古墳前期には存在しなかった40㎡以上の比較的大型の住居が構築される様になり、縮小傾向にあった住居が拡大傾向に転じている。南北軸の方向については豊川右岸の場合は $N-10^{\circ}\sim 20^{\circ}-W$ 、豊川左岸では $N-10^{\circ}\sim 20^{\circ}-E$ が主方向となる。この6～7世紀にかけて東三河地域では地磁気が $N-10^{\circ}\sim 20^{\circ}-W$ 真北とずれており、この点から豊川右岸の住居はほぼ当時の磁北方向に南北軸が設定されていることが分かる。反面豊川右岸は磁北と40°近いずれを生じており、これについてはその理由は定かではない。平面形は方形に統一され、長方形住居が見られなくなる。そして周溝が再びこの時期には見られるようになり、柱穴は4主柱穴が引き続き基本構造とされる。さらに古墳時代前期には不確定要素が多かったカマドについてもこの時代にはほぼ定着すると思われ、7世紀代に入ると住居の一部を突出させカマドとする構造が見られるようになる。

V. 奈良時代

この時代の対象遺跡は「杉山」「公文」「石堂野」「諏訪」の4遺跡であるが、面積確定住居31棟のうち22棟が「諏訪」であるため、全体のデータが「諏訪」の傾向に大きく影響されることを避けるために、まず「諏訪」以外の3遺跡の分析を行い、その後「諏訪」との比較検討からこの時代の全体傾向を考える事とする。

「諏訪」以外の3遺跡で面積確定された住居は全部で9軒であり、最大住居は「石堂野」のSB36.0㎡、最小は同じ「石堂野」のSB17.2㎡、平均値は24.2㎡である。面積の分布は古墳時代後期にみら

れた30～40㎡の比較的大型の住居が依然3棟(33%)と存続している。これに対して古墳前期にみられた10～20㎡の小型住居も4軒(44%)と再び構築されるようになり、拡大住居の安定と縮小傾向が混在している。方位は南北軸を西へ振る住居が分散傾向にあるものの10棟(91%)と大半を占め、豊川左岸に位置する「公文」の住居1棟が南北軸を東へ振るのみである。平面形は方形以外の住居は確認されており、引き続き方形住居中心の傾向を示す。但し古墳時代後期より突出部をカマドとして伴う住居が検出されており、この中には突出部を伴った方形住居も含まれる。周溝、柱穴については変化は見られない。

上記の傾向と「諏訪」のデータを比較してみると、まず面積の点では「諏訪」の最大住居42.2㎡、最小住居8.7㎡、平均24.8㎡と最大・最小値に若干の相違が見られるものの、分布が分散的であること、10～20㎡に属する住居が9棟(41%)と最も集中していること、40㎡以上の住居も存在していること等、他の同時期の住居とほぼ同じ傾向を示すといえる。また、10㎡以下の小型住居の出現は奈良時代末から平安時代への移行期に住居の縮小傾向(小型化)が一層進んでいることを表している。次に方位の点についても、全体に分散傾向を示すこと、38棟(93%)の住居が南北軸を西へ振ることから、やはり他の住居と同じ傾向にあるといえる。但し、「諏訪」の3棟の住居が南北軸を東に振っており、今回分析対象としている全時代を通じて豊川右岸で南北軸を東に振る数少ない類型の存在を挙げることができる。その他の比較項目である周溝、カマド、柱穴に関しても同じ形態を有している。

しかし平面形では「諏訪」の面積確定22軒のうち方形住居が16棟(73%)、長方形住居が6棟(27%)検出されており、古墳時代からの方形住居単独から方形・長方形住居混合へと変化している。

以上のことから「諏訪」で検出された住居は一遺跡の状況を表しているのではなく、奈良時代全般の住居のあり方に規定されていると考えることができる。この事は平面形の方形・長方形混合の傾向が、奈良時代末から平安時代初めにかけて豊川流域全体に現れた変化であると断定することができる。

VI. 平安時代

4遺跡6住居を検出、うち面積確定住居は4棟。最大住居は「森岡」SB01の15.7㎡、最小住居は「西浦」SB01の6.5㎡、平均は12.9㎡である。4棟全てが20㎡以下と小型化しており、奈良時代末に示された住居の小型化傾向が定着している。方位は南北軸を西へ振る住居が2棟、東へ振る住居が4棟である。西へ振る2棟は豊川右岸に位置しN-0°～10°-Wの範囲に含まれ、当時の地磁気が現在の真北と比較した場合N-0°～10°-W程度のズレを生じている事から、これらの住居は古墳時代後期同様ほぼ当時の磁北を向いている事になる。これに対し東へ振る住居はいずれも豊川左岸に立地し、方位の統一性は見られない。平面形に関しては奈良時代同様方形住居3棟(75%)、長方形住居1棟(25%)と方形・長方形混合の傾向が継続していることが理解できる。その他の周溝・カマド・柱穴については変化は見られない。

3. まとめ

豊川流域の弥生中期以降の堅穴住居の変遷について、規模・方位・平面形を中心に分析を試みた結果、以下の様に結論付けることができる。

まず面積については、弥生中・後期が30㎡前後を平均とするのに対し、古墳時代前期には縮小傾向

を示す。これが後期に入ると再び拡大傾向に転じ弥生時代の規模にまで至るようになる。そしてまた奈良時代に入ると縮小し、平安時代には平均値が10m程度にまで縮小する。次に南北軸の方位に関しては、豊川を境として右岸は西へ、左岸は東へ振る傾向を読み取ることができる。この面積と方位との間には明確な相関関係⁽¹⁾は認められない。

平面形は弥生中期を除くと方形住居が基本であり、特に古墳時代にこの傾向が強く認められる。長方形住居は奈良時代末から少数であるが再び検出されるようになる。その他の項目については周溝、炉・カマドが古墳時代前期に変化の可能性を示すに止まり、各時代を通じて大きな変化は認められない。

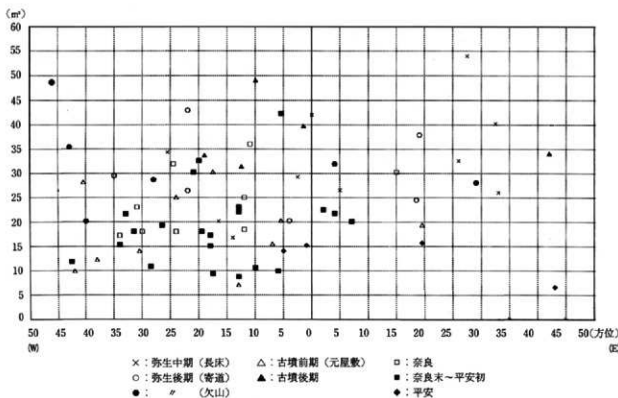
今回の分析対象とした住居の大半が調査区等の制約から一部検出というものであり、比較資料の絶対数が少ないため、必ずしも豊川流域の竪穴住居の各時代における様相を正確に表現しているとは言いがたい側面を有している。今後の資料の蓄積とさらに広範囲に於ける分析検討が要求される。

一註一

(1) この点に関しては調査担当者の判断に左右され、明確な基準の設定は困難な面がある。各報告書に記載されている平面形を(南北辺)÷(東西辺)の比率と比較した場合、方形とされている住居跡の大半のものが比率0.9から1.1の範囲に属していた。この結果に基づき今回は文中の様な分類を試みた。

(2)

(3) 面積及び方位による散布図



—参考文献—

- 『南貝津遺跡発掘調査報告書』新城市教育委員会 1989
- 『杉山遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1988
- 『諏訪遺跡・杉山端城』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1989
- 『宮沢遺跡』一宮町教育委員会 1989
- 『一宮東部地区は橋整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』一宮町教育委員会 1987
- 『麻生田大橋遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1991
- 『郷中・雨谷』豊川市教育委員会 1989
- 『石堂野遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1987
- 『石巻神郷地区は橋整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』豊橋市教育委員会 1986
- 『公文遺跡(II)』豊橋市教育委員会 1989
- 『見丁塚遺跡』豊橋市教育委員会 1990
- 『橋良遺跡現地説明会資料』豊橋市教育委員会 1989
- 『西山』豊橋市南部地区内陸用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』豊橋市遺跡調査会 1988
- 石野博信『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館 1990
- 宮本長二郎『古墳時代竈穴住居跡論』(『奈良国立文化財研究所学報 研究論集Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1989)
- 宮本長二郎『住生活』(『日本考古学を学ぶ②』有斐閣選書 1988)
- 宮本長二郎『関東地方の縄文時代竈穴住居の変遷』(『文化財論叢』同朋社)

第13表 豊川流域竈穴住居一覧表

遺跡名	遺跡名	時期	規 模	形 態	掘削比高	方位	床面積	炉・窑・F	周 溝	柱 穴
竈中遺跡	竈中S B01	弥生後期(寄道)	不明	不明	15cm	J	不明	不明	不明	
	竈中S B02	弥生後期(寄道)	2.9(半径)	円形	15cm	不明	26.14	不明	南西一部	
	竈中S B03	弥生後期(寄道)	(4.0)×(1.1)	隅丸(長)方形	15cm	40°	不明	不明		
	竈中S B04	弥生後期(寄道)	6.2×(2.2)	隅丸(長)方形	8cm	25°	(13.64)	地床炉(中央)	不明	
	竈中S B05	弥生後期(穴山)	(4.0)×(1.1)	隅丸(長)方形	12cm	14°	(44.0)	地床炉(中央)	不明	
	竈中S B06	弥生後期(寄道)	(5.4)×(2.4)	隅丸(長)方形	不明	22°	(21.96)	地床炉(北2+南)	南、南壁下	
	竈中S B07	11C前半	3.9×3.5	方形	7cm	5°	14.04	n→F(北壁中央)	不明	
	竈中S B08	古墳時代(元塚敷)	5.1×(2.6)	隅丸(長)方形	14cm	28°	(13.26)	不明	不明	
	竈中S B09	弥生後期(穴山)	4.0×(2.2)	不整隅丸方形	10cm	0°	(8.8)	不明	不明	
	竈中S B10	弥生後期(寄道)	5.0×(2.9)	隅丸(長)方形	14cm	10°	(14.5)	地床炉(?)	不明	
	竈中S B11	弥生後期(寄道)	不明	隅丸方形	3cm	-70°	不明	地床炉(南西有り?)	不明	
	竈中S B12	弥生後期(寄道)	不明	隅丸(長)方形	6cm	-75°	不明	地床炉(北寄り?)	不明	
	竈中S B13	7C前半	不明	隅丸方形	15cm	0°	不明	n→F(北壁奥面)	不明	
	竈中S B14	弥生後期(寄道)	不明	隅丸(長)方形	17cm	10°	不明	不明	不明	
	竈中S B15	弥生後期(寄道)	3.6×4.5	隅丸(長)方形	15cm	-66°	(16.2)	地床炉(中央)	北、南壁下	4本柱
	竈中S B16	7C代	3.7×(1.1)	隅丸方形	10cm	11°	(4.07)	不明	不明	4本柱
	竈中S B17	弥生中期(長沢)	3.0×4.1	隅丸(長)方形	8cm	0°	(12.3)	地床炉(2+南)	北壁下	
竈中S B18	弥生中期(長沢)	(1.3)×4.2	隅丸(長)方形	5cm	25°	(5.46)	不明	不明		
国分寺遺跡	国分寺1号住居	弥生時代	5.4×(3.4)	隅丸方形	30cm	8.5°	(18.36)	地床炉(中央)	一部確認	
	国分寺2号住居	弥生時代	4.1×(2.1)	隅丸(長)方形	不明	8°	(17.22)	不明	検出箇全部	
	国分寺3号住居	弥生時代	4.8×(2.1)	隅丸(長)方形	25cm	6.5°	(10.06)	不明	検出箇全部	
	国分寺H101	不明	不明	隅丸(長)方形	7cm	-10°	不明	不明	南壁から確認	
南貝津遺跡	南貝津S B01	不明	4.7×(1.4)	隅丸方形(?)	30-40cm	-54.5°	(6.58)	不明	不明	
	南貝津S B02	不明	5.5×5.5	隅丸方形跡	28-35cm	54°	30.25	南壁付近に礎土	不明	
	南貝津S B03	弥生後期(寄道)	4.3×4.7	隅丸方形跡	13-29cm	4°	(20.21)	中央に礎土	不明	
	南貝津S B04	弥生後期(穴山)	(4.0)×5.3	隅丸方形	16-43cm	6.5°	(21.2)	北東部に礎土	不明	東壁部
	南貝津S B05	不明	不明	隅丸方形跡	46cm	-21°	不明	不明	不明	
	南貝津S B06	弥生後期(穴山)	5.6×3.6	隅丸(長)方形	10-16cm	40°	(20.16)	礎土塊あり?	不明	
	南貝津S B07	不明	4.5×(1.3)	隅丸方形跡	16cm	34.5°	(5.85)	礎土	不明	
	南貝津S B08	古墳時代(元塚敷)	3.3×3.0	隅丸方形	14-19cm	42°	9.9	不明	不明	
	南貝津S B09	弥生後期(穴山)	5.0×5.6	隅丸(長)方形	11-16cm	-25°	28	不明	不明	
	南貝津S B10	弥生後期(寄道)	4.7×5.2	隅丸(長)方形	11-44cm	-18.5°	24.44	北壁側礎土	不明	
	南貝津S B11	弥生後期(穴山)	2.8×3.0	不整円形	10-20cm	不明	24.4-20	北西に礎土	不明	4柱穴
	南貝津S B12	弥生後期寄道・穴山	6.0×6.3	隅丸方形	14cm	-19°	37.8	北壁にn→F	不明	
	南貝津S B13	弥生後期穴山元塚敷	5.7×5.6	隅丸方形	9-31cm	-4°	31.92	礎土有り	不明	4柱穴
	南貝津S B14	不明	(4.5)×3.5	不整隅丸方形	10-30cm	-13°	(15.75)	不明	不明	
	南貝津S B15	古墳時代(元塚敷)	3.7×4.2	隅丸方形	21-49cm	7°	15.52	北東に礎土	不明	
南貝津S B16	不明	4.3×4.7	隅丸方形	22-59cm	-24°	30.21	西壁部に礎土	不明	4柱穴	
南貝津S B17	不明	(0.5)×3.7	隅丸(長)方形	37cm	-25.5°	(1.85)	不明	不明		
南貝津S B18	古墳時代(元塚敷)	(3.7)×(3.7)	隅丸方形跡	24-37cm	-5°	(13.69)	不明	不明		
南貝津S B19	弥生後期(寄道)	(2.5)×(4.5)	(楕円)長方形	34-49cm	74°	(11.25)	不明	不明		
南貝津S B20	古墳時代(元塚敷)	2.6×2.7	不整隅丸方形	28-32cm	13°	7.82	中央に礎土	不明		
宮沢遺跡	宮沢S B3	古墳時代(元塚敷)	4.4×4.4	隅丸方形	10-20cm	-19.5°	19.36	不明	不明	
	宮沢S B4	古墳時代(元塚敷)	3.5×3.5	隅丸方形	25cm	38°	12.25	不明	不明	
	宮沢S B5	古墳時代(元塚敷)	3.5×4.0	隅丸(長)方形	17cm	30.5°	14	不明	不明	
	宮沢S B6	古墳時代(元塚敷)	4.5×4.5	隅丸方形	35-50cm	5.5°	30.25	不明	不明	
	宮沢S B7	古墳時代(元塚敷)	5.0×5.0	隅丸方形	15cm	34°	25	南西隅に礎土	不明	4柱穴
	宮沢S B8	古墳時代(元塚敷)	5.3×5.3	隅丸方形	11-15cm	40.5°	28.09	西壁付近に礎土	不明	4柱穴
	宮沢S B9	古墳時代(元塚敷)	(4.5)×4.5	隅丸方形	16cm	27.5°	(20.25)	不明	不明	
	宮沢S B10	古墳時代(元塚敷)	5.5×5.5	隅丸方形	35cm	17.5°	30.25	北東隅に礎土	不明	4柱穴
	宮沢S B13	7C前半	7.0×7.0	隅丸方形	10-17cm	10°	49	北壁にn→F	不明	4柱穴
多分塚遺跡	宮沢S B14	古墳時代(元塚敷)	(-)×4.9	不整形	27cm	15.5°	不明	不明	不明	
	多分塚S B1	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
	多分塚S B2	7C前半	5.0×(3.8)	隅丸方形(a)	10m程度	-30.5°	(19.0)	不明	西側に礎石	
青木遺跡	青木1 S B1	7C代	7.6×7.0	不明	15m程度	-22°	(53.2)	不明	不明	4柱穴
	青木1 S B2	7C代	(1.5)×6.8	隅丸(長)方形	不明	-8.5°	(10.2)	北壁中央に礎土	不明	
	西塚敷1 S B1	6C後半-7C前半	(6.3)×7.0	隅丸(長)方形	15m程度	-26.5°	(44.1)	北壁中央に礎土	不明	
西塚敷1 S B2	6C後半-7C前半	(2.1)×(4.9)	隅丸(長)方形	25m程度	-12°	(10.29)	北壁中央に礎土	不明		

遺跡名	遺構名	時期	規模	形態	埋没比高	方位	床面積	炉・カマド	周溝	柱穴
諏訪遺跡	諏訪S B012	弥生後期(穴山)	5.9×(-)	不明	25m程度	不明	不明	不明	有り	
	諏訪S B014	弥生後期(穴山)	(2.4)×(2.4)	隅丸(長)方形	25m程度	22°	(5.76)	不明	四周	
	諏訪S B101	弥生後期	5.8×7.4	隅丸方形	不明	22°	42.92	不明	四周	
	諏訪S B102	弥生後期(寄道)	4.8×5.5	隅丸長方形	25cm	22°	26.4	不明	四周	5柱穴
	諏訪S B106	弥生時代	4.3×5.4	隅丸長方形	18cm	32°	23.22	不明	四周	
	諏訪S B110	弥生後期(穴山)	5.3×5.4	隅丸方形	60cm	28°	28.62	不明	東壁以外	
	諏訪S B111	弥生後期(穴山)	5.7×6.2	隅丸長方形	不明	43°	35.34	不明	四周	
	諏訪S B114	弥生後期(寄道)	4.9×6.9	隅丸長方形	30cm	35°	(29.40)	不明	四周(+)	
	諏訪S B124	弥生後期(寄道)	(2.0)×(2.0)	隅丸(長)方形	30cm	24°	(4.0)	不明	一部確認	
	諏訪S B141	弥生後期(穴山?)	3.8×(2.2)	不明	不明	18°	(12.75)	不明	一部確認	
	諏訪S B001	8 C後半-9 C前半	6.6×6.4	隅丸方形	8-25cm	5.5°	42.24	北壁中央にカマド	不明	4柱穴
	諏訪S B002	8 C後半-9 C前半	4.8×4.6	隅丸方形	12m程度	13°	22.08	北壁中央に礎土	不明	北東隅
	諏訪S B003	8 C後半-9 C前半	(2.2)×(3.4)	隅丸方形(+)	20m程度	18°	(7.48)	不明	不明	
	諏訪S B004	8 C後半-9 C前半	4.5×(4.3)	隅丸方形	20m程度	30°	(19.35)	不明	不明	
	諏訪S B005	8 C後半-9 C前半	3.0×3.1	方形	25m程度	17.5°	9.3	北壁突出部に礎土	四周	
	諏訪S B006	8 C後半-9 C前半	4.3×3.5	長方形	10m程度	18°	15.05	東北隅に礎土	不明	
	諏訪S B007	8 C後半-9 C前半	4.4×4.1	方形	45cm程度	19.5°	18.94	北壁付近に礎土	不明	
	諏訪S B008	8 C後半-9 C前半	不明	不明	20m程度	7.5°	不明	不明	不明	
	諏訪S B009	8 C後半-9 C前半	(3.2)×4.3	隅丸(長)方形	4cm	20°	(13.76)	不明	ほぼ四周	
	諏訪S B010	8 C後半-9 C前半	3.3×(2.4)	隅丸(長)方形	5cm	27°	(7.92)	不明	不明	
	諏訪S B011	8 C後半-9 C前半	5.8×5.6	不整形方形	23cm	20°	32.48	北壁中央に礎土	不明	
	諏訪S B013	8 C後半-9 C前半	4.7×4.9	方形	10m程度	13°	23.03	北壁中央にカマド	カマド部分以外	
	諏訪S B015	8 C後半-9 C前半	4.1×4.2	方形	不明	18°	17.22	東壁突出部に礎土	不明	
	諏訪S B016	8 C後半-9 C前半	3.3×3.2	不整形方形	不明	10°	10.56	北壁付近に礎土	不明	
諏訪S B017	8 C後半-9 C前半	不明	不明	15m程度	14°	不明	不明	不明		
諏訪S B018	8 C後半-9 C前半	不明	不明	20m程度	26°	不明	不明	不明		
諏訪S B020	8 C後半-9 C前半	不明	不明	20m程度	32°	不明	北壁突出部に礎土	不明		
諏訪S B021	8 C後半-9 C前半	4.2×4.3	方形	20m程度	31.5°	18.06	東壁突出部に礎土	不明		
諏訪S B026	8 C後半-9 C前半	4.1×5.3	長方形	6m程度	-4°	21.73	北壁中央に礎土	不明		
諏訪S B104	8 C後半-9 C前半	不明	不明	30cm	1°	不明	不明	不明		
諏訪S B105	8 C後半-9 C前半	5.2×5.8	長方形	5-21cm	21°	30.16	不明	不明		
諏訪S B108	8 C後半-9 C前半	(2.8)×4.5	隅丸(長)方形	30cm	24°	(12.60)	不明	不明		
諏訪S B109	8 C後半-9 C前半	4.1×4.9	長方形	5-11cm	-7°	20.09	北壁中央に礎土	不明		
諏訪S B112	8 C後半-9 C前半	4.5×3.4	長方形	不明	34°	15.3	不明	不明		
諏訪S B115	8 C後半-9 C前半	4.8×4.5	方形	13m程度	33°	21.6	北壁付近に礎土	不明		
諏訪S B116	8 C後半-9 C前半	3.1×3.8	不整形方形	8m程度	42.5°	(11.78)	不明	不明		
諏訪S B117	8 C後半-9 C前半	3.0×3.6	長方形	6m程度	28.5°	16.8	不明	不明		
諏訪S B118	8 C後半-9 C前半	5.8×6.8	長方形	1m程度	39°	39.44	不明	不明		
諏訪S B119	8 C後半-9 C前半	4.1×4.7	長方形	1m程度	36.5°	19.27	不明	不明		
諏訪S B120	8 C後半-9 C前半	(5.3)×4.5	長方形	20cm	29°	(23.85)	不明	不明		
諏訪S B121	8 C後半-9 C前半	3.0×(4.4)	不整形方形	25cm	22.5°	(13.5)	不明	不明		
諏訪S B133	8 C後半-9 C前半	3.1×2.8	不整形方形	不明	13°	8.68	不明	不明		
諏訪S B135	8 C後半-9 C前半	(2.8)×(2.8)	隅丸(長)方形	30cm	20°	(11.20)	北壁中央に礎土	不明		
諏訪S B136	8 C後半-9 C前半	3.0×3.3	不整形方形	5m程度	6°	9.9	不明	西壁以外		
諏訪S B139	8 C後半-9 C前半	(3.2)×(3.0)	隅丸(長)方形	不明	31°	(9.60)	不明	検出部全部		
諏訪S B201	8 C後半-9 C前半	5.0×4.5	長方形	13-20cm	-2°	22.5	不明	不明		
諏訪S B202	8 C後半-9 C前半	(-)×3.6	不明	85m程度	1°	不明	不明	不明		
諏訪S B203	8 C後半-9 C前半	(1.4)×(1.4)	不明	60m程度	1°	(2.24)	不明	不明		
諏訪S B301	9 C後半-10 C	3.3×4.6	長方形	25m程度	1°	15.18	不明	不明		
諏訪S B302	8 C後半-9 C前半	3.6×(3.5)	隅丸(長)方形	15m程度	32°	(12.60)	不明	不明		
諏訪S B303	8 C後半-9 C前半	(2.4)×(2.2)	長方形	10cm	23.5°	(5.28)	北壁突出部に礎土	不明		
諏訪S B304	8 C後半-9 C前半	2.4×(-)	不明	20m程度	30°	不明	北壁突出部に礎土	不明		
杉山遺跡	杉山S B01	8 C代(奈良時代)	5.0×5.0	方形	4m	12°	25	不明	不明	
	石堂野S B02	弥生後期穴山文化層	7.0×(6.9)	方形	2-15cm	46°	(48.3)	不明	検出部全部	4柱穴
	石堂野S B18	弥生後期穴山文化層	5.3×(2.5)	不明	2-10cm	21°	(13.25)	不明	不明	
	石堂野S B01	8 C中葉-8 C後葉	4.9×4.7	不定方形	1-4cm	31°	23.03	不明	不明	
	石堂野S B05	8 C中葉-8 C後葉	(3.8)×(4.2)	方形	3-8cm	46°	(15.96)	不明	東壁一部検出	
	石堂野S B03	8 C中葉-8 C後葉	4.3×4.3	突出部6方形	5-10cm	12°	18.49	不明	不明	
	石堂野S B06	8 C中葉-8 C後葉	(2.4)×4.0	方形	4-10cm	9.5°	(9.60)	東壁にカマド	不明	

遺跡名	遺 蹟 名	時 期	規 模	形 態	縦形比高	方位	床面積	伊・カマド	具 満	柱 穴	
石室群遺跡	石室群S B07	8 C中葉-8 C後葉	4.1×4.4	隅丸方形	3-8cm	30°	18.04	不明	不明		
	石室群S B09	8 C中葉-8 C後葉	4.2×4.1	方形	1-5cm	34°	17.22	不明	不明		
	石室群S B10	8 C中葉-8 C後葉	5.7×5.6	方形	5-10cm	24.5°	31.92	不明	不明		
	石室群S B14	7 C中葉-7 C後葉	5.8×(5.0)	方形(欠)	10-35cm	12.5°	(29.00)	北壁に伊・カマド	鏡出部全部		
	石室群S B15	8 C中葉-8 C後葉	4.3×4.2	方形	10-25cm	24°	18.06	不明	北・西壁		
	石室群S B16	8 C中葉-8 C後葉	6.2×5.8	不整形方形	3-35cm	11°	35.96	不明	北・南壁一部		
	石室群S B21	不明	6.4×(2.5)	方形(欠)	10-15cm	46.5°	(16.0)	不明	不明		
	見丁塚遺跡	見丁塚1号	古墳時代後期	4.5×(3.0)	隅丸(長)方形	不明	-29.5°	(13.50)	北壁にカマド	西側に這るか	
		見丁塚2号	古墳時代後期	(4.0)×(5.1)	隅丸(長)方形	不明	-27°	(24.99)	不明	西側に這るか	
		見丁塚3号	古墳時代後期	6.7×(4.2)	隅丸(長)方形	不明	-9°	(28.14)	北壁にカマド	西側に這るか	
見丁塚4号		古墳時代後期	(2.6)×2.5	隅丸長方形	不明	-19.5°	(6.50)	東壁にカマド	不明		
見丁塚S B1		7 C後葉	(5.1)×3.2	隅丸脚縁長方形	7cm	-10.5°	(16.32)	不明	西側に這るか		
見丁塚S B2		6 C中葉	5.6×5.7	隅丸正方形	14cm	-4°	31.92	南西隅にカマド	西側に這る	4柱穴	
見丁塚S B3		7 C前葉	(5.3)×(6.3)	隅丸長方形	不明	-14°	33.39	不明	西側に這るか	4柱穴	
見丁塚S B4		6 C中葉-7 C前葉	(1.7)×(5.0)	不明	不明	-14°	(8.50)	不明	鏡出部全部		
見丁塚S B5		6 C中葉	(4.8)×(4.3)	不明	不明	-11°	(20.64)	不明	西壁に鏡		
見丁塚S B6		6 C前葉-6 C中葉	(1.0)×3.8	隅丸長方形	13cm程度	-19°	(3.8)	不明	鏡出部全部		
縄文遺跡	見丁塚S B7	7 C頃	(4.5)×(3.1)	隅丸(長)方形	13cm程度	-8°	(13.95)	不明	鏡出部全部		
	見丁塚S B8	6 C末葉-7 C前葉	(2.5)×(4.2)	隅丸(長)方形	16cm程度	-17°	(10.50)	不明	鏡出部全部		
	縄文1号住居	弥生中期(長束)	5.5×7.3	隅丸長方形	不明	-32.5°	40.15	不明	北壁付近に伊・カマド		
	縄文2号住居	弥生中期(長束)	(7.0)×(6.0)	隅丸長方形	不明	0°	(42.0)	不明	あり		
	縄文3号住居	弥生中期(長束)	4.5×(6.5)	(隅丸)長方形	不明	2.5°	(29.25)	不明	あり		
	縄文4号住居	弥生中期(長束)	6.5×(4.0)	隅丸長方形	不明	-33°	(26.0)	不明	あり	4柱穴	
	縄文5号住居	弥生中期(長束)	不明	不明	不明	-6°	不明	不明	あり		
	縄文6号住居	弥生中期(長束)	5.3×(5.0)	隅丸方形	不明	-5°	26.5	不明	あり	4柱穴	
	縄文7号住居	弥生中期(長束)	5.5×(5.0)	隅丸(長)方形	不明	10°	(27.5)	不明	あり		
	縄文8号住居	弥生中期(長束)	3.8×5.3	隅丸長方形	不明	16.5°	(20.14)	東壁部に伊・カマド	あり		
森岡遺跡	縄文9号住居	弥生中期(長束)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	あり		
	縄文10号住居	弥生中葉(長束)	3.5×4.8	隅丸長方形	不明	14°	16.8	東壁部に伊・カマド	一部あり		
	縄文11号住居	弥生中葉(長束)	5.5×7.3	隅丸長方形	不明	-32.5°	40.15	西壁部に伊・カマド	一部あり	4柱穴	
	縄文12号住居	弥生中葉(長束)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		
	縄文13号住居	弥生中葉(長束)	6.0×9.0	隅丸長方形	不明	-27.5°	54	西壁部に伊・カマド	あり	4柱穴	
	縄文14号住居	弥生中葉(長束)	(5.0)×(6.5)	隅丸長方形	不明	-26°	(32.5)	不明	不明	4柱穴	
	森岡S B01	11C(平安時代)	4.3×4.1	方形	1-7cm	-19.5°	15.7	北壁中央にカマド	一部あり	4柱穴	
	森岡S B02	7 C後半	3.3×(4.4)	(長)方形	6-10cm	-9.5°	(11.4)	北壁付近にカマド	東壁のみ		
	森岡S B03	7 C後半	4.9×(2.8)	方形	1-11cm	-19.5°	(13.4)	不明	不明		
	森岡S B04	11C(平安時代)	3.5×(3.4)	方形	5-9cm	-18°	(19.8)	不明	不明		
森岡S B05	7 C後半	不明	不明	4cm程度	-19.2°	不明	不明	不明			
森岡S B06	7 C後半	4.5×(2.9)	方形	5-9cm	-31.5°	(11.7)	不明	不明			
森岡S B07	7 C後半	5.9×5.7	方形	1-11cm	-42°	34	北壁中央にカマド	不明			
森岡S B08	弥生後葉(山中)	不明	隅丸(長)方形	5-9cm	不明	不明	中央部に伊・カマド	南壁のみ			
森岡S B09	弥生中期(高蔵)	(5.2)×6.6	方形	3-10cm	25.5°	(34.3)	中央部に伊・カマド	北壁のみ			
森岡S B10	弥生後葉(山中)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明			
西瀬遺跡	西瀬S B1	11C(平安時代)	2.3×2.5	隅丸方形	25cm	-43°	6.53	東にカマド	不明		
	西瀬S B2	11C(平安時代)	(1.7)×2.5	隅丸方形	12-20cm	-33°	(6.46)	東にカマド	不明		
公文遺跡	公文S B1	奈良時代	5.8×5.2	長方形	約40cm	-15°	30.2	不明	北壁以外		
	公文S B2	奈良時代(?)	3.1×2.9	長方形	約40cm	-9°	9.0	北壁にカマド	不明		
東生田大塚遺跡	東生田S B01	古墳時代後葉	5.8×5.8	方形	4cm	19°	33.64	北にカマド	北壁以外		
	東生田S B02	古墳時代後葉	5.5×5.7	不整形方形	不明	12.5°	31.25	不明	不明		
	東生田S B03	古墳時代後葉	6.2×6.4	方形	1°	39.68	北にカマド	不明			

*注(1)方位の項目のマイナスの数字は、南北軸を東へ振っていることを示している。

(2)分析項目で、規模の単位はm、床面積はm²、柱穴の4柱穴は主柱穴が4本であることを表示している。

(3)方位は、いずれも真北で表示してある。

(4)規模の計測不能のものは(一)で表示。

第7章 結 語

以上、数章に分かって、森岡遺跡の調査報告を行ってきた。残された課題も多いが、最後に簡単なまとめを行ない結語としたい。

今回の調査で検出した遺構・遺物は、弥生時代中・後期、古墳時代後期、平安時代（10世紀末）、鎌倉時代（13世紀）の4時期にまとめられる。

弥生時代中・後期の遺構としては、竪穴式住居跡3・方形周溝墓1・土坑多数が検出された。竪穴式住居跡と方形周溝墓が近接して検出されたことは集落構成を考える上で注目された。またSB10から一括出土した高藏式土器は東三河地方では従来調査例の少ないものである。

古墳時代後期の遺構としては6世紀代の森岡第2墳の周溝および7世紀代の竪穴式住居群がみられ、ことに森岡第2号墳の南側周溝SD01から据え置かれた状況で出土した「SD01土器群」は、従来、県下では例をみないものであり注目を集めた。その一括性および点数の多さで土器の編年研究等に資すること大であるとともに、その性格が問われるところであった。7世紀代の竪穴式住居跡群からは断片的ではあるが、土師器・須恵器の伴出例（SB06）があり従来不明であった7世紀代の土器の様相が知られた。

平安時代（10世紀末）の遺構は、調査区の北部で竪穴式住居跡群および掘立柱建物跡が検出されたが、遺構数は少ない。なお、この10世紀末の竪穴式住居跡は、当地方における最も新しい時期の検出例である。

鎌倉時代（13世紀前半）の遺構は少なく、土坑および掘立柱建物跡かと思われるものが僅かに検出されたにとどまる。SK01より土鍋A（伊勢型鍋）が渥美窯産とみられる灰釉系陶器碗（山茶碗）とともに出土し、この土鍋Aを介して他地域の窯製品編年との併行関係を知る手掛かりが得られた。

なおこのほか、量的には少ないが、縄紋土器、瓜部式土器、奈良時代の須恵器等が包含層中より出土しており、周辺に当該期の遺構の存在が予想される点も留意する必要がある。

<付表>

第14表 出土遺物登録番号一覧表

※遺跡登録番号は「VITM-89」である ※E：土器・陶器類 S：石製品 X：ガラス製品

遺構	神四	遺物 番号	登録 番号	種 類 等	遺構	神四	遺物 番号	登録 番号	種 類 等			
SB10	"	23	1	E-1	弥生土器 壺	SB09	24	16	E-30	弥生土器 壺		
		"	2	E-2	弥生土器 壺		"	17	E-31	弥生土器 高杯		
		"	3	E-3	弥生土器 壺		"	18	E-32	弥生土器 台付甕		
		"	4	E-4	弥生土器 壺		"	19	E-33	弥生土器 台付甕		
		"	5	E-5	弥生土器 壺		"	20	E-34	弥生土器 台付甕		
		"	6	E-6	弥生土器 壺		"	21	E-35	弥生土器 台付甕		
		"	7	E-7	弥生土器 壺		SD02	25	22	E-36	弥生土器 壺	
		"	8	E-8	弥生土器 高杯			"	23	E-37	弥生土器 壺	
		"	9	E-9	弥生土器 高杯			"	24	E-38	弥生土器 壺	
		"	10	E-10	弥生土器 甕		"	25	E-39	弥生土器 壺		
		"	11	E-11	弥生土器 台付甕		SD08	25	26	E-40	弥生土器 壺	
		"	12	E-12	弥生土器 高杯			包含層	26	27	E-41	弥生土器 壺
		"	13	E-13	弥生土器 壺				"	28	E-42	弥生土器 壺
		"	14	E-14	弥生土器 壺				"	29	E-43	弥生土器 壺
SB09	"	24	1	E-15	弥生土器 壺	"			30	E-44	弥生土器 壺	
		"	2	E-16	弥生土器 壺	"			31	E-45	弥生土器 壺	
		"	3	E-17	弥生土器 高杯	"			32	E-46	弥生土器 壺	
		"	4	E-18	弥生土器 台付甕	"			33	E-47	弥生土器 壺	
		"	5	E-19	弥生土器 甕	"			34	E-48	弥生土器 壺	
		"	6	E-20	弥生土器 甕	"	35	E-49	弥生土器 壺			
		"	7	E-21	弥生土器 甕	"	36	E-50	弥生土器 壺			
		"	8	E-22	弥生土器 甕	"	37	E-51	弥生土器 壺			
		"	9	E-23	弥生土器 甕(ヒツムア)	"	38	E-52	弥生土器 壺			
		"	10	E-24	弥生土器 台付甕	"	39	E-53	弥生土器 壺			
		"	11	E-25	弥生土器 甕	"	40	E-54	弥生土器 壺			
		"	12	E-26	弥生土器 甕	"	41	E-55	弥生土器 壺			
		"	13	E-27	弥生土器 甕	"	42	E-56	弥生土器 壺			
		"	14	E-28	弥生土器 甕	"	43	E-57	弥生土器 壺			
		"	15	E-29	弥生土器 台付鉢	"	44	E-58	弥生土器 壺			

遺構	挿図	遺物 番号	登録 番号	種 類 等	遺構	挿図	遺物 番号	登録 番号	種 類 等	
包含層	26	45	E-59	弥生土器 高杯	S D01 土器群 (A群)	36	77	E-86	土師器 碗	
"	"	46	E-60	弥生土器 壺		"	"	78	E-87	土師器 碗
"	"	47	E-61	弥生土器 壺		"	"	79	E-88	土師器 碗
"	"	48	E-62	弥生土器 甕		"	"	80	E-89	土師器 碗
"	"	49	E-63	弥生土器 甕		"	"	81	E-90	土師器 小型壺
"	"	50	E-64	弥生土器 高杯		"	"	82	E-91	土師器 小型壺
"	"	51	E-65	弥生土器 (台)		"	"	83	E-92	土師器 小型壺
SK164	27	52	S-1	磨製石斧		"	"	84	E-93	土師器 小型壺
攪乱	"	53	S-2	磨製石斧(敵石に転用)		"	"	85	E-94	土師器 壺
SD01	"	54	S-3	打製石鏃		"	37	86	E-95	土師器 甕
"	"	55	S-4	打製石鏃		"	"	87	E-96	土師器 甕
"	"	56	S-5	磨製石鏃		"	"	88	E-97	土師器 甕
S D01 土器群 (A群)	36	57	E-66	須恵器 杯身		"	"	89	E-98	土師器 甕E
"	"	58	E-67	須恵器 杯身		"	"	90	E-99	土師器 甕E
"	"	59	E-68	須恵器 杯身		"	"	91	E-100	土師器 甕
"	"	60	E-69	須恵器 杯身	"	"	92	E-101	土師器 甕D	
"	"	61	E-70	須恵器 杯身	"	"	93	E-102	土師器 甕D	
"	"	62	E-71	須恵器 杯身	"	"	94	E-103	土師器 甕C	
"	"	63	E-72	須恵器 杯身	"	38	95	E-104	土師器 甕B	
"	"	64	E-73	須恵器 杯身	"	"	96	E-105	土師器 甕B	
"	"	65	E-74	須恵器 杯蓋	"	"	97	E-106	土師器 甕A	
"	"	66	E-75	須恵器 有蓋高杯	"	"	98	E-107	土師器 甕A	
"	"	67	E-76	須恵器 有蓋高杯	"	"	99	E-108	土師器 甕A	
"	"	68	E-77	須恵器 有蓋高杯	"	"	100	E-119	土師器 甕A	
"	"	69	E-78	土師器 高杯	"	39	101	E-110	土師器 甕G	
"	"	70	E-79	土師器 高杯	"	"	102	E-111	土師器 甕F	
"	"	71	E-80	土師器 高杯	"	"	103	E-112	土師器 甕C	
"	"	72	E-81	土師器 高杯	"	"	104	E-113	土師器 甕C	
"	"	73	E-82	土師器 高杯	"	"	105	E-114	土師器 甕C	
"	"	74	E-83	土師器 高杯	"	"	106	E-115	土師器 甕	
"	"	75	E-84	土師器 鉢	"	"	107	E-116	土師器 埴A	
"	"	76	E-85	土師器 碗	"	"	108	E-117	土師器 埴A	

付 表

遺 構	坪図	遺物 番号	登録 番号	種 類 等	遺 構	坪図	遺物 番号	登録 番号	種 類 等		
S D01 土器群 (A群)	39	109	E-118	土師器 埴A	S D01 土器群 (B群)	43	141	E-150	土師器 甕C		
	"	40	110	E-119		土師器 甕	"	"	142	E-151	土師器 甕C
	"	"	111	E-120		土師器 甕	"	"	143	E-152	土師器 甕C
	"	"	112	E-121		土師器 甕H	"	44	144	E-153	土師器 甕D
	"	"	113	E-122		土師器 甕I	"	"	145	E-154	土師器 甕
	"	"	114	E-123		土師器 甕	"	"	146	E-155	土師器 甕C
	"	"	115	E-124		土師器 甕J	"	"	147	E-156	土師器 甕F
	"	"	116	E-125		土師器 甕	"	"	148	E-157	土師器 甕C
	"	"	117	E-126		土師器 台付甕B	"	"	149	E-158	土師器 甕F
	"	"	118	E-127		土師器 甕	"	45	150	E-159	土師器 甕K
	"	"	119	E-128		土師器 甕	"	"	151	E-160	土師器 甕K
	S D01 土器群 (B群)	"	"	120		E-129	土師器 甕	"	"	152	E-161
"		"	121	E-130	土師器 甕	"	"	153	E-162	土師器 甕G	
42		122	E-131	須恵器 杯蓋	"	"	154	E-163	土師器 甕J		
"		"	123	E-132	須恵器 杯身	"	"	155	E-164	土師器 甕J	
"		"	124	E-133	須恵器 杯身	"	"	156	E-165	土師器 甕	
"		"	125	E-134	須恵器 杯身	"	46	157	E-166	土師器 台付甕A	
"		"	126	E-135	須恵器 有蓋高杯	"	"	158	E-167	土師器 台付甕A	
"		"	127	E-136	土師器 高杯	"	"	159	E-168	土師器 台付甕A	
"		"	128	E-137	土師器 甗	"	"	160	E-169	土師器 台付甕A	
"		"	129	E-138	土師器 甗	"	"	161	E-170	土師器 台城甕A	
"		"	130	E-139	土師器 小型壺	"	"	162	E-171	土師器 台付甕A	
"		"	131	E-140	土師器 小型壺	"	47	163	E-172	土師器 甕A	
"		"	132	E-141	土師器 鉢	"	"	164	E-173	土師器 甕C	
"		"	133	E-142	土師器 瓶	"	"	165	E-174	土師器 甕C	
"		"	134	E-143	土師器 甕	"	"	166	E-175	土師器 甕K	
"		"	135	E-144	土師器 小型壺	"	"	167	E-176	土師器 甕	
"		"	136	E-145	土師器 埴A	"	"	168	E-177	土師器 甕	
"		"	137	E-146	土師器 埴B	"	"	169	E-178	土師器 甕	
"	43	138	E-147	土師器 甕C	"	"	170	E-179	土師器 甕		
"	"	139	E-148	土師器 甕C	"	"	171	E-180	土師器 甕		
"	"	140	E-149	土師器 甕C	"	"	172	E-181	土師器 甕J		

遺構	挿図	遺物 番号	登録 番号	種 類 等	遺構	挿図	遺物 番号	登録 番号	種 類 等
S D01 土器群 (B群)	47	173	E-182	欠番	S B04	50	197	E-206	灰釉陶器 碗
S B02	49	174	E-183	土師器 甕	"	"	198	E-207	灰釉陶器 皿
"	"	175	E-184	土師器 甕	"	"	199	E-208	灰釉陶器 皿
"	"	176	E-185	土師器 甕	"	"	200	E-209	灰釉陶器 碗
S B07	"	177	E-186	土師器 甕	"	"	201	E-210	灰釉陶器 碗
"	"	178	E-187	土師器 甕	"	"	202	E-211	灰釉陶器 小型瓊
"	"	179	E-188	土師器 甕	"	"	203	E-212	土師器 甕
S B06	"	180	E-189	土師器 甕	"	"	204	E-213	土師器 甕
"	"	181	E-190	土師器 甕	"	"	205	E-214	土師器 甕
"	"	182	E-191	土師器 甕	"	"	206	E-215	土師器 甕
"	"	183	E-192	須恵器 杯蓋	S K03	"	207	E-216	灰釉陶器 碗
S X01	"	184	E-193	土師器 甕	包含層	"	208	E-217	灰釉陶器 碗
"	"	185	E-194	土師器 甕	S K01	"	209	E-218	中世土器 土鍋A
"	"	186	E-195	土師器 甕	"	"	210	E-219	中世土器 土鍋A
"	"	187	E-196	土師器 甕	"	"	211	E-220	中世土器 土鍋A
"	"	188	E-197	須恵器 高杯	"	"	212	E-221	中世土器 土鍋A
"	"	189	E-198	須恵器 高台付杯身	"	"	213	E-222	灰釉系陶器 碗
S B11・ VIF-4 b 注カ	48	190	E-199	須恵器 杯身	S K70	"	214	E-223	灰釉系陶器 碗
S B11	"	191	E-200	土師器 甕	"	"	214	E-224	中世土器 皿
包含層	"	192	E-201	須恵器 杯蓋	S K149	"	216	E-225	灰釉系陶器 碗
"	"	193	E-202	須恵器 杯身	S D01 土器群 (A群)	B	E-227	土師器 甕	
"	"	194	E-203	須恵器 高杯		C	E-228	"	
"	"	195	E-204	須恵器 杯蓋	S D01 土器群 (B群)	F	E-231	"	
"	"	196	E-205	須恵器 盤		G	E-232	"	

淡洲神社北遺跡発掘調査報告

第1章 調査の経過

1 調査にいたる経過

平成2年4月から9月にかけて、東三河環状線の建設工事に伴う事前調査として、淡洲神社北遺跡の発掘調査を実施した。

淡洲神社北遺跡は、豊川市小田淵地内にあり、平成元年9月、愛知県埋蔵文化財調査センター及び豊川市教育委員会の分布踏査によって確認され、同月、財団法人愛知県埋蔵文化センター及び豊川市教育委員会によって試掘調査が行われた。試掘時には明確な掘り込みなどは確認できなかったが、周辺の畑地などには古代から中世にかけての遺物が確認でき、こうした散布状況から発掘調査を行なうこととなった。

遺跡名に関しては、近年の大規模な水田開発によって字境の多くが消失してしまっているため、調査地南方に近接する神社名を採用し、「淡洲神社北遺跡」と呼称することとした。

2 調査の経過

調査予定地には、道路及び農業用水路、排水路などが横切っていたため、A～Cの3地区に分割した。A区は、北東側に既に建設されていた橋脚内の空地が利用できたことから、排土処理に問題は無かったが、B、C区では有効な排土処理場所が見つからなかった。さらにこのB、C区内には2本の水路が存在していたため、3区同時掘削は不可能となり、この水路間に鉄板を渡して、B、C区相互を排土処理場とすることとした。

調査は最初にC区を4月から5月まで行ない、5月から6月にかけてA、B区の調査を行なった。この調査期間は、周辺の水田への引水期と重なったため、特にB（西）区及びC区においては、激しい湧水を受けた。

調査区 期間	A	B	C
4月			●●●● ●●●● ●●●●
5月	●●●● ●●●● ●●●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●●● ●●●● ●●●●
6月	●●●● ●●●● ●●●●	●●●● ●●●● ●●●●	

第15表 調査日程

第2章 位置と環境



第74図 愛知県位置図

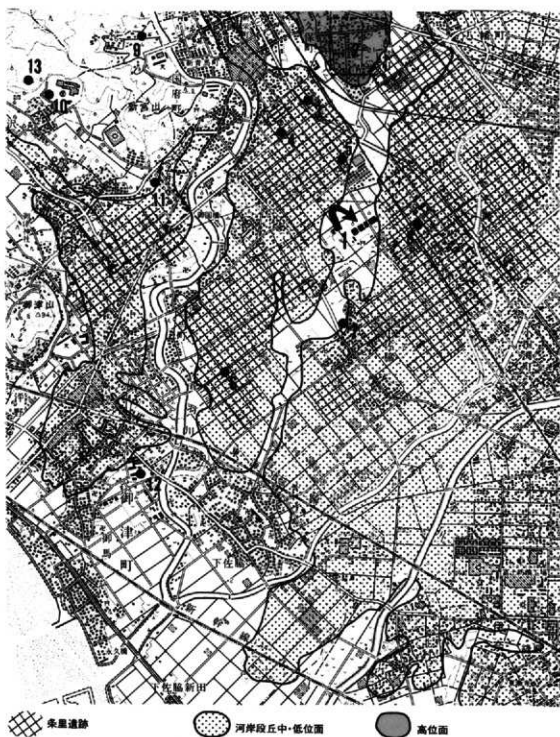


第75図 豊川市位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。淡洲神社北遺跡は、この愛知県東部、豊川市の西部に所在し、音羽川と西古瀬川に挟まれた、標高8～9mの浅い谷状の沖積低地に立地する。遺跡の周辺地形は、北側に白鳥、八幡台地の高位面、東から南側にかけては小坂井台地の中、低位面、西側には宝飯山地がひかえ、さらに音羽川によって形成された低い台地によって囲まれている。このような低地には他にも、御津川、白川、佐奈川、豊川などの大小河川が流れており、これらの旧河道も随所に認められる。この旧河道間には、網目状に自然堤防が発達しており、その上に集落が散在している。調査地周辺には水田地帯が広がっており、微高地上は畑地として利用されている。

調査地の周辺地域には、各時代を通じて多くの遺跡が確認されている。遺跡の西方約500mの距離には、縄文時代後・晩期の是区田遺跡がある。縄文時代晩期から弥生時代にかけては、堂前遺跡、河原田遺跡、船原遺跡が調査地を囲むように、河岸段丘中、低位面上に存在する。さらに南方には、弥生時代中期の標式遺跡として著名な長床遺跡がある。古墳時代のものとしては、船山第1号墳、船山塚古墳などの前方後円墳や、横穴式石室の穴観音古墳などが見られる。この時期から古代にかけての集落跡としては、昭和60年に愛知県埋蔵文化財センターによって調査された石堂野遺跡がある。本遺跡の北約1km、白鳥台地の先端には、古代三河国の中心地として著名な三河国府推定地が所在する。そして前述の河岸段丘中、低位面には、為常に代表される条里遺構が広がっている。

淡洲神社北遺跡の位置する浅い谷状の低地には、白鳥台地の西より南下する安藤川という小河川が流れている。現在ではこの安藤川は、ほとんどの部分が農業用水路に改修されてしまっているため、流路の確認は困難である。しかしこの川は、かつては国府とその外港「御津」とを結ぶ、水運上重要な位置を占める河川であった可能性が高い(前田1987)との見方もあり、遺跡の位置関係を考える上では、興味深いものである。



1. 淡州神社北遺跡
2. 三河国府推定地
3. 坊入遺跡
4. 国府高等学校遺跡
5. 船原遺跡
6. 堂前遺跡
7. 河原田遺跡
8. 是区田遺跡
9. 山ノ入遺跡
10. 石堂野遺跡
11. 船山塚古墳
12. 長床遺跡
13. 穴観音古墳

第76図 周辺遺跡位置図

第3章 概 要

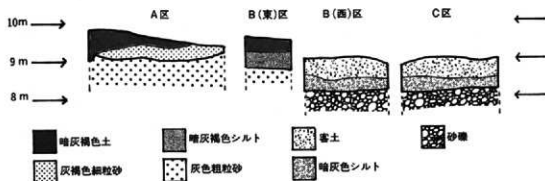
1 調査区と基本層序

調査区は3区(A、B、C)設定されたが、基本層序はA及びB(東)区と、B(西)及びC区とでは様相を異にしていた。それぞれの立地は、A及びB(東)区では南北が畑地であり、B(西)及びC区では水田になっている。

A及びB(東)区は、現地表面が9.5~9.8m(T、P)で、その下にしよりの悪い暗灰褐色土が20~80cm堆積していた。この表土の下には、灰褐色細粒砂若しくは暗灰褐色シルトが堆積しており、基盤層は湧水を伴う淡灰色粗粒砂層であった。

B(西)及びC区は、現地表面が約9mで、その下には30~50cmの厚さで客土が存在していた。この客土の下には、40~50cmの厚さで暗灰褐色シルトが存在していた。このシルト層は現代の水田耕作土と思われ、その直下には基盤層として、粗粒砂を伴う直径2~5cmの円礫が堆積していた。

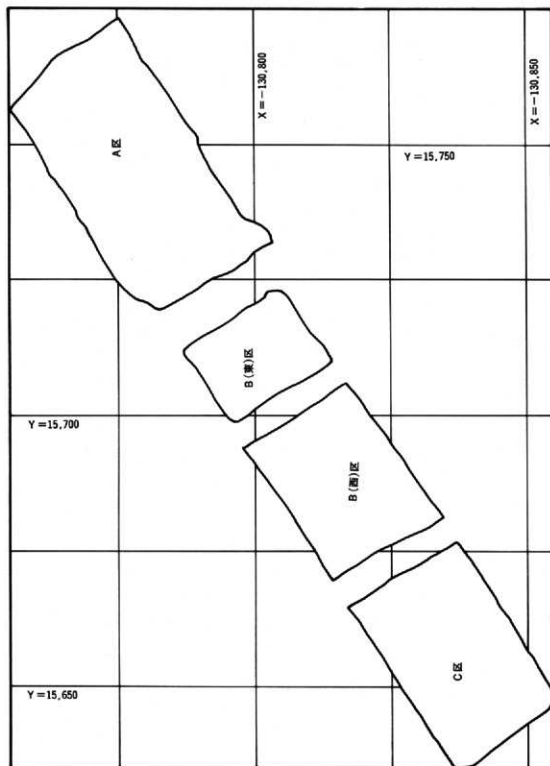
遺物の出土状況はB(西)及びC区に集中しており、A及びB(東)区からはほとんど出土しなかった。出土遺物はこの水田耕作土直下、砂礫層直上より出土しており、明確な遺物包含層、遺構を検出することはできなかった。こうした出土状況の違いは、因らずも基本層序の違いと共通しており、出土遺物の埋藏過程を窺う上で興味深い。



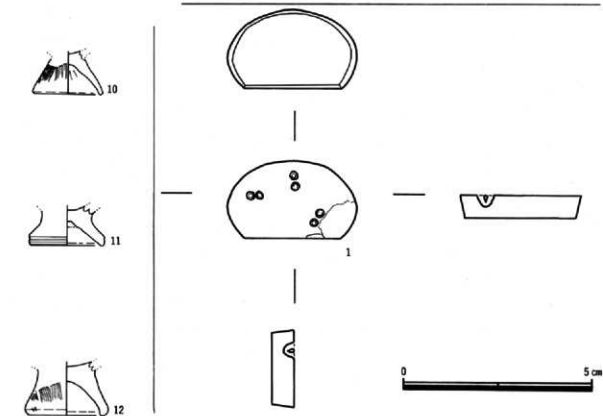
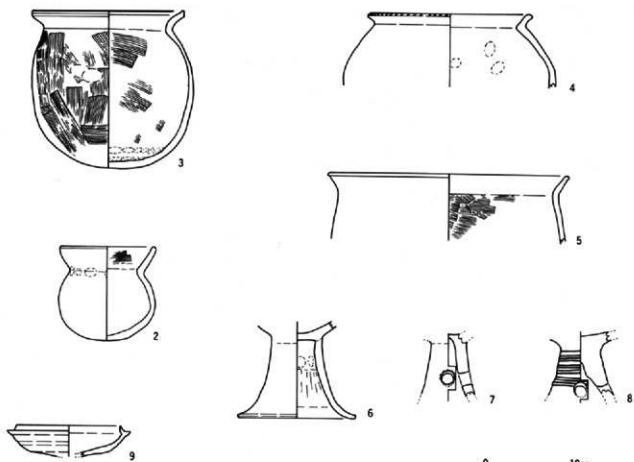
第77図 調査区基本層序図

2 遺 物

出土遺物は、先述したようにB(西)及びC区に集中し、全て砂礫層直上の検出遺物である。これらは一定の時期幅を持たず、弥生土器、古式土師器、須恵器等の破片等が混在していた。以下、代表的な遺物について説明する。



第78図 調査区位置図 (X・Y 数は国土院標準値を示)



第79图 淡州神社北遺跡出土遺構実測図

1は石帯(丸駒)である。縦2.1cm、横3.4cmを測り、裏面には二孔一対の穿孔が不規則に3ヶ所穿たれている。裏面は面取り程度であるが、その他は丁寧に磨きこまれている。緑灰色を呈し、材質はチャートである。

2は小型の壺形土器で、頸部に指頭圧痕を残す。3～5は壺形土器である。3は胴部内、外側に、5は内側にハケ目調整が施されている。4は口縁部に刻目を有し、最大径は胴部中上に求められそうであるが、その形状などから有脚の可能性も考えられる。6は脚部上方の径が太目であることや、脚部に接続されている底部が平坦な形状から、台付壺の可能性が考えられ、時期的には寄道期～欠山期のもと思われる。7、8は高杯の脚部である。残存部中に7は1ヶ所、8は4ヶ所の透し穴が穿たれている。8は脚部上方に直線文が施されており、寄道期のもと思われる。10～12は、台付壺又は壺形土器の脚部である。10は薄手で、外側にはハケ目調整が施されている。11、12は共に厚手で、11の脚端部外側には凹線が施されており、長床期のものかと思われる。

9は須恵器杯身である。蓋受け部は内傾化し、小型化しており、底部外側は右回転のヘラ切りのままであり、その形状から7C前半代のもと思われる。

3 ま と め

淡洲神社北遺跡は、調査の結果、河岸段丘の中、低位面に挟まれた浅い谷状の地形中に立地しており、明確な遺構及び包含層は存在せず、出土遺物には弥生、古墳時代の遺物が混在していることがわかった。こうした結果から、本遺跡は第一次の遺物包含地とは考えにくく、河川等によって運搬された第二次の遺物散布地と考えられるのである。さらに、周辺畑地に散布する古代から中世にかけての時期の遺物は、今回の調査区では僅かに認められただけであった。したがって周辺畑地に散布する遺物については、畑地を造成する際持ち込まれた土に混入していた可能性が考えられる。しかしながら北方に国府推定地を控え、東西を糸里地割に挟まれた地から、律令体制と深く関わる石帯が出土したことは、この浅い谷状の地形を、国府とその外港「御津」とを結ぶ、水運上重要な位置を占める河川であった(前田1987)とする見方の一助となるであろう。また弥生、古墳時代の遺物は、上流域の文化動態を考える上で、各時期の参考資料となるであろう。

参考文献

前田清彦(1987)「為当糸里遺跡発掘調査報告書」 豊川市教育委員会

番号	出土地点	器 種	登録番号	番号	出土地点	器 種	登録番号
1	IXG 3 r	石帯(丸駒)	S-1	7	IXG 8 j	高 杯	E-7
2	C区表採	壺	E-2	8	IXG 9 k	〃	E-8
3	IXG 6 j	甕	E-3	9	IXG 8 j	杯 身	E-9
4	IXG 8 k		E-4	10	C区表採	台付壺脚	E-10
5	〃	甕	E-5	11	〃		E-11
6	IXG 8 m		E-6	12	IXG 7 k		E-12

第16表 掲載遺物一覧表

図版・図面



上：遺跡遠景（西北より）

中：調査地近景（崖上 南西より）

下：発掘前の調査区（廃材等除去後）



調査区全景(上が北)



調査区全景

上：北より

下：南より



上：調査区北部全景（南西より）

下：調査区南部全景（北西より）



上：調査区北部（北より）

下：調査区南部（南より）



上：調査区中央（古墳の周溝—SD01西より）

下：SD01土器群（南より）



上：SD01土器群（西より）

下：SD01土器群（一部取り上げ後 西より）



SD01土器群近景（東より）

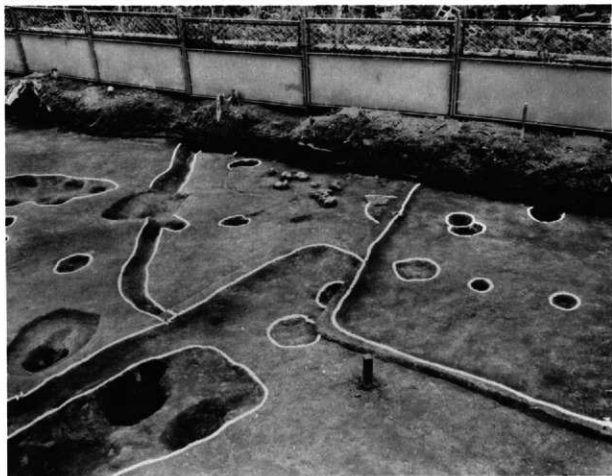
上：A群

下：B群



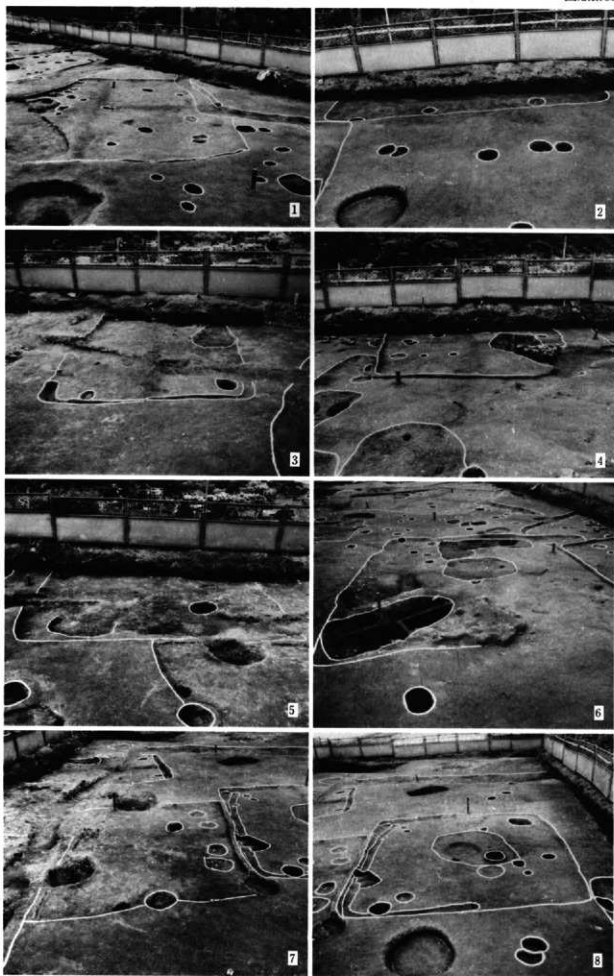
上：SD01土器群（東より）

下：SD01土器群取り上げ後（南より）



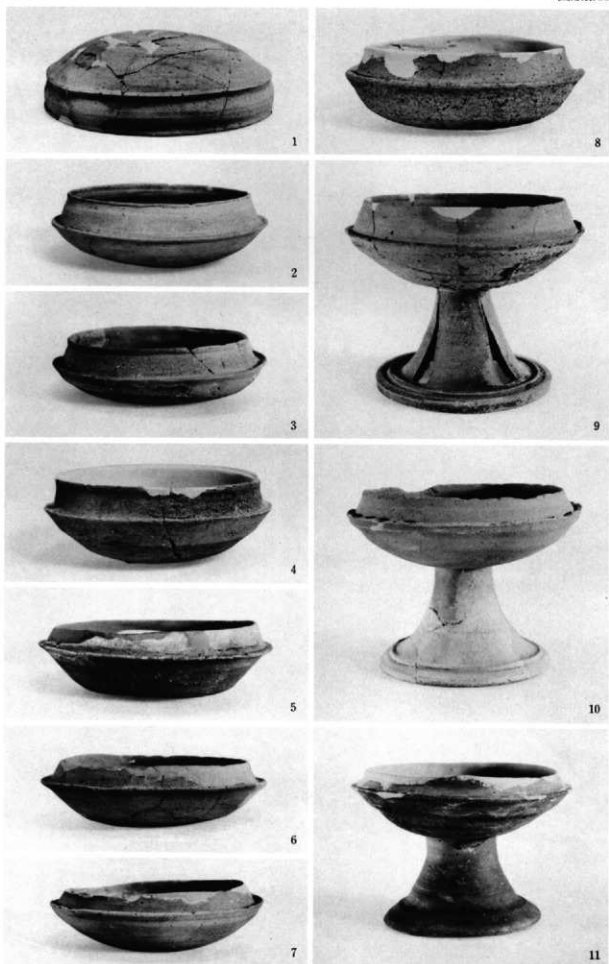
上：SB08およびSB06・SB07（東より）

下：SB10（西より）

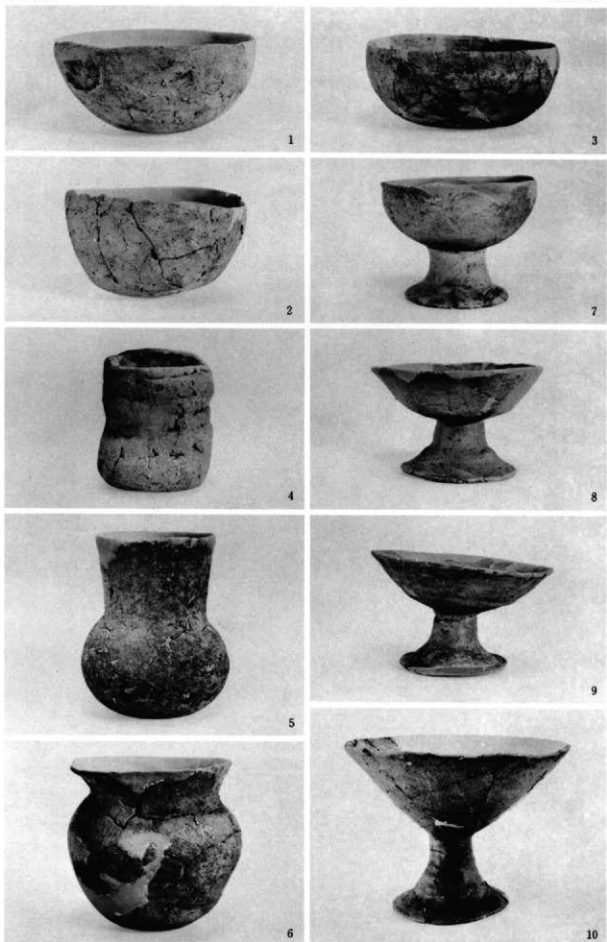


竪穴住居跡

- | | | | | | | | |
|---|-------------|---|------------|---|------------|---|------------|
| 1 | SB09 (北東より) | 2 | SB12 (西より) | 3 | SB02 (東より) | 4 | SB06 (東より) |
| 5 | SB03 (東より) | 6 | SB07 (北より) | 7 | SB04 (南より) | 8 | SB01 (南より) |



SD01土器群 出土遺物(1) 須惠器



SD01土器群 出土遺物(2) 土師器

約1/3 (4:1/2.5 10:1/4)

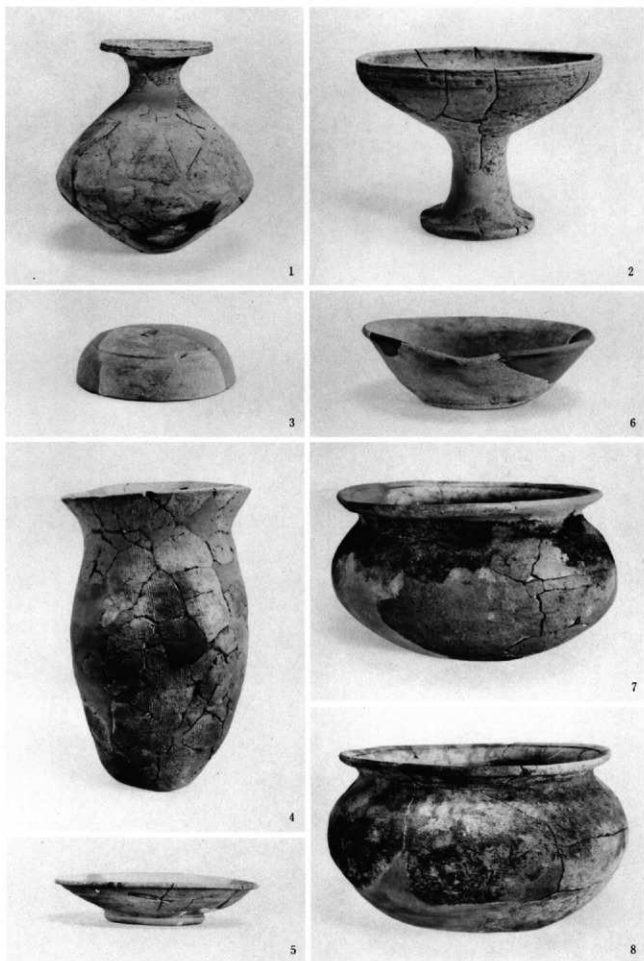




SD01土器群 出土遺物(4) 土師器



SD01土器群 出土遺物(5) 土師器



SB10 (1・2)・SB06 (3・4)・SB04 (5)・SK01 (6~8) 出土遺物



A区 表土掘削
(南より)



A・B区 全景
(南西より)



A・B区 全景
(北より)

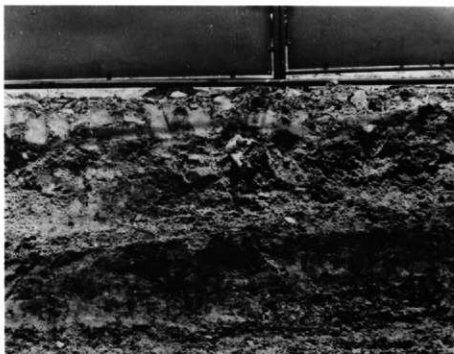
C区 表土掘削
(北より)



C区 全景
(北東より)

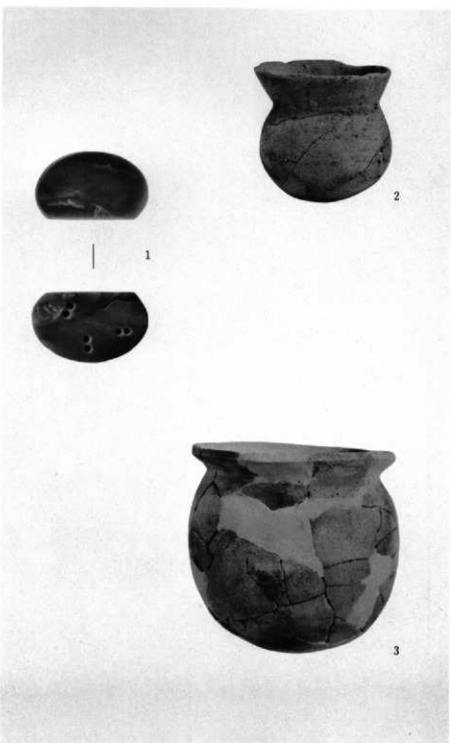


C区 南東壁断面
(北西より)

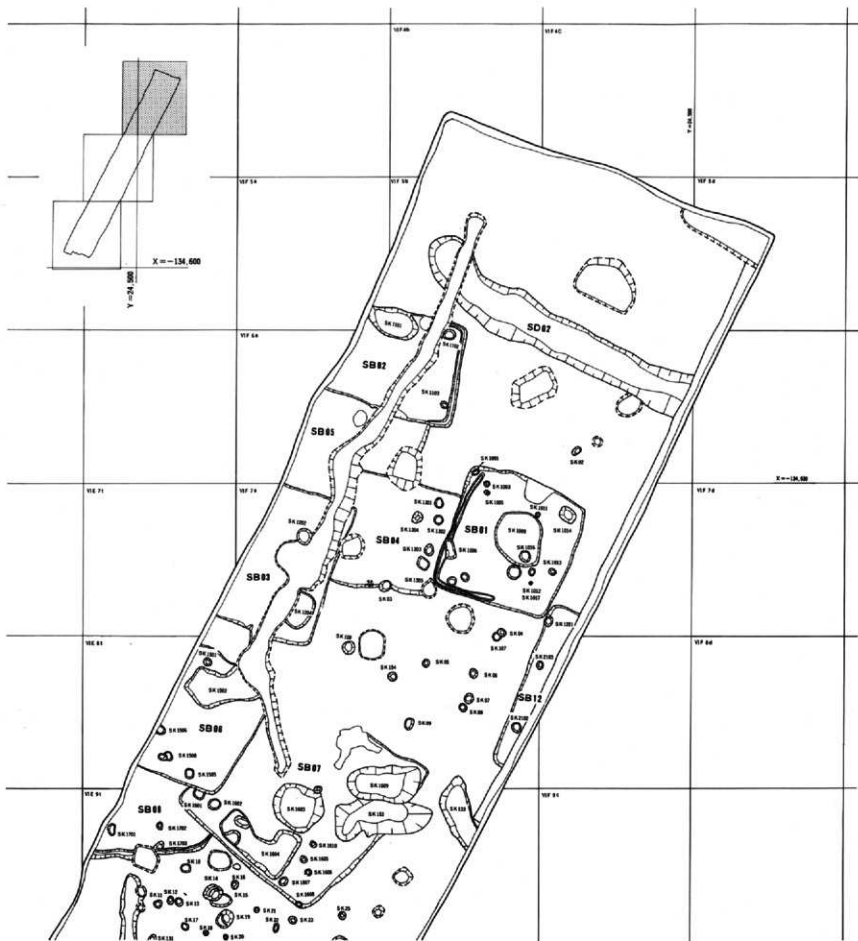




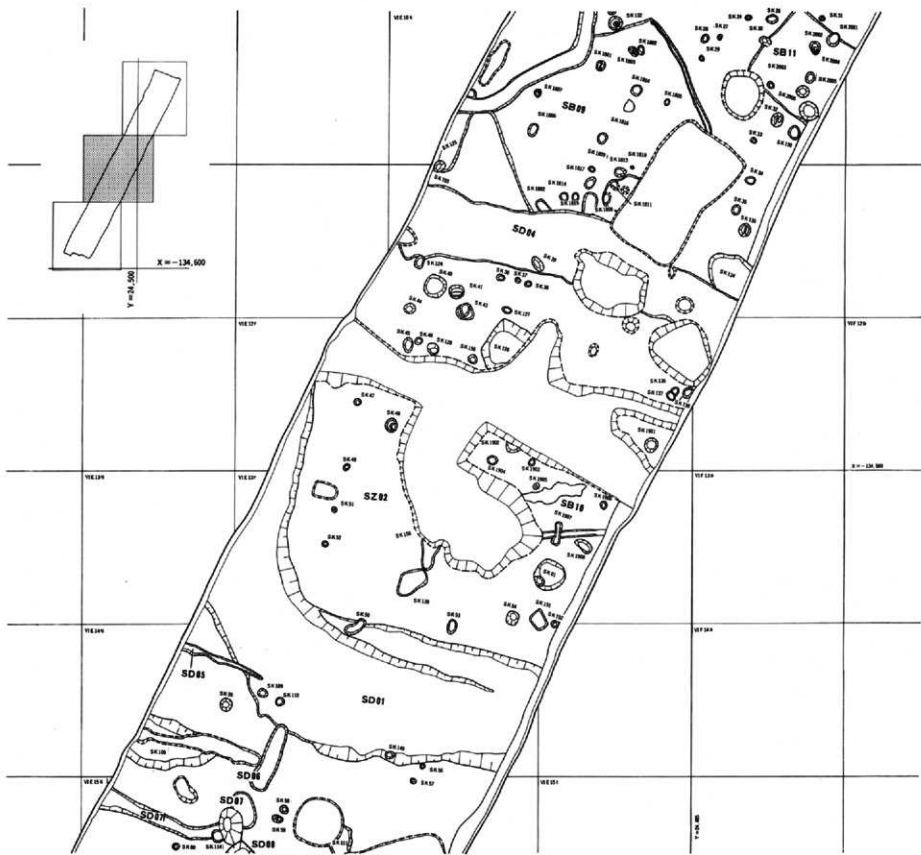
調査区西景



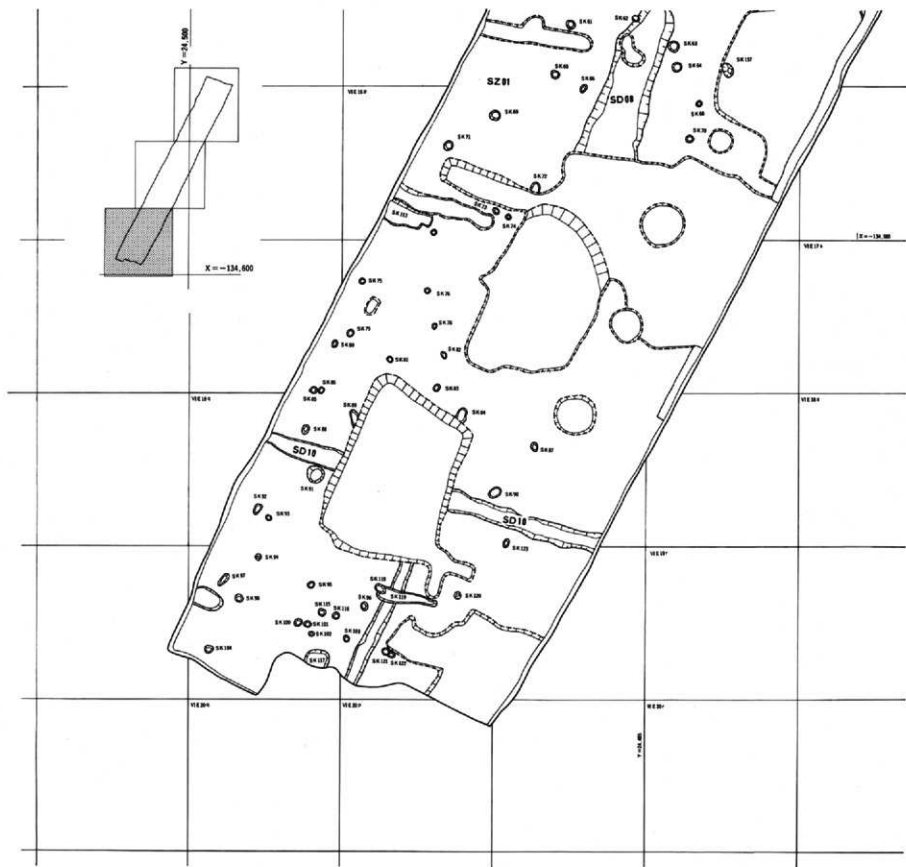
出土遺物
(1 121/1
2. 3 121/3 釐尺)



図面第1 森林道路 遺構実測図①(1:125)



圖面第 2 凌川遺跡 遺構采掘圖② (1 : 125)



図面番 3 森岡道跡 遺構実例31 (1 : 125)

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第22集

森 岡 遺 跡
淡 洲 神 社 北 遺 跡

1991年3月31日

編 集 行 財団法人
愛知県埋蔵文化財センター
印 刷 日 本 印 刷 株 式 会 社